はじめに

本調査研究、「地域課題の解決と女性の経済的自立に関する調査研究及びプログラム開発」は、国立女性教育会館の平成23年度から平成27年度までの中期計画「（1）喫緊の課題に関する先駆的調査研究の実施」にもとづき、平成24年度の調査研究として取り組みました。今年度の計画は、「地域課題の解決と女性の経済的自立に関する調査研究及びプログラム開発」をテーマに2年計画で行なう2年次として、地域の課題解決のための活動を行う女性の経済的自立の可能性につながるためのプログラムを開発することです。

つまり地域団体や女性団体、NPO団体やボランティア・グループなどを通して地域活動を行っている女性、もしくはNPOや起業に関心のある女性を対象に、NPO活動や起業活動が女性の就労の場となると同時に地域課題の解決にもなるような地域人材育成のためのプログラムを実施・開発することでした。

そのために、越谷市男女共同参画支援センター「ほっと越谷」と福島県男女共生センター「女と男の未来館」にご協力いただき、「地域課題の解決と女性の経済的自立に向けて」というテーマで講座を実施いたしました。講座の実施報告書の作成には、講座開催にむけての準備段階でどのような話し合いをしたのか、目的や対象者はどのように設定したのか、スケジュールや事例報告者はどのように決めたのかなど、詳細かつ具体的な記述に注力いたしました。

本報告書が、男女共同参画センターや生涯学習センターなど、地域課題解決のための人材育成を目的にした講座等で活用されることを願います。

なお、今回のプログラム開発のためにご協力いただきました越谷市男女共同参画支援センター「ほっと越谷」と福島県男女共生センター「女と男の未来館」の職員のみなさま、事例報告をしてくださったみなさまはじめ、本調査研究のためにお力添えいただきました関係各位にこの場をかりて厚くお礼申し上げます。

平成25年3月

独立行政法人国立女性教育会館
理事長　内海　房子

目　次

はじめに

Ⅰ 調査研究の概要
1．研究の目的 …… 1
2．研究の背景 …… 1
3．研究方法と計画 …… 3

Ⅱ プログラムの実施
1．越谷市男女共同参画支援センター「ほっと越谷」のプログラム …… 6
（1）プログラムの概要 …… 6
（2）プログラム実施までの準備過程 …… 7
（3）学習支援について …… 11
（4）プログラムの流れ …… 14
（5）２月９日のフォローアップ講座報告 …… 25
（6）成果と課題 …… 28
◇参考資料Ａ …… 31

2．福島県男女共生センター「女と男の未来館」のプログラム …… 59
（1）プログラム実施までの準備過程 …… 59
（2）プログラムの概要 …… 61
（3）学習支援について …… 65
（4）プログラムの流れ …… 65
（5）フォローアップ講座－座談会の実施 …… 73
（6）成果と課題 …… 74
◇参考資料Ｂ …… 77

Ⅲ プログラム全体の成果と課題 ……115

【特　論】
1．韓国における女性就労支援の現状とその示唆するもの　李　正連 ……117
2．今後のNPO、コミュニティ・ビジネスへの調査に向けて　藤本　隆史 ……123

Ⅰ　調査研究の概要

１．研究の目的

本調査研究は、平成 23 年度から平成 24 年度まで 2 年計画の調査研究である。2 年計画の目的は、地域の課題解決のための活動を行う女性の経済的自立の可能性について分析・検討し、活動に参加している女性もしくはこれから参加しようという女性を対象にしたプログラムの開発をすることである。2 年計画の 2 年次である平成 24 年度の目的は、地域の課題解決のための活動を行う女性の経済的自立の可能性につながるためのプログラムを開発することが目的である。つまり、地域団体や女性団体、NPO 団体やボランティア・グループなどを通して地域活動を行っている女性、もしくは NPO や起業に関心のある女性を対象に、NPO 活動や起業活動が女性の就労の場となると同時に地域課題の解決にもなるような地域人材育成のためのプログラムを実施・開発することである。

２．研究の背景

（１）地域活動の無償性・低報酬

現在、地域の課題解決のための地域活動・社会活動に参加するのは多くが女性たちである。こうした地域活動・社会活動を担う女性たちが、地域の子育て問題・高齢者問題などに取り組み、地域を支えてきた。しかし一方で、こうした地域活動・社会活動の無償性もしくは低報酬、つまり地域を支える女性たちの活動の重要性に相反して、経済的自立は困難であるという問題も指摘されているところである。このことは、「女性の再チャレンジと NPO についての調査報告書」（内閣府男女共同参画局推進課、平成 21 年 3 月）や「女性の NPO 活動の現状と課題－キャリア支援から地域づくりへ－」（国立女性教育会館、平成 20 年 3 月）の結果からも明らかである。

また、国立女性教育会館の「経済的自立につながる女性の課題解決型地域活動に関する調査研究」（平成 23 年 3 月、以後、前回調査と称す）によると、地域活動・社会活動を担う女性の所属団体からの年収は、「50 万円未満」30.1%、「50 万円以上 103 万円未満」18.1%、「103 万円以上 200 万円未満」14.1%、「200 万円以上」23.6%、「無回答」14.1%であった。これを、NPO や起業組織（地域活動・社会活動の延長線上にある株式会社・有限会社・個人経営)別にみると、NPO では、「50 万円未満」33.5%、「50 万円以上 103 万円未満」21.1%、「103 万円以上 200 万円未満」15.3%、「200 万円以上」19.6%であった。一方、起業組織では、「50 万円未満」18.3%、「50 万円以上 103 万円未満」15.1%、「103 万円以上 200 万円未満」7.5%、「200 万円以上」38.7%であった。

（２）地域活動による経済的自立の必要性

こうした NPO や起業組織で活動する女性たちの経済的自立に関する意識をみると、「夫の収入で生計が成り立っても、妻の収入はある程度は必要だ」と回答している女性が、団

体からの年収「50 万円未満」の層で 61.5%、「50 万円以上 103 万円未満」で 50.0%、「103 万円以上 200 万円未満」で 63.9%、「200 万円以上」で 76.5%であった（他の選択肢は、「夫の収入で生計が成り立つなら、妻の収入がなくてもよい」「夫の収入で生計が成り立つなら、妻の収入は家計補助的でよい」「わからない」である）。

また、地域活動・社会活動と報酬の関係については、「社会のために活動しているが、社会的企業や NPO 法人の給料で生活しているのだから、報酬は一般の平均的給与に見あう額が必要だ」と回答している女性が、団体からの年収「50 万円未満」の層で 47.7%、「50 万円以上 103 万円未満」で 47.4%、「103 万円以上 200 万円未満」で 60.7%、「200 万円以上」で 70.6%であった（他の選択肢は、「報酬は交通費など実費程度でよい」「どうにか生活できる程度の報酬でよい」「わからない」である）。

以上から NPO や起業組織で活動する女性たちは、妻の収入は家計補助的ではなく「ある程度必要」と考えており、地域活動・社会活動の報酬も「平均的給与に見あう額が必要だ」と考えていることがわかる。つまり、女性の経済的自立を求めるとともに、地域活動・社会活動に報酬を求めているのである。

さらに、地域活動・社会活動を担う女性の経済的自立には、所属する組織の経済的基盤が重要であり、組織・団体の運営･マネジメントも重要である。したがって前回調査では、団体・会社調査も実施したわけだが、そこから明らかになった課題を整理すると以下の通りである。

第一に、NPO・起業組織ともに、「事業収入の増収」が課題となっている。団体・会社調査票の自由回答をみると、寄付もなかなか集まらず、行政から事業を受託してもその資金は安定的ではなく、また有償化してもその収益だけでは限界がある。こうした地域活動・社会活動の延長線上にある事業は、現行の制度のもとでは、資金の確保・増収が課題であることが明らかになった。

第二に、NPO・起業組織の課題は、「後継者の確保・育成」である。会員の高齢化がすすむ中、若い世代の人材確保が難しく、中心となるメンバーの世代交代も課題となっている。

そして第三に、「職員・社員の給与の引き上げ」である。これは、「事業収入の増収」と関連するものであり、事業収入が増収されれば、職員や社員の給与も上がり、給与が上がれば後継者も確保できるという関係である。

以上のように、NPO・起業組織の代表も、組織・団体の課題は、事業収入の増収とともに職員・社員の給与の引き上げが課題であると認識している。

このように、地域活動・社会活動を担う女性たちは、活動に見合う報酬が必要であると考え、また、NPO・起業組織の代表も「職員・社員の給与の引き上げ」を課題としていることが明らかとなった。

このことを踏まえて、本調査研究は、地域の課題解決のための活動を行う女性の経済的自立にむけて、活動に参加している女性もしくはこれから参加しようという女性を対象にしたプログラムの開発を目的とする。

３．研究方法と計画

平成 24 年度計画；地域活動による経済的自立の促進をテーマに 2 年計画で行う調査研究の 2 年次として、起業やコミュニティ・ビジネス支援のための講座を行っている女性関連施設等を対象にプログラムを開発・実施し、報告書を作成する。

年度計画にしたがった実施内容は、次の通りである。

（１）　プログラムの作成

プログラムの作成については、以下の点に留意する。

１）調査結果の活用

① 平成 22 年度のアンケート調査の分析結果ならびにヒアリング調査（平成 22 年度・平成 23 年度、参考資料参照）の分析結果を基礎に、プログラムを作成する。

② また、これらアンケート調査の結果ならびにヒアリング調査の結果（事例紹介という形式で）を研修講義の際に活用する。

③ ヒアリング調査先を研修の際のフィールド・ワークとして位置づけ、調査先の見学を組み入れられるよう計画を立てる。

２）プログラムの内容

④ プログラムの内容は、単に NPO・起業のノウハウ、つまり申請の仕方や組織運営の方法など実務的なものだけでなく、女性が NPO・起業を立ち上げる意味をジェンダー的視点および女性の生涯発達の視点から考えることができるようにする。

⑤ また、実験プログラムである本講座を修了した後も、NPO・起業に向けて受講者同士のネットワークが構築できるように、受講者の関係つくりにも考慮した講座とする。

⑥ 実施施設が確定したら、対象者の属性や課題をより具体的に把握する。

（２）　実施施設の確定

① 実施施設は、概ね 2 ヵ所とする。選定に際しては、平成 23 年度の女性関連施設調査でのアンケート結果（参考資料参照）を参考にする。該当施設 94 施設の中から確定するが、できるだけ本調査研究でヒアリング調査を実施した組織の見学を取り入れたいので、その点を考慮する。

② NPO・起業支援を実施している女性関連施設、もしくは、これから実施しようとしている施設に着目したい。

以上の研究目的・方法・内容をもって、平成 24 年度はプログラム開発をおこなった。

（野依　智子）

Ⅱ　プログラムの実施

プログラム実施の対象地域ならびに共催施設を、越谷市男女共同参画支援センター「ほっと越谷」（以下、「ほっと越谷」と称す）と福島県男女共生センター「女と男の未来館」（以下、「女と男の未来館」と称す）とした。

「ほっと越谷」を対象としたのは、コミュニティ・ビジネス支援や再就職準備セミナーなどの講座に取り組んでおり、女性の再就労や社会貢献のための事業を展開しているためである。とりわけコミュニティ・ビジネス支援では、首都圏近郊の農産物に着目した産業振興策として越谷市も力を入れている。

もう一つの共催施設を「女と男の未来館」にしたのは、東日本大震災によって農業はじめ従来の生業の場を失ったり、雇用の場を失った女性が多くおり、そうした女性を対象にコミュニティ・ビジネスなど地域課題の解決と同時に収入につながるような活動の支援ができないものかと考えたからである。実際、「女と男の未来館」職員とプログラムを企画する段階で趣旨は変化するのだが、その点の詳細については、本報告書の新井報告に譲ることとする。さらに、「女と男の未来館」では、センター事業としてチャレンジ応援講座も実施している。

以上の 2 施設は、本調査研究の研究計画にある「実施施設の確定」の「NPO・起業支援を実施している女性関連施設、もしくは、これから実施しようとしている施設に着目したい」という条件に合致するものである。

これら 2 施設のプログラムを具体的に計画する前に、本調査研究全体の方向性を定めるために、全検討委員による検討委員会を 3 回開催した。

第 1 回は、2012 年 4 月 6 日実施。今年度の研究計画を確認し、プログラム実施に向けて共催可能な施設の検討を行った。

第 2 回は、2012 年 5 月 7 日実施。プログラムの目的・対象について検討した。

第 3 回は、2012 年 6 月 11 日実施。共催施設も決まり、具体的なプログラムの内容に入る前に全体のテーマ・趣旨を確認した。

以上、3 回の検討委員会を踏まえて、2 施設の担当を決めた。「ほっと越谷」は、常葉－布施検討委員と筆者、「女と男の未来館」は新井検討委員と筆者である。今後、それぞれの担当で共催施設との打ち合わせを重ねながら、プログラムを企画・実施することとなった。

1. 越谷市男女共同参画支援センター「ほっと越谷」のプログラム

「ほっと越谷」は、設置は越谷市だが、管理・運営はNPO法人男女共同参画こしがやともろうである。したがって本プログラムも、越谷市男女共同参画支援センター「ほっと越谷」とNPO法人男女共同参画こしがやともろう、そして独立行政法人国立女性教育会館の３者による共催プログラムとなった。

（1） プログラムの概要

「ほっと越谷」で開催する講座のテーマを、「地域課題の解決と女性の経済的自立に向けて：地域活動を『仕事』にしよう」にした。「ほっと越谷」では、約 40 団体の登録団体がある。登録団体40団体のうち、NPO法人化している団体はおよそ10団体で、多くがボランティア・グループであるため、地域課題解決のための活動をしているが無報酬であることが団体の悩みでもあった。地域課題の解決のための活動によって、少しでも収入が得られれば、活動する女性たちのモチベーションもあがり、新しい人の参加も期待できる。そこで、地域活動によって経済的自立とまではいかないが、少しでも収入となることをめざそうという意味を込めて、「地域課題の解決と女性の経済的自立に向けて：地域活動を『仕事』にしよう」をテーマとした。

したがって本講座の目的は、地域で活動する女性たちが本プログラムに参加することによって、地域活動が地域の課題解決や地域の活性化になっていることに改めて気づき、さらに、そうした活動が経済的自立につながる可能性があることを知る。あわせて、団体の課題を明確化すると同時に、事例報告などから課題解決のためのヒントを得て、今後の活動に活かせるようにすることである。

講座の対象者は、「ほっと越谷」の登録団体を念頭に置きながら、以下の人々とした。

《講座対象者》

・地域団体や女性団体で地域活動をおこなっている女性
・ボランティア･グループなどで活動をおこなっている女性
・NPO活動や起業活動に関心のある女性等

《講座日程》

第１回　平成24年11月10日（土）13:30－15:30
第２回　平成24年11月17日（土）13:30－15:30
見学会　平成24年11月20日（火）11:00－14:00
第３回　平成24年12月　1日（土）13:30－15:30

「ほっと越谷」の登録団体はじめ、地域で活動している女性たちを対象にしているため、平日の昼は活動日でもあることを考慮して、土曜日の午後 1 時半からとした。休日の午前中ゆっくりした後、昼食をすませ、講座を受講した後に買い物でもして帰ろうという時間帯を設定した。

本講座の特徴として、地域のNPOや起業活動を見学するフィールド・ワークを第2回と

第 3 回の間に取り入れた。見学先は、第 2 回の事例報告でもある「ヘルシーカフェのら」とした。コミュニティ・レストランとして地域の 20 代の独身女性から、子育て中のママ、そして高齢の女性たちの居場所として定着しつつある事例である。

チラシは、「ほっと越谷」職員が作成した（参考資料 1)。配布は、9 月末。配布先は、以下の通りである。

《チラシ配布先》

・埼玉県男女共同参画推進センター
・ハローワーク（越谷・春日部・草加）
・埼玉県内市立図書館
・埼玉県 NPO センター　　等々

「地域活動を『仕事』にしよう」という本プログラムのテーマから、ハローワークや NPO センターなどにも配布した。

《プログラム・デザイン》

本プログラムの構成図（プログラム・デザイン）は、参考資料 2 の通りである。特徴・対象・目的はプログラム・デザインを参照。

「A 基点・基軸の形成」では、第 1 回講座とフォローアップ講座でのミニ・レクチャーで、「NPO やコミュニティ・ビジネスなど、ペイド・ワークになっている地域課題解決のための活動についての基礎的理解」とすると同時に「男女共同参画意識の醸成」をおこなう。

「B 課題と実態の把握・理解」では、第 1 回講座の「活動の課題と意義を出しあい、共有する」グループワークをおこなった。ここでは、NPO やコミュニティ・ビジネスの全国調査や「ほっと越谷」でおこなった事前アンケートなどとも比較して、活動の課題と意義について、全国的視点と地域的視点でみるように工夫した。

「C 課題解決・実践力の形成」では、ペイド・ワークで地域課題の解決をはかっている事例から、課題解決の方法を学ぶとして、NPO 法人子育てサポーター・チャオの近澤恵美子さん、ヘルシーカフェのらの新井純子さんの事例報告を聴くと同時に、近澤さん、新井さんを囲んでグループで質疑応答をおこなった。これはグループワークを通して、受講生と事例報告者の関係を築く意味もある。また、本講座の特徴として事例報告者の活動の場にフィールド・ワークとして見学をおこなった。この見学を通して、より具体的に課題解決の方法を学ぶとともに、フィールド・ワークという手法を通して、受講生同士の交流を深めることも意図している。

「D 共通基礎力の形成」では、第 3 回講座のアクション・シートの作成とフォローアップ講座の事業計画案の討議を通して、具体的に課題解決のために行動する方法を学ぶことを意図している。この事業計画案のグループ討議において、協働力・関係力が育成される。

（２） プログラム実施までの準備過程

本講座を実施するにあたって、準備のための検討委員会を全 3 回実施した。第 1 回は、

2012 年 4 月 6 日、平成 23 年度からの検討委員 3 名（李正連氏・常葉－布施美穂氏・藤本隆史氏）と筆者の 4 名で、平成 23 年度の調査研究をもとにプログラム開発を実施するのであれば、もう 1 人プログラム開発に詳しい検討委員を加えた方がよいということになった。

5 月 7 日に開催された第 2 回検討委員会は、新たに新井浩子氏を加え、実験プログラムの目的・意義などが話し合われたが、対象施設の決定には至らなかった。そもそも、プログラムの目的や対象者についても明確になっていなかったので、検討委員で議論を深めようということになり、6 月 11 日に第 3 回の検討委員会が開催された。ワークショップ方式で討議し、実験プログラムの性格を「地域活動が無償のままではなく、収入につながることを知り、そうした活動への一歩を踏み出すための講座」とすることとし、対象者を「地域活動を行っている者もしくは NPO 活動や起業に関心がある者」とした。また、この検討会で対象施設を「ほっと越谷」と「女と男の未来館」にすることを確定した。

当該 2 施設で実験プログラムを実施するにあたり、担当の検討委員を決定した。「ほっと越谷」は、常葉－布施美穂検討委員と筆者、「女と男の未来館」は、新井浩子検討委員と筆者とした。

全 3 回の検討委員会をふまえて、「ほっと越谷」職員との打ち合わせならびに担当する常葉－布施検討委員と筆者の打ち合わせは、全 5 回に及んだ。

【第 1 回打ち合わせ】

第 1 回の「ほっと越谷」との打ち合わせは 7 月 8 日（土）、「ほっと越谷」の年間行事であるフェスティバルを筆者が見学し、そのあとに事業課職員小野由理さん、指定管理者である NPO 法人男女共同参画こしがやともろう理事の荒井ひとみさん、そして国立女性教育会館研究国際室長中野洋恵の 4 人で、1 時間ばかり打ち合わせをおこなった。

内容は以下の通りである。

- 越谷の特徴と課題として、「ほっと越谷」登録団体の経過と現状の説明を行い、これからの団体活動継続に向けた課題解決を図るとともに、地域活動を経済的自立につなげるためのプログラム事業の作成について提案をした。
- 個人への支援について質問があり、以前「ほっと越谷」で実施したエンパワーメント講座を起業家の紹介を含めたプログラムで実施したが参加者の年齢層が高く、参加状況は芳しくなかったことを説明。
- 子育て世代を取り込む事業への参加状況について質問があり、育休＆職場復帰準備講座への申込み多数である状況を報告するとともに、M字型曲線の深い越谷市においても子育て世代の人たちの意識、取り巻く状況は変化していることを説明。
- 国立女性教育会館としては、子育て世代の働きたい女性をターゲットにし、NPO 活動は再就職活動の一つの選択肢として紹介してはという方向で提案があり、「ほっと越谷」より世田谷区の取り組みとして起業セミナーを開催したところ、若い世代の参加があったとの事例を報告。

・ 具体的事業内容の組み立てを協議、以下のとおり
　① 対象　　働きたい子育て中の女性
　② 開催曜日　平日午前中
　③ 保育あり（ほっと越谷内）　※費用は国立女性教育会館で負担
　④ 開催月　　11 月（3 回）
　⑤ 募集　　9 月から
　⑥ 主催　　国立女性教育会館、ほっと越谷（指定管理者を含む）
　⑦ 講座内容　地元 NPO 事例発表，可能であれば NPO 職場見学を 3 回以外に 1 回入れる。市民活動支援センター見学でも可。
　⑧ 3 回講座のうち第 2 回については、「ほっと越谷」オーダー事業としても開催したいことを伝え、了承された。
・ 参加者のアフターケア、参加者のグループ活動化に向けた可能性について話し合ったが、3 回程度の講座では、参加者同士のコミュニケーション作りは難しいとの結論。
・ 記録を残すため、毎回簡単なアンケートを実施。
・ 事例報告を NPO にしてもらうこととし、こちらで団体をピックアップする。併せて、見学可能な団体もピックアップする。
・ こしがやブランドについては、企業は除く。女性事業家がいるか調べて報告する。
・ 8 月下旬に打合せを行う。

（記録：荒井）

【第 2 回打ち合わせ】

7 月 8 日の打ち合わせでは、多数の受講生が見込まれる「働きたい子育て中の女性」を対象にする方向に話が流れてしまったが、本プログラムは、地域活動を経済的自立につなげることと地域活動の意義を認識することが目的であることを再確認して、7 月 23 日の常葉ー布施検討委員と筆者の打ち合わせは下記の通りとなった。

プログラムの枠組みについて

① 対象者は、「地域団体や女性団体で地域活動を行っている女性/ボランティア･グループなどで活動を行っている女性/NPO 活動や起業活動に関心のある女性」とする。この中に、子育て中の女性も入る。
② 本プログラムのテーマは、地域活動の意義に重点を置くこととして、経済的自立はそれに付随するものとする。
③ 本プログラムを通して、活動を行なっている女性・これから活動しようとしている女性・団体・センターなどが「つながる」ことを目的にする。

プログラム実施にあたって

① 「ほっと越谷」で計画する登録団体（NPO）10 団体へのアンケート項目は、ある程度

出来た段階で、見せてもらう。
② 事例報告候補団体について、詳細を聞くと同時に、見学させてもらえないか確認する。
③ 創業支援事業について聞く。受講後の動向についてなど。
④ 本プログラム受講後、「その後の報告会」など、近況を報告する機会を定期的にもつ。

この、7 月 23 日の打ち合わせで本プログラムの対象が確定し、あわせて目的も地域活動の意義に重点が置かれ、経済的自立はそれに付随することが明確になった。そもそも、地域活動がダイレクトに経済的自立となることは難しく、その点をどう考えるかが検討委員会でも議論になっていたが、7 月 23 日の時点で目的・対象ともに明確になったといえる。

【第 3 回打ち合わせ】

7 月 23 日の内容をもって、8 月 11 日に常葉－布施検討委員と「ほっと越谷」職員との最初の打ち合わせをした。この打ち合わせでは、実施日程が確定した。対象を NPO やボランティア・グループなどで地域活動を行っている女性としているため、平日を避けて土曜日の午後とした。また、事例報告者は見学も可能な事業体ということで、コミュニティ・レストランの好事例「ヘルシーカフェのら」の新井純子さんと、「ほっと越谷」の登録団体で講座の保育を担当している NPO 法人子育てサポーター・チャオ代表の近澤恵美子さんとした。

【第 4 回打ち合わせ】

8 月 30 日は、常葉－布施検討委員と「ほっと越谷」職員との 2 度目の打ち合わせであった。打ち合わせ内容は、①事前アンケートの調査票の確認と、②チラシ作成にあたり講座各回のテーマの決定である。プログラムの概略をみながら、4 人でアイデアを出し合った。少々時間がかかったが、趣旨を反映した魅力的なテーマになったと思う。また、テーマを議論する中で、本講座の目的や「ねらい」などを全員が再確認し共有することができた。共催で講座を行うことの実質的な討議となったのではないだろうか。

講座全体のテーマと、各回のテーマは以下の通りである。

全体テーマ：地域課題の解決と女性の経済的自立に向けて
――地域活動を「仕事」にしよう――

◇第１回　NPO で活動する女性の実態は？～わたしたちの今と全国の調査から～
11 月 10 日（土）13:30－15:30

◇第２回　身近な NPO・起業活動を聞いてみよう～お互いに学ぼう・語ろう～
11 月 17 日（土）13:30－15:30

◇第３回　わたしたちのこれから～行動計画をつくってみよう～
12 月 1 日（土）13:30－15:30

【事前アンケート】

また、今回のプログラム実施にあたり、「ほっと越谷」では、地域の NPO やボランティア・グループなど地域の団体の現状と課題を把握する必要があるのではないかということで、「ほっと越谷」登録団体 40 団体のうち、事業として地域の課題解決活動を行っている団体、つまりサービスに対して利用料を徴収している団体 10 団体を対象に、事前アンケートを実施した。この事前アンケートは「ほっと越谷」の荒井さん、小野さんの発案で、実施は「ほっと越谷」であった。アンケートの内容と結果については、「NPO 法人・ワーカーズコレクティブ等へのアンケート調査結果報告」（参考資料 3 参照）の通りである。

有給スタッフは少数で、ほとんどがボランティアに頼っており、経営的に不安定である。また、若い世代の参加が少なく、後継者の育成が困難であるなど、全国調査の結果と共通する結果が出ている。

全国調査の傾向とほぼ同様の結果が出ていることから、地域活動の課題の共有が容易になると思われる。

【事例報告者へのヒアリング】

10 月 12 日に事例報告者 2 名に事前のヒアリングを実施した。午前中に NPO 法人子育てサポーター・チャオ代表の近澤恵美子さん、午後に「ヘルシーカフェのら」（グループあれあれあ代表）の新井純子さんに、①現在の活動内容、②活動までのプロセス、③現在の課題と活動の意義についてヒアリングを実施した。このヒアリングをもとに、現在の事業展開にいたる転機となったことなどが明確になるように事例報告をお願いした。

【第 5 回打ち合わせ】

11 月 2 日、参加者の数や所属などを把握したうえで、11 月 10 日の第 1 回講座開始に向けて、常葉－布施検討委員と筆者とで打ち合わせをおこなった。主に、第 1 回講座の自己紹介とグループ・ワークの方法とワークシートの確認である。

この時点で、参加者のほとんどが地域活動を行っており、その内訳は、NPO 団体、ボランティア・グループ、コミュニティ・ビジネスなどそれぞれ均等な割合であった。こうしたことをふまえて、自己紹介シートの最終確認などをおこなった。

（野依　智子）

（３） 学習支援について

筆者（常葉－布施検討委員）は今回の越谷のプログラムに、いわば裏方として関わってきた。講座の開催日程が本務と重なってしまったため、実際の講座には 1 度も足を運ぶことがかなわなかったのであるが、講座の企画･準備の段階から、ほっと越谷との打ち合わせに国立女性教育会館の野依研究員とともに参加し、講座の組み立て方や具体的な進め方についても話し合いを重ねた。また講座の開催期間中も、野依研究員と実際に会ったりメー

ルや電話でやり取りしたりして、講座や参加者の様子について知らせてもらい、それ以降の講座の内容・方法の細かい部分について協議したり相談にのったりしてきた。

講座の実施に対してこのような側面的な援助を行う中で、筆者の経験---社会教育・生涯学習を含めた領域の教育理論を研究し、また大学でもそうした内容について教えてきた経験と、これまで社会教育プログラム（成人女性を対象としたプログラムを含む）に関わった経験---を、多少は生かすことができたのではないかと思う。以下では、講座のプログラムを企画・実施する際に、参加者の学習を支援するという点で、どのような配慮や工夫を心がけたか、どのような考え方でアドバイスを行ったかについて、ごく簡単に報告しておきたい。社会教育学の研究・実践の分野すでによく知られている基本的なことも多く、特に目新しいものではないかもしれないが、確認の意味でいくつかのポイントを押さえておきたいと思う。

ｉ）「講座参加者の学びを支援するために教育活動（講座）を行う」という認識を担当者が共有すること

講座を実施する・教育の場を提供することの目的は何かと言えば、根本的には、参加者に学び、成長してもらうこと、ということになるだろう。ここでの学びとか成長という言葉は、知識を増やすということだけに限定されるわけではなく、何かを「知る」「わかる」「つかむ」「確かに身につける」「自分のものにする」といった様々な変化を含むものであるが、ともかく教育とは、学習者の学びや成長という、学習者自身にしかできない（主体的な）活動を支えること---その芽生えや展開を支援すること---であると言える。よく言われるような「学習者の今ある位置から出発せよ」という教育の基本原則も、同じような考え方に基づいている。

今回の講座は、「前年度に行った全国調査の結果を活かす」という流れで実施された。このような経緯から、「教育の提供者が提供したい情報を、講座の参加者に対して伝達・普及する」というスタンスが講座の企画の際に出てきやすい危険もあると感じられたため、筆者はまず最初に、野依研究員との間で上記のような教育観を共有することにつとめた。具体的には、社会教育実践者にとって古典とも言えるような文献、例えば松下拡『健康学習とその展開―保健婦活動における住民の学習への援助』（とりわけ第１章「学習とは何か」）や、国立市公民館市民大学セミナー『主婦とおんな―国立市公民館市民大学セミナーの記録』、伊藤雅子『女性問題学習の視点―国立市公民館の実践から』を読んでもらった。

学習者のために教育活動を行うとなれば、どのような経験、関心・問題意識、状況の女性たちが参加しそうであるかを、色々なアンテナを張って予測しておく必要がある。普段、市民とよく接している施設の職員の方々と何度も打ち合わせを行ったり、施設の登録団体・NPO の実態や問題関心をつかむために事前にアンケートを行ったりしたのもそうした意味があった。

上記のｉ）のような考え方がすべての根本にある訳であるが、そこから、例えば以下の

ようなより具体的な視点や工夫が派生してくる。
ⅱ）参加者が講座の会場を離れた後、あるいは、講座を全回終了した後のことを（こそ）考慮に入れて企画を立てること
ⅲ）参加者が主体的に学べるための工夫を行うこと
ⅳ）参加者が学び方を学べるような工夫を行うこと

これらの視点は別個に存在しているというよりは、互いに関係し合っているものであるが、今回の講座の状況に即していくつか実際の例をあげてみよう。

例えば、ⅱ）は、講座がその場限りのもので終わらないように、「参加してよかった」だけで終わらないようにする、ということであるが、講座が全回終了し参加者がそれぞれの家庭や地域や団体に戻り、講師やコーディネーター等の存在がなくなった時からこそ「本番」が始まるのだから、そのための準備を講座で行う、という考え方でもある。今回の講座も、いわばまず跳躍のことを考え、そこから逆算してどのような助走が必要なのかという風に、めざしたいところをじっくり時間をかけて明確にし、その上で、講座の内容、順番、方法を組み立て、講座の軸がぶれないように心がけた。また、講座終了後も参加者の自主グループ活動の支援や講座のフォローアップの場を提供することを提案し、実際に２月にフォローアップの機会を設けていただくことができた。

ⅲ）については、参加者自身が主体的に取り組むことができるように、自分の思いを表現できる時間・場の確保、小グループでの話し合い、書き出したメモの共有、口頭発表、各種シートへの文章記入などの様々な方法を取り入れた。こうした、参加者に「自分で実際に何かをやってもらう」ことのほかにも、例えば、第１回目の講座では、国立女性教育会館から全国調査の結果を報告する場面で、それが「調査をしたから報告する、伝える」というような、学会報告的なものにならないように留意した。具体的には、話を聞く側にも報告を主体的に聞いてもらえるように、話すテーマについてまず問いかけをし自分たちの身にひきつけて考えてもらい、テーマに向き合う意識が整った上で調査結果を報告する、といったことや、すべての内容を細かく報告するのではなく、あくまでも今回の講座の目的にとって重要な事柄にフォーカスし、報告をこの講座の中で行う意味を参加者に対しても明確化すること、同時に、報告で触れられなかった詳細なデータ等については希望者に資料で配布できるように準備しておく、といったことである。

ⅳ）は、この講座そのものが、参加者にとって学び方・講座運営の仕方のモデルになるので、それを意識して講座を組み立て実施するということである。実際に、参加者の中からも「このような方法は自分が講座を行う際にも参考にしたい」という感想が出ていた。先のⅱ）ともつながるが、この講座の中で紹介したり取り入れたりした方法には、参加者の日常生活の中で活かせる、また活かしてもらいたいものが多くある。例えば、自分たちで調査を行い、データを取っていくことで、まだ明らかになっていない事柄について実証的に明らかにしてゆくことや、様々な人と関わり情報や意見を交換すること、そこでのつながりから自分の認識を深め、広げ、他の人とともに行動してゆくこと。さらに、シート

作成等を「その場限りの作業」で終わらせず、後にもそうしたシート類を、自分たちのことを確認し、ふり返り、さらに学んでいくための材料として活用すること、等々である。

以上、ごく簡単に今回の講座を企画・運営する際の考え方について、いくつかポイントを述べてみた。重要なことは、教育を行う側は「なぜ自分はこれをこのやり方で行おうとしているのか」について十分自覚的になる必要があるということではないだろうか。調査結果の報告を行うにしても、参加者に自己紹介や小グループでのディスカッションを行ってもらうにしても、「何をめざして自分はこれをやろうとしているのか」「どうしてこのやり方で行おうとしているのか」を考える必要がある。さらに先述のｉ）のところに立ち返るならば、教育を提供する側には、「自分の行おうとしていることが参加者の学びを支援することになるかどうか、また、どのような意味で学びを支えることになるか」という、哲学的な部分にも思いをめぐらすことが求められると言えるだろう。

（常葉－布施　美穂）

（４） プログラムの流れ

ここでは、実施したプログラムについて検証したい。

◇第１回講座

第１回講座「NPO で活動する女性の実態は？～わたしたちの今と全国の調査から～」は、11 月 10 日（土）13 時 30 分から開催された。11 時から、資料の印刷・セット、会場の設営、当日の打ち合わせを行い、12 時 45 分から受付を開始。保育の申し込みは一組、幼児 2 名であった。

第１回講座のねらいは、「現在、活動している団体の課題を明らかにする」「課題の背景にある社会構造について学ぶ」「活動が地域課題の解決、地域経済の活性化などになっている NPO の事例を知り、自分たちの団体活動の意義を考える」の 3 つであるが、中でも、「団体の課題を明らかにする」ことが大きなテーマといえる。事前のアンケート調査からも団体の課題が自由回答で述べられているが、そうした課題を漠然と課題として負担に思うのではなく、本講座では、課題を明確に整理し、同じように地域で活動する人々と課題を共有することが目的である。

（ａ）参加者

参加者は、21 名。「ほっと越谷」の登録団体のメンバーや地域でボランティア活動をしている人、コミュニティ・ビジネスとしてセラピー・メイクの会などをおこなっている人々であった。7 人ずつ、3 グループに分かれた。

（ｂ）プログラムの流れ

【自己紹介】

まず、自己紹介シート（参考資料４参照）に書き込んだ上で、１人１分の自己紹介をおこなった。１分で伝えたいことをまとめることの大切さを知ってもらうことを目的とした。また、自分を表現する簡単なマークを決めてもらい、自己紹介の中で説明した。自分のことを説明することにもなるし、後で、ポストイットに意見を書く際に、そのマークを書きこみ、誰の意見かを記名しなくてもグループ内で共有できるようにするためである。

【グループ討議】

地域で活動する上での課題と意義を整理した。ポストイットの青には、「活動する上でつきあたっている壁（課題）」を。ポストイットの黄には、「活動していてよかったこと（意義）」を１枚にひとつ書きこんだ。

書きこんだポストイットの内容をグループ内で説明しながら分類し、それぞれの分類グループにキーワードをつけていった（参考資料５参照）。この作業を通して、課題の明確化と共有がはかられた。また、活動の意義の共感もはかられた。

【ミニ・レクチャー】

ここで、国立女性教育会館が平成 22 年度に実施した、NPO・起業活動に関するアンケート調査の結果をもとに、女性の地域活動の課題と意義について報告した。さらに、NPO 団体に所属していても、NPO について明確な知識があるとは限らないので簡単に NPO についての解説もおこなった。

【グループ発表】

ミニ・レクチャーを聴いた後に、新たな課題や意義に気づいたかどうか確認したうえで、グループ討議の結果を、全体で共有するためにグループごとに発表した。グループの全員が登場し、自己紹介も兼ねて活発に発表が行われた。１グループ５分ずつ。

以上の流れで第１回講座は行われた。実際のプログラムの流れは、以下の表の通りである。

◇第１回　NPO で活動する女性の実態は？～わたしたちの今と全国の調査から～

11 月 10 日（土）13:30－15:30

【ねらい】

・現在、活動している団体の課題を明らかにする。

・課題の背景にある社会構造について学ぶ。

・活動が地域課題の解決、地域経済の活性化などになっている NPO の事例を知り、自分たちの団体活動の意義を考える。

【内容】

時　間	形　式	内　　容	担　当　者	備　　考
13:30		講座開催のあいさつ あいさつと本講座の説明	・ほっと越谷所長；中村敏子 ・NPO 法人男女共同参画こしがやともろう代表理事；原博子 ・NWEC 研究国際室長；中野洋恵	・1 人 3 分 ・NWEC は、あいさつからそのまま本講座の説明 ・1 グループ 5 人の 5 グループで着席 ・名札シールを机上にセット
13:45	記入 5 分 自己紹介 5 分	【グループ内で自己紹介】 ・フェース・シートの説明 ・フェース・シート（4 つのテーマ；①自分を象徴するマーク/②現在行っている活動（関心のある活動）/③講座に参加した動機/④自分の長所）作成。 ・グループ内で発表しながら自己紹介を行う。	ファシリテーター；野依智子	・フェース・シート作成 ・1 人 1 分づつ；1 分経過したら合図をする ・1 分で話す意味を知らせる ・終わった後に 1 分スピーチの感想を聞く
14:00	グループワーク	【グループ討議】 ◇グループ活動の課題・意義を共有する ・「活動する上で（活動をはじめる上で）、突き当たっている壁」/「活動していてよかったこと」をポストイットに書いて、模造紙に貼り付ける。 ・ポストイットには、自分のマークを入れる		（模造紙 1 枚・ポストイット 2 色（課題と意義で色分けする）・サインペン 5 本・カラーマジック 12 色 1 式）×３
14:10	講義	【NPO 活動についてミニ・レクチャー】	講師；野依智子	PPT 使用

	30 分	①　NPO の基礎知識（NPO の活動分野、組織、資金） ②　NPO の現状と課題（2010 年アンケート調査から） ・アンケート調査の結果を知らせると同時に、地域活動と報酬についての意識と実態のギャップについて（団体の課題が資金と人材育成にあることの理由を）考える。 ③　NPO の可能性 ・全国レベルの NPO の事例などから、NPO が新しい働き方を提示し、地域課題の解決のための活動にもなることを知る		
14:35	休憩			
14:45	グループワーク	【グループ討議】 ・感想を出しあう ・自分たちの現状を改めて知る ・新しい課題や意義はないか 【グループ・ワーク】 ・貼り付けたポストイットをグループわけして、グループごとにテーマをつける	ファシリテーター；中野洋恵	
15:30		【グループ発表】 ・グループごとの課題・意義をまとめて発表する。 ・まとめと次回につなげる ・感想を書く		各グループ 5 分程度で発表

（ｃ）受講生の感想

受講後の感想は、以下の通りである。

・色々な活動をされている方とお話しができ、課題や悩み、はたまた、喜びや良かったこと、類似していることが多いのだなぁと思いました。

・回りで活動されている方とお会いする機会も少ないので楽しいひとときでした。実際に NPO を運営されている方はご苦労されているのだと改めて感じました。又、大変なことも嬉しいことも共通しているということを認識してボランティアを始めた初心を思い返しました。少し元気になりました。

・時間配分や参加の仕方がとても考えられた講座だと思いました。私達の講座に取り入れて行きたいと思いました。

・「地域活動を仕事にする」という目的で集まった人達と問題を共有でき、嬉しい。次回が楽しみです。
・様々な方のご意見が聞けて大変参考になりました。今後の自分の活動が目標を決めるのに役立ちました。ありがとうございました。
・今日は導入で、いろいろな活動をしている人がいらっしゃることを知ることができました。地域で活動は、いつも同じような団体しか見えてこないので少し広がった気がします。まだ、自分の具体的な活動に引きつけて考えることができないので次回以降期待します。

◇第２回講座

第 2 回講座「身近な NPO・起業活動を聞いてみよう～お互いに学ぼう・語ろう～　」は、11 月 17 日（土）13：30 から開催された。この回は、事例報告から学ぶ講座であるため、13：00 から事例報告者を交えて打ち合わせを行った。

第 2 回講座のねらいは、「NPO・起業の事例報告者に出会い、課題解決の手がかりを得ると同時に、実践者とのつながりを構築する」ことを主な目的にしている。事例報告者から課題解決の糸口を学ぶだけでなく、事例報告者に出会い、つながりを持つことをも目的にしている。受講者が、今後、行動を起こそうとする際に、また、行動を起こすまでにいかずとも、これからも地域で活動を続ける上で、好事例の実践者との関係を持っていることは、活動の広がりであり、地域の活性化にもつながる。あわせて、「受講者自身が所属団体のミッションを確認し、自分の関わり方を再考する」とあるように、受講者自身の振り返りもしくは所属する団体の振り返りの機会とすることも目的としている。

（ａ）参加者

参加者は 21 人。人数的に 3 グループに分かれた。これは事例報告の後に、報告者がグループに入って、グループから質問を受けることを予定している。しかし事例報告者が 2 人なので、1 グループには NPO 団体に所属している受講生に入ってもらい、事例報告者がいなくても NPO について討議できるようにした。

（ｂ）プログラムの流れ

【事例報告】

《事例報告者》

近澤恵美子さん：NPO 法人子育てサポーター・チャオ代表

新井純子さん：ヘルシーカフェのら（グループあれあれあ代表）

＊当日配布資料と事例報告の内容は参考資料 6・7 参照のこと。

【グループ討議】

事例報告者にグループに入ってもらい、質問に答えながら事例の内容を深める。質問とその回答については、記録係がメモをとる。1 グループ 10 分づつで、事例報告者は 3 つのグループをまわる。

【グループ発表】
グループで話し合われた質問・回答について発表した。

【個人発表】
事例報告を聞いて、得たこと・感想などを１人１分づつで発表した。個人発表を聞いて、事例報告者から全体へのコメントをもらった。個人発表の内容は､以下の通りである。

・私はとても勉強になりました。そして何て言っても両方の方からお聞きした事を、一つの繋がりが大切だ、今日は関係ないかもしれないと思う会でも自分が出来る事をお互いに言い合ったり、話し合ったりすると、それが先々の繋がりになって「あー、あの時のあの方」を思い出し、そしてその方に相談すると「あっ、それじゃこういう人がいるよ、紹介してあげる。」と言う風にみんな繋がっていったという事をお二人から聞いた事が、今日はとても重大な収穫だったと思います。ありがとうございました。
・この様な集まりで人とのかかわり合いが出来ることによって、自分の活動の視野を広げていく事になるという事を切実に思いました。また、NPO の課題は人を雇っていく事が事業を拡大していく事だっていうことも本当に感じました。あの、色々な人とかかわっていく事によってその人の特徴・スキルそういうことは本当に活かせたら素晴らしいなって。色んな能力を持って社会に出られてない方って一杯いるんだなって事を切実に思いました。以上です。
・私はお二人のお話をうかがって、本当に人との出会いは凄いなぁって思っています。それで今日この人、この人、この人ゲットっていうのが私の中にいつもあって、あのー、やっぱり人との繋がりっていうのは自分で掴んでいかなければいけなくて、チャンスは二度とやってこない。この人って思ったらやっぱりゲットしていかなきゃいけないなぁって。とにかく三人寄れば文殊の知恵っていう風に言いますので、私の仲間三人、とにかく作って何か年とってからやりたいなぁっていう思いを現実に実現していきたいなぁっと思いました。ありがとうございます。
・私はあの今、越谷のお米と野菜を使って農業を応援しながらお弁当をやっているんですけど、みんなで。ま、みんなで出資してもう 20 年くらいになります。１回休んで空き店舗対策で、ちょっと助成していただきながら。だけど新しい事業を今日聞いて、あー、私たちも色々な事をやらなきゃいけないなぁって思ってます。今度は今日来た人同士で何かこう話し合う場が出来るといいなって。

実際のプログラムは以下の通りである。

◇第２回　身近な NPO・起業活動を聞いてみよう～お互いに学ぼう・語ろう～
（事例報告者との出会いの講座）
11 月 17 日（土）13:30－15:30

【ねらい】
・NPO・起業の事例報告者に出会い、課題解決の手がかりを得ると同時に、実践者とのつながりを構築する。
・受講者自身が所属団体のミッションを確認し、自分の関わり方を再考する。

【内容】

形　式	形　式	内　　容	担　当　者	備　　考
13:35		今日の内容と事例報告者の紹介	ファシリテーター；野依智子	3グループで着席
13:42 14:25	講義	【事例報告を聞く】 ・地元の NPO・起業の代表 2 人から事例報告 ① NPO 法人子育てサポーター・チャオ ② ヘルシーカフェのら ・設立のミッションとプロセス（課題の解決と活動の意義） ・仲間つくり；ネットワーク 〈ねらい〉 ・地域で活動することの意義に気づく ・事業化した理由や背景、その方法・プロセスを知る ・センターと地元 NPO や団体とのネットワークづくりにもなる 【質疑応答】 ・全体で確認しておきたいことだけを質問する 【休憩】	講師： ① 子育てサポーター・チャオ 近澤　恵美子 ② ヘルシーカフェのら 新井　純子	1 事例 20 分
14:35	グループワーク	【事例報告者を囲んで】 ・事例報告者を囲んで、質問･意見交換などを行う 〈ねらい〉 ・対面で事例報告者から話しを聴くことによって、事例報告者との今後の関係をつくる		事例報告者 1 人に受講者でグループ面談（1 グループ 10 分程度） ・話し合いの内容をシートにまとめる
14:55 15:20 15:30		【まとめ】 ・1 人ずつ、得たこと・感想などを発表 ・事例報告者からコメント 【次回の予定】		1 人 1 分で発表 事例報告者 3 分づつコメント

（c）受講生の感想

受講生の感想は、以下の通りである。

・チャオさんはとても順調にやっていけているグループだと思います。時代が少子高齢化になった時に子育てに的をしぼってやってきたことが良かったのでは。これからも 10 年

後に世の中がどうなるか何が必要になるか考える。世の中の動きをきっちり掴み、センスも必要では。今後の講座にこのへんのアンテナみがきのお手伝いをして下さい。
・子育てについてサポート、地域の課題に目標が出来ました。有難うございました。お茶会が楽しみになりました。作って食べることも良いなと思いました。
・地域活動を「仕事」にしようというタイトルに惹かれて、どんな話が聞けるのかと、講座の様なものを想像していましたがグループごとのミーティングの様なスタイルと積極的な方々の姿勢に圧倒されました。でも、マイクを持って感想を話すのは苦手です。
・講師お二人の経験は、これから自分が経験することであってほしいと思いました。自分が望んでいる人と必ずつながると信じてやっていきたいです。そのためには一歩踏み出す勇気、あきらめない気持ちを持ち続けます！！
・元気な女性の話を聞きました。自分の要求がみんなの要求と合うとエネルギーになるのですね。始まりの気持ちは同じでも NPO・合同会社・運営の仕方についてもっと聞けたらよかったかな。

◇フィールド・ワーク：見学会　　11 月 20 日（火）11:00－14:00

フィールド・ワークとして、第 2 回の事例報告でもある「ヘルシーカフェのら」（以下、「のら」と称す）の見学とランチ交流会を実施した。日程は、11 月 20 日（火）で、第 2 回講座の直後である。あまり時間をあけない方が、事例報告の内容を深められると考えた。

フィールド・ワークのねらいは、NPO 活動や起業の現場を見学・体験することによって地域課題の解決のための活動を具体的に知ること。そのことによって、地域活動の意義に気づくこと。また、見学までの道のりやランチを一緒にすることによって受講者同士の交流をはかり、ネットワークづくりの機会とすることである。

（ａ）参加者

参加者は、「ほっと越谷」職員などを含めて 10 名であった。講座は土曜日の午後にしていたのだが、フィールド・ワークは平日に設定したためか講座の参加者数よりも減少した。

しかし、目的地までの30分ほどの間、何をしているのか、どういうことがしたいのかについて、受講生同士や受講生とセンター職員の間で話しをしながら歩いたのは、貴重な情報交換と交流の機会になった。

（ｂ）フィールド・ワークの流れ

ヘルシーカフェのらに到着したのは12時近くだったので、そのままランチにした。レストランの奥の貸し出しスペース（普段は子育てひろばに貸すことが多い）で、ランチ。

食後、ヘルシーカフェのらの新井純子さんから、「のら」を改築する時の話しや新井さん自身の地域活動を始めるまでのプロセスについての話しを聞いた。また、「のら」の隣で開業している「BABAラボ」（縫い物などの手作り作業を通した居場所づくり）の説明を聞いた。

（ｃ）まとめ

本講座の特徴としてフィールド・ワークを取り入れた。今回は、見学とランチ交流に留まったが、作業や活動に参加してみることが今後の課題である。実際に、作業や活動を体験することによって、なお一層NPO活動や地域活動について理解することができると同時に、活動のおもしろさを実感することもできる。また、作業や活動を通して参加者同士の交流も進展するものと考える。

◇第３回講座

第３回講座「わたしたちのこれから～行動計画をつくってみよう～　」は、12月1日（土）13:30 から開催された。最後となる本講座のねらいは、「団体の課題を明確にし、短期で取り組める課題について行動計画をたてる」ことを主にしている。単なる目標をたてるのではなく、実現可能な目標とするために短期目標とした。3回目を迎えるにあたり、2月を目途にフォローアップ講座をしようということになり、したがってここでいう短期目標とは、「2ヵ月後の目標」となる。

（ａ）参加者

最終講座の参加者は、13人。第2回の事例報告の時と同様のグループに分かれた。

（ｂ）プログラムの流れ

【アクション・シートの作成】

アクション・シート（参考資料8）に書き込んでいく。アクション・シートは、まず、これまでの講座で明らかになった活動の課題を明確にすることから始める。第 1 回講座から活動の課題については話し合ってきたが、①ここで明確に課題の整理と確認を行う。②その上で、課題解決にはどんな方法があるか考えたり、③自分にはどのような強みがあるか考えたり、④課題解決のために連携したい団体や人を考えたりして、⑤課題を解決している将来の自分をイメージする。そのイメージに近づくために、⑥短期の目標として 2 か月後の目標を設定した。

【グループ討議】
　グループ内で作成したアクション・シートを見せ合いながら、意見交換を行う。グループ内で意見交換しながら、各自のアクション・シートを充実させる。

【個人発表】
　アクション・シートをみながら、各自の短期目標を発表した。単なる発表というより、「2か月後の私の宣言」という意味合いが強いものである。1人1分の発表とした。

実際のプログラムは以下の通り。

◇第３回　わたしたちのこれから～行動計画をつくってみよう～

12月1日（土）13:30－15:30

【ねらい】
・団体の課題を明確にし、短期で取り組める課題について行動計画をたてる。
・自分のこれまでを振り返り、自分の資源を確認し、今後に活かすことを考える。
・つながるための履歴書づくりという意味をもたせる。

【内容】

形　式	形　式	内　　容	担　当　者	備　　考
13:37		これまでの振り返りと今日の内容	野依智子	第 2 回と同様のグループにする ・第一回の課題整理、第二回の発表のまとめを資料とする
13:47	グループワーク	【アクション・シートの作成－つながるための履歴書－】 ・個人を対象としてシート作成 ・つながり、一歩を踏み出すための「つながるための履歴書」を作成する ①　これまでに明らかになった課題を整理・確認する ②　課題解決のための方法・道筋を考える ③　課題を解決した1年後もしくは数年後の自分を想定する ・「私の強みは何か」・「つながりたい人や団体」などを書き出してみる。	ファシリテーター：中野洋恵・野依智子	アクション・シートの作成 ・第一回資料参照 ・第二回資料参照 ・課題整理シートを活用

14:02		【グループ討議】 ・グループ内で意見交換を行い、各自の履歴書を深化させる。		
14:20		【アクション・シートの修正】 ・履歴書を補筆修正して「わたしの行動目標」を記入する。		
14:30		【休憩】 お茶を飲みながら休憩		シートを張り出す
14:40		【発表】 ・グループごとに全員が「わたしの履歴書」「わたしの行動目標」を発表する。		1人1分づつ発表 ・張り出したシートを囲んで
15:00		【本講座のまとめ】 ・ほっと越谷・国立女性教育会館の担当から一言ずつ ・今後のネットワーク支援についてセンターから説明 ・2月9日に報告会を行うことを予告	・中野・野依 ・荒井・小野 ・ほっと越谷；小野由理	

（c）受講生の感想

受講生の感想は、以下の通り。

・活動の確認になった。古い友人に会うことができ、一緒にやれるのではないかと考えている。具体的に動き、その上で必要なとき助言が欲しいと感じている。多くの事例があれば先が見えるので。

・“越谷ブランドをつくろう”すてきなテーマです。いろいろな人の力を集めてつくっていきましょう。そのための拠点施設としての“ほっと越谷”を大切にして行きたいと思います。先進的なお話、情報が得られて大変貴重な時間でした。有難うございました。

・自分でばくぜんと思っていたことでも、みなさんと一緒に考えていくと自分の考えもきちんとなっていく。出来る出来ないは別にしても何か形がうっすらと見えてくるような気になってきました。とてもいい講座の進行だったと思います。講座の持ち方も勉強させていただきました。感謝感謝です。

・何かしたい人が集える場があったら良いなと思います。フォーローアップ以外に「何かしたい人、この指止まれ」という企画をして人材を集める場の提供があっても良いと思います。２月以降にできるでしょうか？

・講座初回より２回、３回と続いていくうちに自分自身の意識が変わって来たように思います。講師の先生方のわかりやすいワークシートの方法が良かったのだろうと思います。又、毎日の生活にこうした考える時間を持って書きつづることも必要なのだと思いました。

・参加された多くの方がすでに具体的な活動をしており、とても参考になりました。地域活動が多岐にわたり様々な角度から社会に貢献していること、またそこで働く人達が活

き活きとしていることを知ることができました。ありがとうございました。

（５）　２月９日のフォローアップ講座報告

フォローアップ講座として、2 月 9 日（土）13:30 からフォローアップ講座を実施した。講座を計画した時から意識にはあったが（7 月 23 日の打ち合わせ内容を参照）、講座開始の際には具体化していなかった。ところが、第 2 回講座終了後から、NPO 活動や起業活動に関する実務的な講座が必要ではないかという意見が、「ほっと越谷」職員からもでてきた。実際に NPO などで活動している受講者や、団体の課題解決を切望している受講者にとっては、実務的なアドバイスが必要なのではないかという指摘である。

したがって、認証 NPO 法人茨城 NPO センター・コモンズの事務局次長大野覚氏に助言者として参画してもらった。

ねらいは実務的なアドバイスをすることを主としつつ、次の 2 点とした。「講座修了後に『行動計画』の進捗状況を話しあうことによって、「行動計画」の実現にむけての意欲を持続させる」、「近況報告会を行うことによって、受講生の関係を発展・継続させる」である。

（ａ）参加者

参加者は、14 名。7 名ずつ 2 つのグループに分かれて、ワールド・カフェ形式でグループ討議を行った。

（ｂ）プログラムの流れ

【近況報告】

第 3 回講座の際に発表した「私の行動目標・短期目標」を一覧表にした資料を準備し、一覧表をみながら 1 人 1 分ずつ近況報告を行った。

「草加市のまちづくり委員になる」、「セラピー・メイクでボランティアをおこなっている」などの具体的な目標を達成した人もいる一方で、母親や夫の介護や看病に追われてしまったという報告もあった。しかし、セラピー・メイクに関心のある参加者でグループができ、自分たちの活動場所（事業所）を作ろうという動きがあるとの報告もあった。

【NPO についてのレクチャー】

本講座の助言者、NPO 法人茨城 NPO センター・コモンズの大野さんが、NPO についての基礎知識と NPO に対する誤解、さらに NPO 法人化することによるメリット・デメリットについてのレクチャーをおこなった。

ここでは、NPO 立ち上げに関心がある人を対象に、NPO に対する間違った情報や思い込みなどを修正することとあわせて、地域活動を事業化するということは、①誰かがするのではなく、「みんなでする」ことの大切さや、②励まし合える仲間づくりの大切さ、③「わたしがしたい」ではなく、社会的ニーズがあることの大切さを知ることをねらいとしている。（レクチャーの内容については、参考資料 9 参照。）

【事業計画を話し合おう】

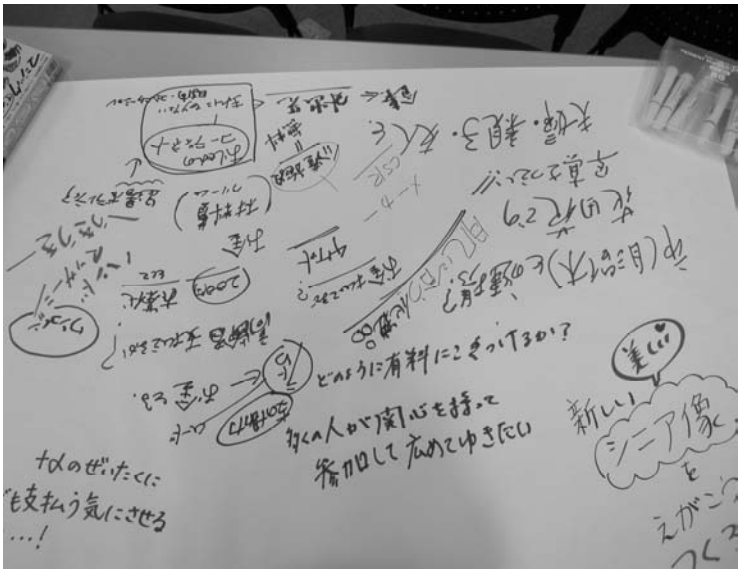
第 3 回講座終了後、セラピー・メイクのグループができた。もともと、本講座の参加者の中にセラピー・メイクを個人事業としておこなっている人や、セラピー・メイクのボランティア活動をおこなっている人が 3〜4 人参加していた。そうした人々が本講座を通して関係をつくり、「越谷の空き店舗を利用してセラピー・メイクの活動場所を作ろう」というグループが立ち上がった。その活動場所に、同じく本講座に参加していた弁当づくりのワーカーズが合流し、「セラピー・メイクと一緒に、お茶が飲める居場所をつくろう」という計画ができた。

このグループが、「ほっと越谷」を運営している NPO 法人こしがやともろうの理事荒井さんとともに 12 月に越谷市の産業振興課に空き店舗の情報収集に行っている。

本プログラムの「事業計画を話し合おう」では、このグループのリーダーにあらかじめ「事業計画案」（NPO 法人茨城 NPO センター・コモンズのオリジナル用紙）を作成してもらい、その事業案をもとにグループで話し合った。

事業案については、NPO 法人こしがやともろう理事の荒井さん（本講座の協力メンバーでもある）が説明。その後 15 分間、グループで①「事業計画を聞いた感想」を話し合い、グループの半数が入れ替わった後さらに 15 分間、②「事業計画案をさらに深めるためにどうしたらよいか」を話し合った。そしてもとのグループに戻って、グループ討議の内容を共有した（ワールド・カフェ形式の簡略版と大野さんのことば）。

このグループ討議は、テーブルに置いた模造紙に各自がメモを書き入れながらおこなった。模造紙をみると、グループで討議したことのキーワードを確認することができる。



話し合われた内容は、越谷の商店街の活性化さらには地域の活性化をもたらすもので、まさに「地域づくり」のワークショップであった。グループ・ワークで拾ったことばを列記すると以下の通りである。

「セラピーにきて、帰りがけに商店街で買い物をして帰るような流れをつくろう」「セラピーの場でコーヒーが飲めたり、お総菜を買ったりできる」「高齢者の働く場にもなる」「コミュニティの場づくり」「男性にもセラピーが必要」「男性も巻き込む」「高齢者が外にでることが必要」「新しい高齢者像をつくろう」などである。

こうしたグループ討議に関して大野さんからのコメントは、「事業の対象である高齢者とは、どのような高齢者をイメージしているのか。」「事業化には具体的な工程表を作成することが必要」であった。

実際のプログラムは、以下の通りである。

◇フォローアップ講座　受講後のわたしたち～講座修了後の近況報告会～

【日　時】2013 年 2 月 9 日（土）13:30～15:30

【場　所】「ほっと越谷」研修室

【ねらい】・講座修了後に「行動計画」の進捗状況を話しあうことによって、「行動計画」の実現にむけての意欲を持続させる。

・近況報告会を行うことによって、受講生の関係を発展・継続させる。

【内　容】

形　式	時　間	内　　容	担　当　者	備　　考
	13:30	フォローアップ講座の説明 フォローアップ講座のあいさつ 本講座の助言者の紹介	司会；野依智子 ・NWEC 研究国際室長；中野洋恵 ・NPO 法人茨城 NPO センター・コモンズ事務局次長；大野覚	2 グループで着席
	13:45	【近況報告】 ・全員、この 2 ヵ月間の報告 【コメント】	ファシリテーター；野依智子 助言者；大野覚	1 人 1 分で報告
講義	14:00	【NPO レクチャー】 ・NPO や協働に関する誤解 ・NPO 法人化するメリット・デメリット ・組織化する時のコツ　etc. （ねらい） ・誰かがするのではなく、「みんなでする」ことの大切さ ・励まし合える仲間づくりの大切さ ・「わたしがしたい」ではなく、社会的ニーズがあることの大切さを知る	助言者；大野覚	
休憩	14:20			
グループ	14:25	【事業計画を話し合おう：グループ・ワーク】 「メイク・セラピーの事業計画をもとに」 ・事業案の説明（荒井さん） ・行動計画が具体化している事業について、グループで意見交換する	メイク・セラピー；NPO 法人越谷ともろう理事・荒井 助言者；大野覚 グループ担当；大	①　のテーマで 15 分グループ討議した後に、グループメンバー半数入れ替

		①「事業計画を聴いて感想」②「事業計画案を深めよう」がテーマ ・グループ討議の中で、大野さんに助言してもらう	野・野依	え ② のテーマで2回目の討議
	14:55 15:05	【感想・発表】 ・メイク・セラピー、ワーカーズの人にひと言 ・大野さんにコメント		
	15:15	【おわりのことば】 ・フォローアップ講座を終えて 中野・野依・荒井・小野（センター職員）		

（ｃ）受講生の感想

受講生の感想は、以下の通り。

・NPO の基本が分かって有益でした。12 月以降でしたが、皆さんがそれぞれの場で活躍の様子が分かり良かったと思います。ほかのメディアでも地域活動の情報があるので参考にしていきたいと思います。

・何かをやりたい、仲間がいるのかわかったことがとてもよかった。自分と同じような考えを持っている人がいることがわかっただけでも良かった。元気をもらったような気がします。成功も失敗もみんなと一緒、共通責任を持ってやっていけるとうれしいな。

・高齢社会はうつ病が多い。夢を描くのではなく、自分の近所にどんな人がいるか、どんなことをしているか見てニーズにあったことで動き始める。行政が動いてだめなことも、商店が閉店してもやはり理由はそこに人がこないから。継続していきたくても閉店にならざるえない。そこの問題が私たちが考えることで夢の実現につながる。

・参加された皆さんの意見が活発に交わされて、熱気が伝わり、心が楽しくなりました。自分の小さな点のような思いが、具体的に見えてきたように感じられました。一人一人のパワーが合わさると、大きな波が立ちあがる。希望も感じられた講座でした。ありがとうございました。

（６） 成果と課題

「ほっと越谷」でのプログラム「地域活動を『仕事』にしよう」の目的は、「地域で活動する女性たちが本プログラムに参加することによって、①地域活動が地域の課題解決や地域の活性化になっていることに気づき、さらに、②そうした活動が経済的自立につながる可能性があることを知る。また、③団体の課題を明確に把握すると同時に、事例報告などから課題解決のためのヒントを得て、今後の活動に活かせるようにすること」であった。

第１回の講座は、「活動する上で、突き当たっている課題」を出しあい、グループで共有し、整理する作業を行った。したがって、目的の③団体の課題を把握するという目的は達成できたと考える。あわせて課題だけを出しあうのではなく、「活動していてよかったこと」

も出しあい共有したため、地域活動の意義も確認できたものと考える。このように課題を確認した上で、第 2 回講座では、身近な地域で地域課題の解決もしつつサービスを有料化して順調に活動を展開している２つの団体からの事例報告を聴いた。この事例報告によって、②活動が経済的自立につながる可能性があることを知り、あわせて好事例を聴くことによって、③課題解決のためのヒントを得たものと思われる。そして、第 3 回講座では、今後の行動目標・短期目標をたて、フォローアップ講座では、具体的な事業計画案を聴き、その事業計画をさらに深める話し合いをおこなうことによって、③の今後の活動に活かせるようにすることができた。

以上のように、プログラムの第 1 回からフォローアップ講座までを通して、講座の目的は達成できたと考える。

次いで、本講座の特徴を軸として、成果と課題を整理する。

これら第 1 回からフォローアップ講座までの全 5 回を通してみると、第 3 回までは、自分が置かれている状況（突き当たっている課題）を整理・確認し、好事例の報告から課題解決のヒントを得、自分の経験や強みを活かした課題解決のための短期目標をたてるといういわば個人の行動にそったキャリア形成支援講座になっている。しかし、講座終了後のフォローアップ講座で、先進グループの具体的な事業計画案を討議することによって、受講生の視点が「地域づくり」に広がった。個人の活動の課題解決が「地域づくり」への参画につながった点が、本講座の特徴であり成果でもあるといえよう。

2 つめには、第 2 回の事例報告の後に実施した「見学会」である。フィールド・ワークとして講座に位置づけたのであるが、社会教育・生涯学習の講座で実践をともなう講座は少ないと思われる。本講座で「見学会」を取り入れた意義は、①NPO や起業などの実際の活動を見学することによって、イメージを明確にできる。②事例報告者の事業所を見学の対象にしたので、事例報告の内容を一層理解できる。③今回の見学対象は、コミュニティ・レストランだったので、ランチを通して参加者同士の交流が深まった。また、目的地までの道のりも、参加者の交流の時間になった。つまり、フィールド・ワークを取り入れることによって、具体的な活動を知ることになると同時に、参加者の交流を深める機会にもなったことである。

しかし、今回のフィールド・ワークは見学だけだったが、具体的に活動や作業を体験するプログラムを計画することが今後の課題である。実際に体験することによって、活動への理解が進み、次の行動につながる可能性もある。

3 つめには、事前アンケートの実施がある。「ほっと越谷」の地域性を反映させるために、本講座の対象者でもある「ほっと越谷」の登録団体のうち活動を事業化している 10 団体を対象に、組織体制・組織運営・活動内容・活動の課題などについてアンケートを実施した。これは、講座を開始するにあたり越谷市の実態を把握し、アンケートの結果を講座に反映して、講座が地域から乖離したものにならないことをねらいにしている。このように地域性を反映した講座企画をおこなった点は、本講座の特徴であると同時に成果でもある。しかし、地域の実情にあわせた事前調査を取り入れることはとても重要なことであるが、ひとえにセンター職員の力量にかかっている側面もある。こうした職員の力量がセンター職員の専門性でもあり、このようなセンター職員の育成が求められているところである。

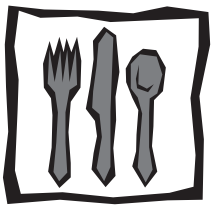
（野依　智子）

◇参考資料A

独立行政法人国立女性教育会館
平成 24 年度「地域課題の解決と女性の経済的自立に関する調査研究及びプログラム開発」事業

地域課題の解決と女性の経済的自立に向けて

地域活動を「仕事」にしよう



？ 地域に役立つ活動を続けたいのに、資金が足りない…
？ 地域活動が収入につながればチャレンジしたいけれど…
？ どうしたら、起業やNPOの活動ができるの…

！悩んでいないで、一歩前に。
！自分たちの活動を見直してみませんか？
！語り合い、学びあって、「仕事」について考えてみませんか？

連続３回講座+特別編（希望者でカフェ見学）

11月10日（土）／11月17日（土）／12月1日（土）／見学 11月20日（火）

【開催日時と開催場所】

第１回　NPO（地域）で活動する女性の実態は？ ～私たちのことと全国の調査から～	11月10日（土） 13:30～15:30	「ほっと越谷」セミナールーム
第２回　身近なNPO・起業活動を聞いてみよう ～お互いに学ぼう　語ろう～	11月17日（土） 13:30～15:30	「ほっと越谷」セミナールーム
特別編（見学）　起業したカフェに行ってみよう ～さいたま市の「ヘルシーカフェのら」見学～	11月20日（火） 11:00～14:00	「ヘルシーカフェのら」 ※交通費・ランチ代は自己負担
第３回　わたしたちのこれから ～行動計画をつくってみよう～	12月　1日（土） 13:30～15:30	「ほっと越谷」セミナールーム

◇会場の「ほっと越谷」は、北越谷駅（東武スカイツリーライン）東口のパルテきたこし3階です。

【対象者と募集人数】

地域団体や女性団体で地域活動をしている女性／ボランティア・グループなどで活動をしている女性／NPO活動や起業活動に興味のある女性

募集：30人（講座3回参加できる方）

【参加費】 無料

※特別編（見学）の時は、交通費・ランチ代は自己負担

【保　育】 特別編をのぞく各回の講座で行います（6ヶ月～未就学児／事前に申し込みが必要です）

【申込み・問い合わせ】

越谷市男女共同参画支援センター「ほっと越谷」
電話　048-970-7411／FAX　048-970-7412　　http://hot-koshigaya.jp

共催　独立行政法人国立女性教育会館／越谷市男女共同参画支援センター「ほっと越谷」／
指定管理者（特非）男女共同参画こしがやともろう

【講座内容】

第1回　NPO（地域）で活動する女性の実態は？	11月10日（土）13:30～15:30

NPO活動の基礎知識、現状と課題、NPOの可能性などについて学ぶミニ・レクチャーを行います。
その後、地域活動を女性が行う意味についてグループで話し合います。

講師	国立女性教育会館 研究国際室研究員	野依智子さん
ファシリテーター	国立女性教育会館 研究国際室長	中野洋恵さん

第2回　身近なNPO・起業活動を聞いてみよう	11月17日（土）13:30～15:30

NPO・起業の事例報告を聞きながら、自分たちの課題解決の手がかりを得ると同時に、参加者同士のネットワークづくりを行います。

講師（事例報告）	NPO法人子育てサポーター・チャオ	近澤恵美子さん
	ヘルシーカフェのら	新井純子さん
ファシリテーター	国立女性教育会館 研究国際室研究員	野依智子さん

特別編（見学）	11月20日（火）11:00～14:00

さいたま市の「ヘルシーカフェのら」を訪問し、ランチをしながら、現場で働いている人のお話を聞きます。

第3回　わたしたちのこれから	12月1日（土）13:30～15:30

団体の課題や自分のやりたいことを明らかにし、これからどのように取り組むか考え、行動目標・行動計画を立ててみます。短期で自分たちに出来ることを目標設定してみます。

ファシリテーター	国立女性教育会館 研究国際室長	中野洋恵さん
	国立女性教育会館 研究国際室研究員	野依智子さん

参加申込書

「ほっと越谷」FAX　048-970-7412　　※参加できる日に○をつけてください。

講座名	地域活動を「仕事」にしよう			
参加	第1回11月10日	第2回11月17日	特別編11月20日	第3回12月1日
この講座を何で知りましたか	①広報こしがや	②ホームページ	③チラシ（場所　　）	④その他（　　）
お名前	ﾌﾘｶﾞﾅ		所属団体名（所属団体なしの方は空欄のまま）	
ご連絡先	TEL		FAX	
※保育申込み要・不要	ﾌﾘｶﾞﾅ			歳　　ヶ月
	幼児氏名			
保育対象は6か月～就学前。（保育の締切り：第1回11月2日、第2回11月9日、第3回11月22日）				

※FAXで受付した場合、講座に参加できない場合のみご連絡をいたします。
※いただいた情報は、この講座以外での使用はいたしません。

平成 24 年度　「地域課題を『仕事』にしよう」（越谷市男女共同参画支援センター「ほっと越谷」）プログラム・デザイン

【本プログラムの特徴】

① 地域活動の課題を整理し、課題解決の方法を考え、解決に向けた行動目標・短期目標を考えるという教育的方法と、事業企画の立案という実務的内容を併せもったプログラムである。

② 学習方法としてワークシートを用いたグループワークをおこない、学習内容の共有と具体化をはかる。

対　象　・地域団体や女性団体で地域活動を行っている女性・ボランティア・グループなどで活動を行っている女性・NPO 活動や起業活動に関心のある女性等

目　的　①地域活動が地域の課題解決や地域の活性化になっていることに気づき、さらに、②そうした活動が経済的自立につながる可能性があることを知る。
また、③団体の課題を明確に把握すると同時に、④事例報告などから課題解決のためのヒントを得て、今後の活動に活かせるようにすることである。

	A基点・基軸の形成		B課題と実態の把握・理解	C課題解決・実践力の形成	D共通基礎力の形成
学習目標	男女共同参画意識の醸成	NPO やコミュニティ・ビジネスなど、ペイド・ワークになっている地域課題解決のための活動についての基礎的理解	地域活動の課題を整理して明確にし、共有する。 ・全国的視点 ・地域的視点	ペイド・ワークで地域課題の解決をはかり、なおかつ地域貢献・社会貢献になっている事例から課題解決の方法を学ぶ。	課題解決のために踏み出す方法を学ぶ。 ・企画力 ・協働力 ・関係力 ・情報力
学習内容	内容 ① ミニ・レクチャー ・NPO の現状と課題（国立女性教育会館の全国調査から） ・地域活動とアンペイド・ワーク	内容 ① ミニ・レクチャー ・NPO の基礎知識 ・NPO のメリット・デメリット	内容 ① 【活動の課題と意義を共有する】 ・「活動する上で、突き当たっている壁」「活動していてよかったこと」 ・課題の分類 ・全国調査と事前アンケートの比較	内容 ① 【事例報告を聴く】 ・NPO 法人子育てサポーター・チャオ ・ヘルシーカフェのら ② 【事例報告者を囲んで】 ・質疑応答と関係づくり ③ 【フィールド・ワーク】 ・ヘルシーカフェのらの見学＆交流会	内容 ① 【アクション・シートの作成】 ・つながるための履歴書作成 ② 【事業計画案を討議する】 ・具体的な事業計画案についてグループで討議して、計画案を発展・深化させる
学習方法	講　義	講　義	グループワーク	講　義・グループワーク フィールド・ワーク	グループワーク

〈アクティビティ・ラーニング〉

企画　Plan

実行　Do

評価　Check　個人への影響　社会への影響

改善　Action

平成 24 年度「ほっと越谷」登録団体の NPO 法人・ワーカーズコレクティブ等へのアンケート結果報告について

平成 24 年 11 月より、国立女性教育会館との共催事業実施のため、「ほっと越谷」登録団体の NPO 法人・ワーカーズコレクティブ等へのアンケートを実施しました。
ご協力いただいた団体の方々に感謝申し上げますとともに、集約して結果をまとめましたのでここにご報告させていただきます。このアンケート結果を参考にして、登録団体のみなさまとともに、知恵を出し合って、団体の発展につながる講座にしていきたいと思います。

「ほっと越谷」登録団体のＮＰＯ法人・ワーカーズコレクティブ等への国立女性教育会館との共催事業実施のためのアンケート　結果報告

アンケート回答団体　１０団体（「ほっと越谷」登録団体で、組織形態がＮＰＯ法人およびワーカーズコレクティブである団体）

1 NPO法人等設立について

１９９６年～２０００年・・・４
２００１年以降・・・・・・・６

2 現在の会員数

１０人～５０人・・・・・・・４　　５１人～１００人・・・・・・３
１０１人以上・・・・・・・・２　　無回答・・・・・・・・・・・１

3 会員の年齢層

２０代～６０代までで、どの年代の会員が多いかを聞いたが、６０代以上が多いと回答された団体が３団体あったほかは、幅広い年代の会員がいるという回答だった。

4 有給スタッフの有無

あり・・・・・・・・・・・・・８
なし・・・・・・・・・・・・・２

5 無給スタッフの有無

あり・・・・・・・・・・・・・５
なし・・・・・・・・・・・・・３
無回答・・・１／その他・・・１
※その他の回答は、「活動状況によっては、ほとんど無給になる人がいることもある」

6 無給スタッフのいる場合の、その理由

ボランティアとしての活動を重視することと、法人収入が少ないことによるためという理由が半数ずつあった。ボランティアといっても、交通費程度の支払いをしているところもある。

7 助成金・補助金事業の有無

あり・・・・・・・・・・・・・８
なし・・・・・・・・・・・・・２

「あり」の団体のみの回答

①助成金・補助金の種類について
市からの助成・・・７団体　国からの助成・・・３団体　県からの助成・・・３団体
財団からの助成・・・２団体　企業からの助成・・・０

②助成・補助金額について
５０万円未満・・・３団体　２５０万円未満・・・２団体　２５０万円以上・・・２団体

8 団体の課題もしくは関心のある項目について（自由記述）

① 構成員について

活動を始めた年数の経過と共に、会員の平均年齢が上昇している。

会員が仕事などに当てる時間が増えて、活動時間が減っているため、会員同士が団体のミッションを共有することが難しくなっている。

② 資金について

資金不足で今後の運営が不安に思う団体と、ボランティア運営をめざしているため、資金についての課題は感じていないという回答がある。

③ 経営・運営のマネジメントについて

経営について、会計、事務処理、ＩＴ関連が不得意な会員が多いこと、スタッフ教育が出来ない状況である。

活動を無償ボランティアに依存しているため、不安定な部分がある。

④ スタッフの給与について

有給スタッフは少数、ほとんどがボランティアという実情が多い。

交通費、謝礼程度を支払っている。

会員の生活を支える収入を得ることが困難な状況が多いようである。

⑤ 今後の事業展開について

今後の事業展開については、どの団体も非常に意欲的で、ＮＰＯのミッションに沿った新事業を企画して進めたいという意見が多い。

団体の発展のため、会費収入のみならず、収入につなげる事業を行っていきたいという意見や、安定的な運営を図るため、長期的事業計画が必要だと考えているという意見もある。

⑥ 後継者について

若い世代に託したいが後継者の育成が困難であり、後継者が自然にでてくることを期待しているという意見など、後継者の必要性は強く感じているようである。

事業内容に関連し、人手不足のため後継者としての会員を獲得したいと考えている団体もある。

⑦ その他

優秀な人材の確保と事業の発展を考えると、ボランティア部分が多すぎると難しいと感じている。

9 現在の活動が、団体の目的に沿った地域の課題解決や地域の人たちの生活に役立つ事業となっていると考えますか

① おおむねできている・・・・8

② 地域課題の解決のための活動として、足りない点が多いと思う ・・・・2

ほとんどん団体が、団体活動を通して地域への貢献がなされていると考えている。

10 今までの活動の中で「活動してよかった」と思ったこと（自由記述）

ＮＰＯ法人が企画した事業へ参加した人たちの喜び、満足感が分ったときに充実感があるという意見が多い。

非営利活動事業の運営が安定してきて、働く場のひとつとして認識され、団体運営が軌道に乗ってきている。また、事業を継続し続けることができたこと自体がよかったという意見もある。

11 団体が今後活動していく上でどんな支援があったらいいと思うこと（自由記述）

スタッフへの給与として、人件費の一部充当ができる補助金、助成金事業があればいいと考えている。

団体のスキルアップとして、宣伝や情報発信についてトレーニングできる機会がほしい、事業活動を安定的に行うための会場確保が出来る支援があればいいという意見もある。

参考資料４

（本シートは２人分）

お名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

マーク

現在している活動 or（活動していない人）これからしてみたいこと

わたしがここにいるわけ（参加の動機）

わたしの長所

お名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

マーク

現在している活動 or（活動していない人）これからしてみたいこと

わたしがここにいるわけ（参加の動機）

わたしの長所

	キーワード	地域活動の課題
Aグループ	負担	楽しんでいたこと(歌)が技術の向上をもとめるため苦痛にもなる
	家族	子供の保育
		入院している母91才、現在熱が高く食事もほとんど口に入れてません。どうしたら
	資金	やることが多く人手が足りない
		資金がなくて無料奉仕を無理強いできない
		グループの資金が足りない事をメンバーに持ち出してとても心苦しい
	マンネリ	マンネリ化
		マンネリなので継続の意欲がうすれていくこと
	広がらない	他のグループとの交流までの時間的余裕がない
		地域に根ざしていない
		広がらない
	いやな事	本当のことでないのに言いふらされた時悲しかった
		人に誤解されたとき

キーワード	地域活動の意義
出会い	地域の知り合いが増える
	出会いがある
	知らなかった方々とふれあい交流できる
	大勢の人と知り合えたこと
	仲間が喜んでくれたとき
かしこくなる	消費者として少しかしこくなれる
	いろいろなことを知ることができる
	メイクのスキルアップしたい
うれしかった！	メイクした後の笑顔は生き生きしすばらしい顔でした
	メイクした方の笑顔で元気と力をもらえたこと
	仕事がうまくいって気持ち良かった時うれしかった
	乳幼児向けの遊び場、講座の提供
	いくつになってもたぶん人に褒められるとうれしいのだと思った
	無理だと思うことも力を合わせて成功させたときの喜び
	介護施設に入所している方々の笑顔 体を身振り手振りで一緒にフラダンスを踊ってくれ 声も大きく出る様になった

	キーワード	地域活動の課題
Bグループ	人手不足	働かないとならない状態になり、スタッフが減っている
		市の支援がないと育成が十分にできない
		会員が集まらない
		広報ができない
		ボランティアメンバーを増やしたい。まだ少ない(休む人に予備も含め)
		事務局をする人が不足
	人間関係	男性上位になりやすい
		人間関係が大変
	制限	情報が色んなとこに色々沢山ある 情報を得るツールが沢山あるので目を通すのに時間がかかる
		仕事をしていて、時間があまりない 興味があっても時間の制限があるので全部参加できない
	費用	通勤が遠い
		ボランティア活動への交通費の負担が多い
		必要経費が出ない(・交通費　・消耗品費)

キーワード	地域活動の意義
自信	自分に自信がついたこと
人との関わり	一つの仕事から多くの趣味を持つようになった
	多くの人とのかかわりができた
	どんな活動がどんな人が何をどのようにやっているのか知りたい
良いこと	高齢者がとても喜んでくれる。ニコニコ！
	色んな方とのコミュニケーションがとれる
	ボランティアもうれしくなってニコニコしながら帰る
	参加者の笑顔に癒される
	楽しい
	人の喜ぶ顔が嬉しい

	キーワード	地域活動の課題
Cグループ	不安心配	地域の人の支援があるかな？
		自分の住んでいる所に役に立つかな？
		団体運営の資金
	ない	活動に出る体力がない
		知識不足
		時間がない（仕事・家のこと・介護との兼ね合い・勉強の時間を見いだせない）
		活動に出る時間がない
	働く場	NPOを立ち上げて大丈夫かな？
		お手伝いさんがほしい、ボランティアさんがほしい そのための有料ボランティアさんにしたい…資金がない
		利用者さんの心に寄り添っているかな？
		委託事業（ワーカーズコレクティブ）（現在、私の周りでも2か所）は簡単でも 独自事業起こしも増やしていきたい
		働きたい年配が多くいるので、働き場を作りたい
		地域のコミ協活動の中からも働く場を作りたい

キーワード	地域活動の意義
嬉しい	ほんの少しだけ収入になっている？
	家族の方に感謝された
	参加者の方に感謝された
	笑顔・元気をいただけた
	定年になった人たちが楽しそうに働いているのを見てうれしい
	”楽しかった”って言う子どもたちの笑顔
	自分が誰かの役に立てること
成長	小学生だった子が高校生になりスタッフとして活動に参加
	後輩が育ったこと
	子ども達の成長過程を感じられる
	子どもたちが活動に参加したことにより、 自ら一歩を踏み出せるようになってくれること
	30年以上たち自分が異なったポジションにいれること
人とのつながり	人とのつながり
	いろいろな人との出会い
	仲間がたくさん増えてうれしい
	心に寄り添った援助活動
	地域がよく見える
	知り合いが増えた

	キーワード	地域活動の課題
Dグループ	不安	まだなにも始めていないので不安がある
		体力
		商品化した物を売る手段がない
		どんなことを選んでゆくのか迷う
		今学んでいることを活かしてゆきたい
		人の悪口を言われることが多くなりました
	仕事・お金・欲しい	お仕事がしたいと思っています
		お休みが多いのでお金がもらえない、土日の仕事がしたい
		時間とお金がかかりすぎた
	時間	時間がとりづらい（夫の世話）
		ボランティア活動をするにあたって、 自分の時間をどのように調整するか、できるか少し不安がある
		仕事が中心でなかなかグループをリードできていない
		時間をどのようにつくるか？
		土日に開催してほしい人もいるが、要望に応えられない

キーワード	地域活動の意義
和・継続・成長	グループのメンバーには何でも話せる
	グループのメンバーにが増えることを期待
	グループのメンバーと共に成長している実感がある
	メンバーとの和を大切にしたいです
	地域の活動グループの方と楽しく交流したい
	今後行けるようになったら継続して活動したい
喜び	自分の気に入った服が作れるので達成感がある
	人に喜んでいただきたい
	作り方を教えて喜ばれた
	できるだけ多くの方にアサーティブコミュニケーションの重要性を伝えていく
	セラピーメイク 実習で老人ホームに行きましたが、皆さんが喜んで下さった事に とても（これからも）嬉しくなりエネルギーをいただいた気がした
	あいさつができるようになりました
	みんなに褒められたことです
	人生で役立つ学びをしていると思う

地域課題の解決と女性の経済的自立にむけて

地域活動を「仕事に」しよう
～お互いに学ぼう　語ろう～

平成24年11月17日（土）
越谷市男女共同参画支援センター　ほっと越谷

NPO法人子育てサポーター・チャオ
代表　　近澤　恵美子

設立と歩み

- 平成6,7年、「越谷市男女共生のまちづくり推進市民会議」で、子育てに関する調査研究を行う。
- 平成8年4月、全国で最初の子育てサポーター養成講座を開催し、子育て支援サークルとして、チャオを設立。
- 平成14年10月、特定非営利活動法人として認証される。
- 平成24年4月現在、正会員37名（チャオスタッフ）

設立の目的と活動の三つの柱

心豊かな子育てのために、より良い子育て環境作りを推進する

活動の三つの柱

1. 子育てに関する学習の場の提供
2. 仲間作りの場の提供
3. 親子で社会参加ができる環境づくり

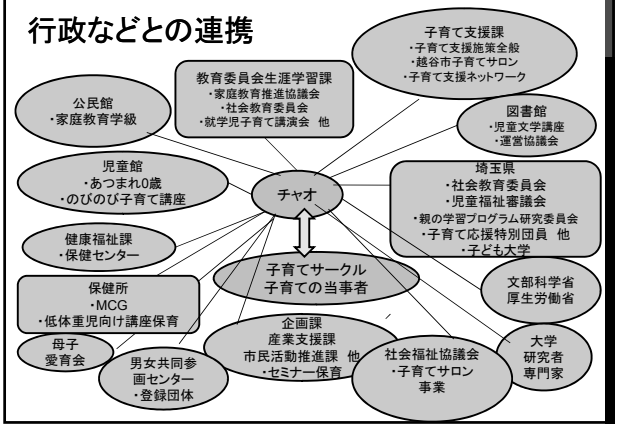
マタニティから思春期までの子育てを対象とした
多様な子育て支援の実践

チャオの運営

- 正会員　　37名　　年会費　6,000円
- 賛助会員　　75名　　年会費　2,000円
- 事業費　　23年度収入　約1,450（1,810回の活動）
  （内、補助金事業　1,351万）

- 理　事　10名
- 事務局スタッフ　　6名
- リーダー（講師）　10名
- 子育てコンシェルジュ

行政などとの連携



ホームスタートを始めるまでの経緯

H18年　「子どもと家族のための地域支援研究会」
　　家族を支えること、その方法について考える
　　家庭訪問のパイロット事業　<5件の訪問>

H19年　「産前、産後の育児サポート事業」（WAM助成事業）

H20年　家庭訪問事業（産褥シッター、ベビーシッター）開始

父と子のふれあいヒント集

『父と子のアタッチメント形成読本』
男の育児は質より量！？

＜内容＞
ふれあいヒント集：8人のパパのふれあい方
ふれあいヒントNG集
解説：なぜ『男の育児は質より量』なのか
寄稿：「再び与えられた機会ーある父親の告白」
コミック：「それがオレの生きる道」
子育てパパ力判定クイズ

仕事復帰に向けた企業とのネットワーク事業

（独立行政法人福祉医療機構助成金）

仕事復帰支援ネットワーク委員会

首藤　敏元（埼玉大教授）
田崎　知恵子（日本保健医療大学）
矢島　洋子（三菱UFJリサーチ＆コンサルティング）
加瀬川　佐記子（公益社団法人日本フィランソロピー協会）
谷脇　純子（学校法人頌栄法人ひかり幼稚園園長）
大枝　桂子（平成育児INGライフ研究所）

育休からの復帰者ヒヤリング
（企業　**10**ヶ所）

育休者ヒヤリング
（近隣子育て支援拠点　**10**ヶ所）

ペアレンティングセミナー
（企業**10**ヶ所）

育休＆仕事復帰
ガイドブック

育休からの復帰者ヒヤリング
（企業　10ヶ所）

育休者ヒヤリング
（近隣子育て支援拠点　**10**ヶ所）

ペアレンティングセミナー
（企業10ヶ所）

子どもの安全カルタ

助成金事業⇒販売へ

課題はたくさん　でも・・・　喜びもたくさん

・人手不足
・事業が大きくなるにつれ、事務局の負担増大
・主婦なんだけど・・・
・事務局といっても、6畳一間
・非常勤
・メンバーの入れ替わり、新人とのミッション共有
・最低賃金？？

など

地域活動を「仕事」にしよう

ぐるーぷあれあれあ　代表
ヘルシーカフェのら　運営者
新井純子

のら店舗紹介

●安心安全の飲食●自分の力を発揮する●情報の受発信●助けたり・助けられたり●就労の場●交流の場など

飲食提供

●農家から仕入れた野菜で
●乳がん患者食事会やアレルギー対応の食事なども

販売（プチショップ）

手作り石鹸
さおり
ババラボ作品
地産地消野菜など

情報提供

地域・行政・企業・個人

来てくださる方々

漆喰の壁塗り

新聞のエコバッグワークショップ

ワークショップあれこれ

音楽会とバザール

小学生・中学生・大学生がやってくる

双葉町の皆さんと

女性=健康プロジェクトとmmかふぇ

学校教育は受けたけど・・・

- 転勤族で孤独な子育て
- 思い通りにならない子育てにイライラ
- どうやって子育てすればいいの？
- どんな大人に育てたいの？
- そもそも私が生きたい大人って？

公民館（社会教育）との幸せな出会い

- 子育てにイライラしていませんか？
- 「ひとりでよく、がんばってますね」
- ダメな（ありのまま）私を認めてもらう経験
- 聞く、話す、読む、書く
- 企画委員と公民館での仕事

先輩女性との出会い

- 夫の話、子どもの話、今晩おかず以外の話
- 純子さんの話が面白いから書いてみたら
- 自分のことをありのままに、しゃべるように
- 書いたら賞賛も批判もあった
- 自分に気がつく・客観視する・自己変革の日々
- 人との比較でないわたし→価値観・個性

多種多様な価値観との出会い

- パプアニューギニアで3年暮らす
- 誰かのせいにしては成り立たない暮らし
- 自分たちで「楽しいことを作る」暮らし
- 日本の価値観から離れた暮らし
- 自分のこと、家族のことをじっくりと、ぼんやりと考える時間のあった暮らし

埼玉県男女共同参画推進センターの調査研究（平成14年）とワークショップ

- わたしの課題がみんなの課題
- ワークショップの実施
- 個性的で魅力的な人たちが「主婦」「ママ」
- チカラのある女性たちがいっぱい
- 平場での話し合いは参加者全員の学び

コミレスは子育て支援の要

- ち・お賞を受賞
- 地域にこんな場所があれば誰もが活かされ、楽しいだろうなぁ
- 言うのは簡単・おもっている人はたくさんいる→実践しなければ
- 出会う人ごとに「コミレス構想」の話→大家さんと出会う

やっていてよかったこと

- 新たな自分の発見
  - 自分でも気がつかない内なる力の発見
- だんだん上手になる（積み上げ）
  - 練習は大事（文章、プレゼン、ワークショップ）
  - だんだんつながる（たくさんの人と出会う）
- ひとつやれば次のことが見えてくる（続ける）
  - 公民館での学び→調査研究→ワークショップ実施→のらオープン→政策提言講座
- わたしの人生を創っている
  - 誰の人生でもないわたしの人生を生きる
  - 自分で足跡をつけていく、考えながら、行動しながら

出産・育児がキャリアになって 地域で活きている

- 子どもができたことで視野が広がった
- 行動範囲は狭いけど、近いが一番
- 子どもはわたしの可能性を広げた
- 子ども自身のネットワークができた
- 子どもたちは育って
ほしい大人に育った？
私は・・・・

困っていること・課題

- 人気があるのに収益にならず
  - 手間暇がかかる（食材に・料理に・子どもに）
- わたしの報酬がない
  - 外で働いている方が給料多かった
  - 24時間すべて働いている？
- ネットワークと簡単に言うけれど・・・
  - 時間が必要
- 営業が必要
  - 地域パトロン・企業・行政・個人

今後の活動、動きとして

- 誰でも主役→個性的な力を発揮できるように
- ある程度の時間は必要（段階的・繰り返し何度も）→効率的でないこと
- ネットワークする人になる・人を探す
- 価値観の再考と仕組みづくり
- 「コミレスは子育て支援の要」の実現に向けて

終わり

ヘルシーカフェのら
http://www.healthycafe-nora.com
Tel/Fax：048-607-3007
メール：arai_nora@jcom.home.ne.jp

近藤恵美子さん　：　NPO 法人子育てサポーター・チャオ代表

現役の子育て中であっても社会参加するという事がやはり大事で、その環境作りをするというのを昨今のテーマにしています。「マタニティから思春期までの子育てを対象とした」ということでどんどん広がっていったのが現状です。
初めは本当に乳幼児とお母さん、お父さん、どちらかというと親の支援というのを考えていました。だから子どもの事を考えてというものは、いっぱいあったのですけれども、親が元気でないと楽しい子育てが出来ないのでお母さんやお父さんたちを元気にしたい、そこが元気になれば子どもたちもついてくるのだという様な所がありました。

年会費 6,000 円でスタッフの方は 6,000 円です。それから賛助会員というのは、現役のお母さんたちだったり親子サークルの会員だったり、いわゆる利用会員が 2,000 円。私たちの活動を応援してくださる方は 1 口 2,000 円で賛助会員になってくれています。理事 10 名、事務局のスタッフ 6 名、リーダー講師というのはリーダーの講師とサブの人たちに一応分かれていて、チャオの中で認定しています。家庭教育学級というのを私たちは公民館から頼まれてやっていますが、公民館で 5 日間位のコースで親子の家庭教育学級を企画・運営しています。だいたいが遊びの講座だったり、またはお母さん向けの色々な講座だったりとかしますが、それをちゃんと企画出来る人を一応リーダーという形で認定しています。

あとは、「子育てコンシェルジュ」。それは地域の色々な事をちゃんと知っていて、お母さんたちに提供出来るという人を認定しています。これはまだ 3 人くらいしかいないのですが。

ここに「行政などとの連携」と入れさせていただきましたが、子育て支援課、昔の児童福祉課と繋がっていたでしょうけれども、色々な事が広がると多様な所との連携が出来ているという事があります。ですから、何かをするという風に決まった時には、こうやって色々な人、または全く関係のない全国の NPO 団体につながることによって事業が広がったと思っています。
1 番今チャオが力を入れているのが「ホームスタート」という事業です。
これはまず「支援から届ける支援へ」という事で今までは待つ支援、つまり、サークルがあります、何がありますという所に「みんな来てね！」と、そこで待っている状態ですね。でも色々な所で「いやそこに来られる人はいいよね、でも来ない人が課題だよね」と、まさにそこが課題だなと思っていて、そこが出来る支援が「ホームスタート」という事業なのです。ではそれを何で始めたのかという事を考えていくと、こういう風な流れになっていて、ひとつ何か事業を「これはやる！」と言うよりは「こういう課題があるよね？」「家族を支えるって大事だよね」という課題に対して、産前産後の育児サポートに関する助成金を取ろう、そこから家庭訪問という事業を立ち上げよう、ということなのです。ホームスタートってボランティアを活用する事業なのですけれど、こういう風に「これが必要だよね」というところから助成金を取ったりして、繋がっていったのだなという様なところがあります。

例えばこの「父と子のふれあいヒント集」というのを作ったのですが、これも当時「早寝早起き朝ご飯」という文科省がやっている国民運動があります。「早寝早起き朝ご飯大事なんだって、え？お母さんが早寝早起きして朝ご飯キチンと作りなさい？違うでしょ」というところの課題がありまして、「お母さんたちだけが、そんな一生懸命朝早く起きて

朝ご飯食べさせるの？違うよね」家族でお父さんだって協力して朝早く起きてみんなで一緒に食べようとか、じゃお父さんたちどういう風に子育てに関わっているの？とか、そこも全部ひっくるめての子どもの生活リズムじゃないの？ということなのです。そこで早寝早起き朝ご飯の調査研究事業の助成金を取るのですけれども、朝ご飯の簡単メニューとかそういう物が多い中で、父と子のふれ合いというのはすごく珍しがられて、「先進事例として発表してください」という話がくるわけです。

その後に仕事復帰に向けた企業とのネットワーク事業をやるのですけれども、これも地域でサロンをしていると「私、育休なんです」という人が地域に増えてきて、だけど「どうしようかな？専業主婦の人たちとしゃべっていると復帰したくなくなっちゃうんだよね」または「復帰してもいいのかな？旦那はこのままいればって言っている」とか、どうしようかな？という人が多いわけです。地域に専業主婦が８割いますから、なにかそちらの方へダッダッダッーと行ってしまう事が多くなってきちゃうのです。でもそうじゃないよね、「企業の方だってちょっとは考えてよ」というところがあって、育休者の人がどう思っているかというのをヒアリングしたりとか、また企業に行って父親セミナーやペアレンティングセミナーをしました。
そうするとまた「えー、珍しいですよね。まさに地域にも育休の人がたくさんいるのですよね」という事が後からついてきて取材が入ったりとか、またはここの「ほっと越谷さん」と一緒にその育休のセミナーをやる様になったりという風に広がっていったわけです。

またこの「安全カルタ」なんかもそうなのですけれど、当時いろいろな事件がありまして、子どもたちに安全と言ったら「家庭で安全をキチンと教えて下さいね」と言うけれども、家庭では何を教えたらいいのかよくわからない。また小さい子に向けて、どうやって安全を教えたらいいのかわからない。そこで、カルタで覚えたらいいのではということで、カルタを作るという助成金を取るわけです。そうしたら「あっ、この安全カルタすごいですね」と。みなさんの所にチラシをお渡ししたのですけれども、新聞に取り上げられたりして、そしてその助成金で作ったカルタは直ぐに無くなったので、「じゃ、これは販売したらどうですか」という話になったのです。私たちは事業化しようとかいうよりは「課題が、こんなのあるよね」というところから、その助成金を通常の事業、たとえばセミナーの保育や、家庭教育学級をやったりとか、親子サークルの講師に行ったりとかして、どんどん事業が広がっていきました。

初めの頃、支援サークルとして立ちあげた時は、まるきりボランティアで行きますと言ったらどんどん先細りする。私たちが行くにあたっては、ほんの少しでもいいから「有償」という事にこだわってきました。有償にこだわってきたのですが、例えば先ほどのホームスタート事業は、お金はぜんぜんついていないのです。ついていないのだけれども、でもこれは必要だと思ったらそこをやる。無償でやるというものもあるし、やるからにはどうにかして何処かから助成金がないかなと思い、一生懸命どこか探してやるという様な事もあり、事業も広がっていったのです。

とは言っても私たちも課題だらけです。ひとつは人手不足。よくいうのはお金を取っているとは言っても、最低賃金までいくの？という様なところがありまして、ボランティアでやるものもたくさんあります。仕事と考えてしまうとなかなか難しいです。そうするとお金が必要になってくる中・高・大学生位の子どもを持つ世代になると、仕事に行く人や、この様なご時世なので、ご主人の仕事の方がちょっと少し傾いたりとかで、「私、働かなくちゃどうしようもないのです」と言って、10 年やっていたベテランの人が抜けたりとかそんな事もあり、とにかく人手不足です。それから事業が多く、あれもやっている、これもやっていると事務的な事がすごく膨大に増えます。だから事務局の負担がどんどん多く

なって、2年前位から事務局に「はい、1時間200円」くらいな感じでやっていたのですけど、でもやってくれている人にもう少しキチンとお金をという事で、本当に少ないのですけれども、つけたのです。

年数が長くなってくると、主婦だけど経理をやらなくてはいけなかったり、パソコン出来ませんという人もパソコンやらなくてはいけなかったり、ある程度仕事の様な形になっています。または、「事務局って、どこですか？そこに話を聞きに行ってもいいですか？」とよく言われるのですが、「すみません、6畳1間で色々な保育のおもちゃとか溢れていて足の踏み場もないです」という様な状態です。それから非常勤、それから先ほど言いましたメンバーの入れ替わりもありますし、新しく入ってきた人はこうやって事業がたくさんある中にポンと入ってきているので、立ち上げたメンバーとの考え方の違いが結構あります。そこをどういう風に共有していくかというのが常にあります。「何を好き好んでやっているのだ」と家族には言われているかもしれないけれど、それでもやっているという様な現状ではあります。

新井純子さん　：　ヘルシーカフェのら（グループあれあれあ代表）

こんにちは。さいたま市南区から参りました「ヘルシーカフェのら」の新井です。ここに「グループあれあれあ代表」と書いてありますが、基本的にはとても小さな、チャオさんのように認定 NPO を取りましょうかなどというところではなくて本当に任意団体というか、そういうグループの代表をしています。ただ、埼玉県「女性からの政策提言」という事業を、弱小チームなのですけど受託して今月からやっています。

これからヘルシーカフェがどんなものか？あるいは自分が地域活動をしていて、つまり市民活動をしてきて、地域で色々な事をしていたら、「あら、こんな事になってしまいました。」というお話をさせていただきます。ただ、ヘルシーカフェのらは今月の23日でようやく 3 年目のまだまだ何かが出来ているという場所ではないのですが、珍しい取り組みをしているお店なのでちょっとご案内させていただきます。

本当に住宅地の中にあり、子育てママたちがこんな風に自転車を、お店の前にズラリと並べています。右の上の所はレストラン部分なのですが、その奥の方に赤ちゃん連れでも利用できる16畳の広場があります。下の所はトイレなのですけれども、オムツを替えられるように板を作ってオムツ替えをしていただけます。4年前に、のらプロジェクトを立ち上げて、さまざまな人たちと関わりながらのらを立ちあげました。NPO という事ではなくて合同会社という会社組織で運営をしています。発起人が 5 人で合計 750 万位を出資しています。そして私募債と言って、このお店を、「お店のポリシーがいいですね、応援しますよ。」と言って下さった方が 1 口 10 万で 21 名、なので 210 万の出資があります。他に、それでも足りなくて融資を受けて 500 万位だったと思います。

私たちはまず「安心安全な飲食したいよね」と、「のら」を始めました。そして、利用して下さる方たちの力が発揮できる場所にしたいよねということで始めました。また、さまざまな情報を受けたり出したりする事もしています。こことても重要だと思っているのですが、「助けたり助けられたりする場でありたいよね。」と、思っています。私たちここで働いている者は、先ほど言ったように合同会社なので基本的には就業の場という事で、出来れば対価をもらいたい。そして何よりも16畳の部屋がありますので、公共の場にしたいと思って運営をしています。飲食の提供は、基本的に野菜の多くはさいたま市の農家さんから仕入れています。今私たちが仕入れているのは見沼区や岩槻と結構近い。そこから新井がお野菜を仕入れています。お料理を担当している人も桜区という所に住んでいるの

で、そちらの方から仕入れて来ています。基本的に農家さんからダイレクトに仕入れています。ただ、それでまかないきれないのは少し別な所から仕入れています。基本は、さいたま市の野菜を使うようにしています。

ちょっと余談で、またこれ自慢のようで申し訳ないのですが、昨日埼玉県知事が月1回記者さんたちと一緒に情報交換会を開いているようで、のらのお弁当を注文してくれました。そのお弁当を今日のデータに入れられなかったので、後でホームページを見て下さい。
完全にお米が県のお米「彩のかがやき」と、野菜は全部さいたま市のもので作っています。
「プチショップ」というものもやっているのですが、先ほど言ったようにお野菜の販売をしたり、地域のみなさんの手作りの物を少し販売させてもらっています。先ほど言った情報提供は、のらの奥の広場で行われるワークショップのチラシとか、他にさまざまな行政とか企業とかのチラシ、もちろん個人からのチラシなども基本的にはお断りせずに受け入れています。

実はここに近澤さんも写っています。左下の写真で半袖を着ているのですが、この時は子育てNPOの皆さんと何かイベントをするので第1回目の企画会議の招集を受けて、うちのお店を利用して下さってやっている。うちの特徴的なのは、赤ちゃんを連れたママたちがたくさん来ます。当初から「子どもが来てもご飯が食べられる。」というコンセプトがあったのですが、こんなに0歳児のママたちが来るとは思いませんでした。どちらかと言うと今は本当に「赤ちゃんのママたちがくつろげる場所」ということを割と強く打ち出しています。何故かというと1歳半過ぎて2歳になると16畳はすごく狭くなり、そこでいくら子どもとはいえ子どものスペースとはいえ、飽きてくるので、ゆっくり出来る赤ちゃんママたちを対象にしています。

壁が漆喰なのですが、お店はこんな風におんぶした赤ちゃんから、お子さん連れから、大学生から、70代の方々まで、約8日間をかけて延べ50人弱で漆喰の壁塗りをしてお店を作りました。作ってくれるということで色々な人がのらに関わっていたと思います。先ほど言った奥の広場でこんな事をやっています。このエコバッグですが、これはもう大ヒット！今日も持って来ているので後でご覧ください。ベビーマッサージをしたり、おしゃべり会をしたりしています。午前中からやってランチを食べて帰る。あるいは午後2時位からやってお茶を飲んで帰るというような形でそれぞれうちの広場を利用しています。

ときに音楽会とか、地域の皆様方と一緒にするバザーという事もやっています。多分20日もですが近くの小学校の交流会、「町探検をする」という協力店になっていて、多分みなさんが来る前なのですけど子どもたちがのらに来てインタビューを受けることになっています。
中学生ミナクルワークというさいたま市の職場体験。去年の話なのですが今年も同じ学校からまた2～3人来るようです。本人たちに確認してホームページにアップしましたら、後日お母様方がお食事に来てくれました。さすがに中学生だから、母親たちが行って写真を撮るわけにはいかなくて、色々と心配をしたのですがホームページに載っていたので、この子たちの「おじいちゃんとおばあちゃんたちに見せたのよ。」とすごく喜んでいただきました。

この女性は、広場事業の事を去年卒論にまとめてくれ、埼玉大学の社会教育を専門にしている方で、のらによく来てくれていました。先ほど言ったエコバッグの話なのですが福島県双葉町のみなさんが旧騎西高校に避難しているのですけど、そこでエコバッグを作りながら、おしゃべりをするという活動もしています。これは本当にボランティアなのです

けれども、ハンズ・オン埼玉というクッキープロジェクトをしているNPOさんと一緒に行ってエコバッグを作りながらおしゃべりをしています。あとは企業とのネットワークという話があったのですが、のらは今年の12月まで約1年半、製薬会社の方と「女性＝健康プロジェクト」という事を実施していました。乳がんの体験者の話とかアレルギーのみなさんの集まりとか、あと1番右下の写真ですが、妊婦さんのお腹を触っているのですが、妊婦さんと先輩ママたちのハッピーサークルを作ろうという事業を去年やっていました。

なぜ私の市民活動がこのような事になったのか、ちょっと私事を話します。
私には二人の娘と息子がいます。もう27歳と25歳。私は、転勤族で本当に孤独な子育てをしていました。学校教育の時は色々ダメな事もあったのですが、でも自分の事ですからそれなりにやれたのだけれども、子育てが本当に思い通りにならなくて、自分のイメージ通りにならなくてとてもイライラしていました。どうやって子育てをすればいいのか？という事もそもそも分らなかった。みんなに「自分の子だからオムツのウンチなんか汚くないよ。」と言われても、「えー、汚いよやっぱり。」とかそんな風に思っていました。どうしたらいいのだろうと、情けない母親でした。

子どもたちをどんな大人に育てたいのか？というのがそもそも分らなかった。優しい子に育てたいとか、リーダーシップがいいとか、皆さんおっしゃっていたけれど、それが具体的にどんなものなのかイメージができなかった。そのリーダーシップを育てるためにはどうすればいいのかという方法です。それが全く分からずに私は頭を抱えていました。私が生きたい大人とはどういう人なのか、今の私は大人に見られるけれど私は本当にそういう大人を生きているのかしらという思いがありました。やはり母親になったら、母親になるための講座があって、離乳食のつくり方はこうですよ、お風呂にはこう入れますよと言われるのだけど、この間まで働いてこの間まで一人で色々な事をしていたのに、母親になったとたんに何かそういうのは一切クローズしているのです。母親になるためだけの情報だけを提供している。そこが私の混乱だったと。ただ、公民館でとても幸せな出会いがありました。「子育てにイライラしていませんか？」という事で出会った勉強会で「一人でよく頑張っていますね。」という講師の話に救われました。ダメな私、つまりありのままの私を認めてもらえる経験を公民館でしました。そこで私は「聞く」「話す」「読む」「書く」という事を学んでいきます。そうやっていったら自分が受講する側だったのが、企画員をしてしまったり公民館での仕事をしてしまうまでになるのです。そこでまた先輩女性、素敵な女性と出会います。私が「夫の話、子どもの話、今晩のおかず以外の話」というのをここに書いていますが、これは生活するうえですごく大事な事ですがこの話ばかりではつまらないわけです。その女性と色々な話をしました。そしたらその先輩女性が、「新井さんの話が面白いから書いてみなさい」と。そして「自分の事をありのままでいいからしゃべるように書きなさい」と言われました。そして書きましたら、新井さんの書いている事に共感するという人がいるのですが、反面すごい批判も受けました。「そんな母親はいない」とか、「女性はそんな事は思わない」とか、さんざん批判を受けました。えっ？て思ってちょっと文章を出した事を後悔することもありました。でも先ほど言ったように共感する人が少なくともいたのです。ですから私はやり続ける事が出来ました

そして書いたら色々な事に気が付くのですね。「あら、こうだったのね私って」とか、「こういう風に思われたかったんだ私、だから傷ついたんだ」とか色々な事に気がついていきます。その辺りから自己変革の日々を送るのです。人に説教をされても、人はあまり変わらないのですね、自分で気づかない限り変わりません。それは体験的に分かりました。そして私が得た答えは、「人との比較でない私」という事なのです。それが個性だと人は呼ぶのではないだろうかと。のらのお弁当を出しましたという話なのですが、それも多分

そういう事に繋がっていて、他のお店とは違うのらの料理という事で、それが多分だんだん個性になっていくのだろうというのを感じています。

その後 3 年ほど海外で暮らしました。そしたら住んだ国は治安が悪くあまりにも狭い範囲で暮らすことになります。何か誰かのせい「夫が悪いのよ」とか「子どもたちが悪いのよ」と言っていては成り立たない暮らしだったので、本当に自分たちが協力して楽しい事を作るという暮らしに出会いました。日本の価値観とは少し離れて暮らした事はとてもよかったです。自分の事を家族の事をここですごくじっくりと考えました。それまでは先ほど言ったように日本でちょっと仕事をしたので、色々な情報を仕入れたのです。それはいい事だったのですけれども、どれが自分の求めているものかというのは、ちょっと分からない、混乱していた時期でもありました。

ちょうど 10 年前に埼玉県の「男女共同参画推進センター」がオープンして調査研究団体に選んでいただきました。私のひとりでモヤモヤした課題が何とみんなの課題だったということがわかったのです。その後ワークショップを実施するプログラムを作り、それをずっと実施する活動をしています。そしたら個性的で魅力的な人たちが「主婦」とか「ママ」と呼ばれていました。力のある人たちがいっぱいいるということを発見しました。それで「コミレスは子育て支援の要」という作文を書きました。それはどんな内容かと言うと、「地域にこんな場所があれば誰もが活かされ楽しいよね」という場所です。それはまだ頭でシュミレーションをしていただけの場所です。そしたら審査員に言われました、「新井さん思っていたりするのは簡単よ、実践しなさい、やりなさい」と言われました。とても素直な私なので、そうかやらなければと思いました。出会う人ごとにこのコミレス構想の話をしました。そしたら本当に幸せな事に、このお店の大家さんと出会いました。そして 3 年前に店がオープンしたという経緯なのです。

やってよかった事。私は 1958 年 5 月 5 日生まれなので 54 歳なのですが、54 歳になっても自分の新たな面を発見します。それはもうワクワクします。こんな事が出来るのねという風にビックリします。10 年色々な事を積み上げのようにやってきて、だんだんと上手になります。それからだんだん人と繋がるのです。先ほど近澤さんとも前から知っていて、たくさんお世話にもなっているのですが、今回春日部で事業をやるので、そこの保育をお願いしました。1 つやれば次に 2 つの事が見えてくると言うことです。

いつも言う時に恥ずかしいのですが、必ず言おうと思っているのは、「私の人生を作っているのは私だよ」という事なのです。同じ道を誰ひとりとして進めないと。自分が主体的に自分の人生を歩いたらすごく楽しいだろうなと思っています。この写真が先ほどの赤ちゃんだった息子と娘になります。子どもが出来たことで私はすごく視野が広がったと思っています。行動範囲はせまいけれど、近いが 1 番だけれども、すごく可能性を広げてくれたなと思っています。子ども自身のネットワークが出来たので彼らにはもう私は必要ではないと思っています。もう成人しているので、ぜんぜん寄り付きません。私と別な所で人生を生きています。子どもたちは育ってほしい大人に育ったか？と問われれば、育ったのではないかなと私は思います。じゃ、私は？ということなのですが、私はまだ途上なので、まだまだ私は「こんな大人を生きたいな」ということでやり続けています。

ちょっと困っている事、課題を書きます。「人気があるのに収益ならず…」手前味噌で申し訳ないのですけれど、よく「のらさんはもう成功事例ですよ」と外から言われるのですが、どこが成功事例なのですかと、人は割と来てくれるのだけれど本当に収益にならなかったり。広場でのワークショップや赤ちゃん連れのママたちに解放しているようなことをやっているからなのですけれど、働いている人にはそれなりに最低賃金はお支払いでき

ているのだけれども、私の報酬ってことです。ネットワーク、ネットワークとみんな簡単に言うし私も言うのですが、やはりネットワークというのは、ちゃんと時間をかけないとダメなのだという事なのです。やはりそれは 1 人ずつ、それを寄せ集めたらきっといいのだろうなと。接客や事務の仕事で時間がないので私も外に営業する時間が取れていなくて、ちょっと残念です。でも本当に地域パトロンと言われているうちの大家さんのような方ですとか、企業、行政、もうありとあらゆる人に営業が必要だなと私は思っています。今後の活動の動きとして今日ここに来ている方たちは、もちろん形態は違うかもしれないけれど、例えば NPO として働きたいもいいし合同会社のような会社や組織で働いてもいいし、共同組合のようでもいいと思う。大企業のようではなく、儲かるのではなく、トントンくらいで皆さんの持っている力を発揮できるようになったらいいなと私自身は思っています。それにはやはり効率的ではない事を逆に今心がけています。先ほど言ったように合同会社なので企業の人たちとも出会う事があるのですが、いつも簡単に言われるのが「安いのがよくてスピードがあるのがいい」とすごく言われるのですが、のらは対極なので、なかなかそれらに乗れないのです。でも、世の中には必要なことである種の事例にしていこうと思っています。やはり地域にいるたくさん人たちと出会いたいと思っています。先ほど言ったように安いがいい、早いがいいではなくて、ちょっと価値観の再考をしたいと思っていて、そしてしくみ作りもこれからもう少しちゃんと作っていきたいと思っています。このネットワーク支援の実現に向けて日々努力して行きます。

なまえ

わたしのこれから

現状・課題

私の強みは何か

課題を解決する方法

つながりたい人や団体

１年後もしくは将来のわたし

わたしの行動目標・短期目標

平成24年度地域課題の解決と女性の経済的自立に関する調査研究及びプログラム開発

地域課題の解決と女性の経済的自立に向けて
フォローアップ講座

開催日：平成25年2月9日（土）
会場：越谷市男女共同参画支援センター「ほっと越谷」
助言者：認定NPO法人　茨城NPOセンター・コモンズ
理事・事務局次長／連携と提言部門リーダー
大野（オオノ） 覚（サトシ）
主催：NPO法人 男女共同参画こしがやともろう
越谷市男女共同参画支援センター「ほっと越谷」
独立行政法人　国立女性教育会館

COMMONS

1. NPOって何？（1/2）

これまでのおさらいです。

NPOって何ですか？

COMMONS

1. NPOって何？（2/2）

まとめると、NPOって・・・

- NPOは地域の「困った！」を解決する組織。利益最大化が目的ではない。
- 「非営利」とは、利益が出ても関係者に分配しない、ということを指すだけ。企業でいう株主配当はない。組織の目的達成のために収入を得るのは、全く問題なし。
- ある意味で、行政の手が届かない分野のサービスを行う「隙間産業」。公平性に縛られない。ただし、行政の補完だけではなく、新しい価値を生み出す。
（例）介護保険外の助けあいサービス、フードバンク
- 有給職員を雇用し専門的に活動できる。ボランティア、自治会・町内会の壁を越えられる。
- 「やれる範囲でやる」 ⇒ 「どうやったら組織の目的を達成できるか」
- NPOは市民の参加の受け皿。多くの市民が寄付やボランティアで参加できる開かれた組織。「私たちの会」ではなく、「地域のための組織」。

COMMONS

2. NPOや協働に関する誤解

市民側の誤解

- **「NPOを立ち上げたら、補助金がもらえるんでしょ？」**
⇒ NPOだと自動的に補助金が出て、運営経費がまかなえるということは、残念ながらまずありません。
- **「委託事業をやれそうだから、NPOを始めよう」**
⇒ 委託事業頼み。制度外サービスに取り組まなくて、NPOの特性が生かせるのか？また外部からの大型の事業収入が切れた後に、組織を存続できるのか？会員集め、寄付集め、助成金にチャレンジ！が肝です。
- **「行政から言われたことをやってりゃ良いんでしょ？」**
⇒ 民間非営利組織としての自発性は？NPOは下請けではない。

COMMONS

3. NPO法人化するメリット・デメリット（1/4）

	メリット	デメリット（コスト）
個人事業	★自由に始めてやめられる ★各種届出が法人よりは簡単	★信用が弱いので資金調達しにくい ★債務に対して無限責任 ★税務処理は必要
営利法人（有限会社 株式会社）	★個人事業よりも信用が得やすい ★行政の中小企業支援施策を活用できる ★個人事業よりも経費の処理がしやすい	★顧客満足を拡大し、企業間競争に勝つ ★市民からは「金儲け」と見られ警戒される場合もある
組合など	★メンバーの協力で一人ではできない事が可能 ★(共同購入、共同販売、助け合いシステム)も可	★経営理念をどうメンバーに浸透させるか ★メンバーの参画の維持 ★共益団体は、社会全体からの寄付や財政支援は集まりにくい
NPO法人	★目的やアイディアが共感を得られると様々な市民、行政、企業、財団、大学の支援を受けられる ★行政事業の受託可能性も広がっている ★マスコミが取り上げやすい	★掲げた目標で成果を示す必要がある ★共感により支援者を動かすマネジメント ★合意形成にエネルギーがいる ★情報公開も重要

COMMONS

3. NPO法人化するメリット・デメリット（2/4）

NPO法人化するメリット

- 社会的信用が高まる
- 専門性を高められる、アピールできる
- 組織として契約行為ができる（銀行に組織名で口座が作れる、団体印が作れる）
- 代表者個人ではなく、組織で責任を取れる
- 組織として分業体制を作りやすい
- 職員採用できる
- 法人対象事業の事業者になれる（委託事業、助成金申請）
- 寄付を集めやすくなる
- 認定NPO法人となり寄付者優遇税制を活用する道が開ける

3. NPO法人化するメリット・デメリット（3/4）

NPO法人化するデメリット

- 官公庁への届け出、保険、会計・税務等の事務コスト発生
- 毎年県に対し財務諸表とともに事業報告（県民の財産）
- 毎年の法人住民税（県民税2万円＋市民税約6万円）の対象となる
  ※ ただし減免措置あり
- 事業によっては（34業種）法人税がかかる
- 法人として積極的な情報公開が求められる
- 組織運営、理事会運営は定款どおりに
- 定款に記載のない事業をする場合、理事会もしくは総会を開いた上で法務局に定款変更の届け出をしなければならない
- 若干行政の監督を受ける
- 雇用した職員は雇用保険・社会保険に加入
- 解散時の残余財産は構成員に戻せない
- 解散時の官報掲載に8～10万円ほどかかる

3. NPO法人化するメリット・デメリット（4/4）

NPOを設立する前に・・・

1. 徹底的に調べ、考える！
- 他地域の先進事例は？
- 関連する行政の制度やサービスは？
- 地域の関連機関は？連携できる？
- 本当に社会的ニーズがある？
- 資格・能力は？

2. 仲間を集める（NPOは個人事業主ではありません！）
- 関係機関の会合に出席。イベントにボランティア参加
- 勉強会をつくり、講師を招く
- メディアにアプローチ
- NPOの作り方を一緒に学ぶ

3. 経営を担うチームと事業計画を作成

4. 経営資源の確保
ヒト、モノ、カネ（会費、私募債、寄付、助成金・・・）、情報、場所・・・

4. 組織化する時のコツ

NPOはグループ・ワークです！

- 自分の特技を生かすのは良いことですが、「私はこれがやりたい」だけでは周りはついてきません。地域のために、あなたができることを考えつつ、「**共感**」を得られるよう努力しましょう！
- 活動の重要性や取り組む課題について、**リーダー**が熱く語ろう！課題や活動の目的の共有は、丁寧に！
- 他の人の力を積極的に借りましょう。成功しているリーダーは、「**お願い上手**」！
- 成果を挙げているNPOは、身内だけの「仲良しグループ」ではありません。いろんな意見や特技を持った人を集め、**メンバーのバランス**に配慮しましょう！多様な人が集まると思いどおりにいかないこともありますが、課題解決力が高まります！**合意形成**にはしっかり時間をかけましょう。
- 協力相手を求めるとき、「**セクター**」を意識してください（行政、企業、生協、労働組合、メディア、教育機関など）。協力を得るのは大変でも、できた関係が活動に活きます。NPOの強みは、**ネットワーク**（人脈）です。
- 同じ課題意識を共有している**当事者同士**だと、組織化しやすいです。
- 組織化する時の生みの苦しみが大きいほど、足腰が強いしっかりした団体に！
- 誰が、何をやるか、**役割分担**を常に意識すると活動が前に進みます。
- 苦しくなったときは、団体の**ミッション**（目的）を思い出して！

グループワーク

メイク・セラピーの事業案を聞いてみよう!

ワールドカフェ（1/3）

「ワールドカフェ」って何？

リラックスしたカフェのような雰囲気の中で、メンバーが自由に入れ替わり、特定のテーマについて話し合うワークショップの手法。対話のプロセスを楽しみ、自由にアイディアを交換しましょう。参加者全員が主役です（ここから私は講師ではなく、ファシリテーターになります）。

ワールドカフェ（2/3）

協働推進ワールドカフェの進め方

① 現在のテーブル内での話し合い（他の方の意見を聞きながら、「全員で」自由に落書き）
② テーブル・ホストは席に残り、他の「旅人」は自由に席替えする
③ まずテーブル・ホストは、前のセッションで出た意見を　簡単に説明する。その後、旅人も前のテーブルで出た　意見を簡単に紹介する。
④ また特定のテーマで話し合う（再び自由に落書き）
⑤ 最後に元の席に戻り、テーブル・ホストと旅人が聞いた 対話を共有する

（発表はありません。他のテーブルの落書きを楽しみましょう）

8. 協働推進ワールドカフェ（3/3）

このカフェのルール

- 気楽に対話を楽しみましょう
- 発言は手短に（長く話すと、他の方の発言時間を奪ってしまいます）
- 他の方のお話を積極的に聴きましょう
- 1人1本テーブル上のマーカーを持って、全員「落書き」をしてください。絵を描いても構いません。書記はいませんし、落書きですから議事録でもありません

これはやめてください

- 同じテーブルの人を否定するような発言はやめましょう
- 黙って聴いているだけではもったいないです。積極的にお話しを

お題①

他のグループの話を共有しよう

お題②

どうしたらこの事業をよりスムーズに実現できるか考えよう

２．福島県男女共生センター「女と男の未来館」のプログラム

はじめに

国際的な災害とジェンダーに関する国際的な研究は、災害による被害には明白な男女格差があり、女性は男性に比べて人的被害が大きく、復興資源へのアクセスが不利になり、人権侵害にもあいやすく、災害リスクを軽減するための多くの役割を担うにもかかわらず公的組織から排除されることを明らかにしている。国内でも 2004 年の新潟県中越地震をきっかけに災害・復興・防災における男女共同参画が本格的に提起されるようになったが、実効性は極めて不十分であることが東日本大震災で明らかになっている[1]。

とりわけ震災に加えて東京電力福島第一原子力発電所の事故により広域的・複合的な被災を受けた福島では、生活基盤の直接被害に加え、復旧の遅れ、家族の離散、生涯にわたる健康－とりわけ妊娠・出産・育児への不安、差別など多様な課題に女性たちが直面している。こうした問題を解決していくには、地域の女性たち自身が自己決定し、当事者として活動していくことが重要であるが、そのためにはそれを可能にする支援が必要である。本事業のテーマである地域課題の解決と女性の経済的自立支援は、福島県の女性たちが被災者支援及び復興に向けた活動を行うための支援として重要なテーマである。こうした認識を持って今回のプログラム企画と実施に取り組んだ。

筆者は、検討委員の一員として企画段階から参加し、プログラム企画、当日のファシリテーターを担った。以下では、プログラムの企画から実施、フォローアップ講座として実施した復興活動の実践者と福島県男女共生センター職員との座談会をふり返り、今後の支援のあり方について検討する。

（１）プログラム実施までの準備過程

〇担当職員との打合せ

プログラムの企画にあたって、検討委員会の他に担当職員の野依智子研究員と実施目的についての意見交換を丁寧に行った。2011～12 年にかけて筆者は、被災者支援活動に取り組んだ男女共同参画センターの調査を実施した[2]。その際、支援者が本当に必要としているバックアップが得にくい実態が明らかになった。被災時は業務が増大するうえに、自身の被災も加わり支援者の心身の負担が大きい。その上、平常時の社会的資源やネットワークが機能しなくなるので、通常の力量が発揮できない劣悪な状況で支援活動を行うことになる。よって被災者のケアとバックアップが求められるが、こうした状況を被災地外の機関や研究者などが理解しようとせず、支援活動や調査などを要求されることがあるというこ

---

[1] 新井浩子「災害・復興と男女共同参画－女性が主体となっていくこと」村田晶子編『復興に女性たちの声を―3・11 とジェンダー』早稲田大学出版部,2012 年.

[2] 新井浩子「女性センターの被災者支援活動－施設スタッフ・ボランティアへのヒアリング調査から」『被災地支援者のエンパワメントに関する調査研究』公益財団法人日本女性学習財団,2012 年.

とがわかった。被災地の外にいるものが、被災された方々、支援者の状況を理解するというのは大変難しいことである。本事業でも以上のことに十分留意し、当事者の声に耳を傾けて、人々が本来持っている力を発揮できるようなバックアップを目指すことを確認した。具体的には、福島県で活動している女性たち、女性たちの支援機関となる福島県男女共生センターの職員にこれまでの活動や現状、今後への希望などを聴く打合せとヒアリングを実施し、プログラム内容を決めることとした。

○男女共生センター職員との打合せ

野依研究員と筆者が男女共生センターを訪問し、担当職員の岡部貴敏氏と打合せを行った。プログラムを共催した福島県男女共生センター「女と男の未来館」（以下「女と男の未来館」）は、2001 年に二本松市に建設された施設で、財団法人福島県青少年育成・男女共生推進機構が指定管理者となって運営している[3]。東日本大震災時に二本松市は震度 6 を観測したが、女と男の未来館の建物には大きな被害はなかった。その後被災者支援活動を行っている。主なものを 2 つあげる。第一は、発災翌日の 12 日に福島県から双葉厚生病院の患者の受け入れ要請があり、避難所として受け入れた。この方々が避難途中で被爆されていたため女と男の未来館に除染施設が設営されることとなり、職員が 24 時間交代で対応した。第二は、4 月 23 日から、避難所となった郡山市のビックパレットふくしまで開設された女性専用スペースの開設・運営支援である[4]。打合せを行った時点では、こうした緊急的な被災者支援活動は終了し、通常業務に戻りつつある様子であった。

担当職員からは地域の現状として以下の 2 点があげられた。第一は、生活が落ち着きを取り戻しつつある一方で、県民の間に分断が見られ、特に放射能による健康被害をどうとらえるかを巡って率直に話し合えないこと。第二は、支援活動に取り組む女性たちの団体やグループがあるが、横のつながりがなく互いの活動を知らないことである。

打合せで話し合ううちに、支援活動に取り組む人は多忙で、自身の被災も含め、これまでの活動や気持ちを話す機会が持ちにくいということも話された。原発震災[5]という解決の道筋が見えにくい状況での活動には様々な問題があるが、眼前の活動を進めるためには一つ一つの問題にかかわってはいられないし、気持ちを話し合う時間も持てない。こうした状況は女と男の未来館も同様で、今後の長期にわたる復興に向けて、センターがどのような役割を果たせばいいのか模索している様子がうかがえた。

そこで、まずは被災者支援や復興に向けた活動に取り組んでいる女性、取り組みたい女性を対象に、活動や気持ちを話し合う場をつくることを目的とし、その場に女と男の未来

---

[3] 福島県男女共生センター「女と男の未来館」ホームページ
http://www.f-miraikan.or.jp/pub/top.aspx

[4] 支援活動については、「福島からの特別報告　避難所における「女性専用スペース」のとりくみ」『社会教育実践研究フォーラム第 15 号』2012 年に詳しい。

[5] 地震と原発事故が重なって、それぞれが単独で起きた場合より格段に被害が拡大する複合災害を表す。『現代用語の基礎知識 2013』自由国民社,70～71 ページ.

館の職員も参加して今後のセンターの役割を考えるきっかけともすることにした。また、疲労している支援者のリフレッシュにもつながる内容を工夫することとした。

○復興活動をしている女性へのヒアリング

活動について語りあうだけの内容だと、語るほどの活動はしていないと考えて参加をためらう人が出てくる。本事業は活動に興味がある人にも参加してもらうことで、今後の活動のすそ野を広げたいので、講座の前半に事例報告を組み込むことにした。その際、福島県の女性と言っても年齢やライフステージ、関心などにより活動は多様である。多様な活動が紹介できるよう、女と男の未来館に相談し紹介してもらった3団体ー「peach heart（ピーチハート）」[6]、「かあちゃんの力プロジェクト」[7]、「ウィメンズスペースふくしま」に報告を依頼した。

事前に野依研究員が、3団体にこれまでの活動や現状、今後について話を聴くヒアリングを実施し、講座で話してもらいたい内容をうちあわせた。

（2）プログラムの概要

以上の経過を踏まえて、講座テーマを「語ろう・つながろう―これまで・現在（いま）・これからに向けて」とした。語ることで経験をふり返り、不安や迷いも含めて現状を確認することは、今後の方向性を見いだすうえで重要な過程である。さらに、互いの活動や思いを共有することによって、それぞれの強みを生かした連携が生まれる可能性も高い。

講座は2回とし、第1回のテーマを「『現在（いま）』の思いを語りあおう」、第2回を「『現在（いま）』を受け止めてこれからを考えよう」とした。

目的としては 2 点を設定した。第一は、原発震災により分断されている女性たちが、これまでの活動や思いを話すことで共有し、活動の方向性や直面している課題を確認できる場と関係をつくること、すなわち女性たちのエンパワーメントである。

第二は、共生センターの役割を考えることである。講座を通して女性たちのエンパワーメントをしてもそれだけでは不十分である。主体的な活動を続けていけるような支援の充実、すなわち支援者支援の充実も活動を継続していくうえで必要になると考えた。しかし、原発震災という未曽有の状況の中で、なにが支援者の支援になるのか、参考になる事例などもないのが現状である。女と男の未来館の職員や我々が、講座で語られる地域の女性たちの生の声に耳を傾けてセンターの役割を具体的に考えると同時に、講座のなかでも活動を続けていく条件の一つとしてセンターの役割について話し合いたいと考えた。

対象は、地域活動をしている女性、または地域活動に関心がある女性とした。

---

[6] peach heart ホームページ　http://peach-heart.jimdo.com/
[7] かあちゃんの力・プロジェクトホームページ　http://www.ka-tyan.com/

講座日程は以下のとおりである。

≪講座日程≫
第１回　2012 年 12 月 4 日（火）21:00～15:30
第２回　2012 年 12 月 11 日（火）13:00～15:00

福島県は全国でも 3 番目に広い県であり、会場の福島県男女共生センターは福島市からも郡山市からも距離がある立地である。さらに、安定を取り戻しつつあるとはいえ心身共に負担が大きい福島県の現状を考慮して、平日の午後１時に開始し３時台に終了する時間帯を考えた。但し、第１回は 12 時から開始とし、昼食をとりながら交流する内容とした。

チラシは、共生センターの職員が作成した（参考資料 1 参照）。配布は 11 月で、配布先は以下である。

≪広報・チラシ配布先≫

・福島県市町村男女共同参画行政担当
・福島市内学習センター
・福島県内図書館
・福島県女性団体連絡協議会加盟団体
・商工会議所　　等々

講座開始時に計画したプログラムは以下である。

テーマ：「地域課題の解決と女性の経済的自立に向けて」
語ろう・つながろうーこれまで・現在（いま）・これから

◇第１回　「現在（いま）」の思いを語り合おう

【ねらい】
・福島で支援活動を行っている団体からの事例報告をきっかけに、受講生が各自の活動を振り返り、現在の課題や思いを共有する。
・事例報告団体のランチを食べながら、受講生同士の交流をはかる。

【内容】

形　式	時　間	内　　容	担　当　者	備　　考
挨拶	12:00	講座開催のあいさつ	福島県男女共生センター副館長；中野伸介 司会；飯島好廣	受講生を 3 グループにする

	12:05	・本講座の説明と事例報告者の紹介	ファシリテーター；野依智子 ①　渡邊とみ子 ②　丹羽麻子 ③　鎌田千瑛美	1 事例 15 分
講義	12:10 12:55	【事例報告】 ①　かーちゃんの力・プロジェクト ②　ウィメンズスペースふくしま ③　ピーチ･ハート 【質疑応答】 ・事実確認程度		
交流会	13:05 13:45	【ランチ交流会】 ・ランチしながら、自己紹介＆事例報告の感想、疑問に思ったこと、伝えたいことを話しあう。 ・報告者に聞きたいこと、グループで話して思ったことなどをポストイットに書いて、ボードに貼る。	ファシリ；野依智子	・3 グループにそれぞれ岡部・野依と事例報告者 3 名がはいる。 ・自己紹介など一巡したら、弁当を片付けて、ポストイットに記載・ボードに貼る作業にはいる。
休憩	14:00			
全体	14:10	【事例報告を深めよう】 ・ボードに書かれたことを全体で共有しながら、事例報告者への質問など、事例報告者－参加者間のやり取りを行う。	ファシリテーター；新井浩子	
グループワークと全体会	14:50	【思いを語り合おう】 ・グループで感想を出しあう。 ・全員でワークショップで感じたこと、考えたこと、次回にむけての思いなどを共有する。	ファシリテーター；新井浩子	
まとめ	15:10	【まとめ】 ・事例報告者からのメッセージ ・共生センターからのメッセージ ・次回に向けてのオリエンテーション		

◇第２回　「現在（いま）」を受け止めて、これからを考えよう

【ねらい】

・地域活動の「現在（いま）」、わたしの「現在（いま）」を受け止めて、これからのことを考える。

・受講者同士、受講者と地元NPOとのネットワークをはかる。

【内容】

形　式	時間配分	内　　容	担　当　者	備　　考
グループ・ワーク	13:00 13:10	【前回の振り返り】 【今を受けとめてこれからを考えよう】 〈グループ討議〉; あれから考えたこと、活動内容＆自己紹介 〈グループチェンジ（半分入れ替え？記録係そのまま)〉; 記録係が１回目の話しを紹介。メンバーで思ったことを話す。 〈元のグループに戻る〉;福島の女性たちの今とこれからについて、考えたことを話す。やりたいこと、できそうなことも出しあう。 【あれから考えたこと＆5 年後に実現したいこと】 ・前回の講座以後、考えたこと・思ったことを話しあう ・課題と解決策もしくは「やってみたいこと」を話しあう ・これからできそうなことを話しあう	ファシリテーター; 新井浩子	ワールド･カフェ方式; 2グループで3回転 20 分づつで 3 回転 グループに岡部・センター職員・野依がはいる。
全体	14:30	【発表１】 ・話しあってきがついたこと、感想を話しあう。 ・直近のやってみたいこと・５年後にやってみたいことを発表する。		１分×２０人
	14:50	【発表のコメントと本講座のまとめ】 終了	ファシリ; 新井 コメント; 岡部・野依・新井	1人3分

（３）学習支援について

学習支援として大事にしようと考えたのは、参加者同士のコミュニケーションを活発化することである。具体的には、学習者が自身の経験や思いを言語化する―話す・書くことを可能にする場をつくり、言語化した経験や思いを共有することを重視した。

成人の学習理論では、成人は経験をふり返ることで学ぶことが指摘されている。学習というと、専門家が課題や解決の方向性を提示し、学習者がそれを自分たちの生活にあてはめるという傾向があったが、それでは現実に起こる具体的な問題を解決していく力は活性化されない。大事なのは、自分たちの行っている活動について具体的な活動内容や大事にしていること、気になっていることなどを共有し、検討することであり、そのためには経験や思いを言語化することが必要になる。経験や思いを言語化するうえで、学習者同士の関係性は大きく影響する。私たちは、自身の発言が否定されたり、理解されない恐れがあるとなかなか発言できない。よって共感してもらえる関係は、言語化の基盤としてとても重要である。しかし一方で、共感の関係だけでは学びはうまれない。自身とことなる他者と出会うことで、私たちは経験を新しい見方で見られるようになり、検討することができるようになる。

以上のような観点から今回のプログラムでは、学習者が自身の経験をふり返り、現状を確認し、今後の方向性を見いだせるよう、①共感的な関係をつくること、②話す・書くといった言語化を行うこと、③異質な経験や意見を顕在化させること、を学習支援として重視した。

（４）プログラムの流れ

以下では実施したプログラムについてふり返る。

◇第１回講座

第１回「『現在（いま)』の思いを語りあおう」は、12 月 4 日（火）12:00 から開催した。第 1 回のねらいは「福島で支援活動を行っている団体からの事例報告をきっかけに受講生が各自の活動をふり返り、現在の課題や思いを共有する」「ランチを食べながら受講生同士の交流をはかる」の 2 つである。中でも、経験や思いを話せる関係をつくることと、経験や思いを言語化して整理し、受講生同士で共有することを目的として重視した。

（ａ）参加者

参加者は 24 名。県内で被災者支援活動をしている女性団体のメンバーや共生センターの施設ボランティアなど活動経験のある人に加えて、これから地域活動をしたいという人も参加した。避難している女性、福島の復興に関わりたいと東京から参加した女性もいた。

（ｂ）プログラムの流れ

【事例報告】

5名づつ3グループに分かれた。本講座の目的を説明した後、事例報告者の3名を紹介した。その後1事例15分ずつ、①設立の経緯やこれまでの活動、②現在の活動内容、③直面している課題や今後取り組みたいことについて報告を聴いた。

事例報告を聴く際には、後のグループワークの手がかりとなるよう、印象的な言葉や感想などをメモするヒアリングシート（参考資料2）を用意した。報告内容については、当日資料および記録（参考資料3、4）を参照。

≪事例報告者≫

鎌田千瑛美さん：peach heart（ピーチハート）代表

渡邊とみ子さん：かーちゃんの力・プロジェクト協議会代表

丹羽麻子さん：ウィメンズスペースふくしま副代表理事

【ランチ交流会】

報告を聴いた後、グループごとに昼食をとりながら、交流する時間を用意した。グループには事例報告者にも加わってもらった。

導入として自己紹介シート(参考資料5)を用意した。シートには　①呼んでほしい名前、②最近ほっとしたこと、③今日の講座で話したいこと・聞きたいこと・考えたいこと・知りたいこと　の質問を用意し、記入後にシートを示しながら一人ひとり自己紹介をした。

昼食には、かーちゃんの力・プロジェクト協議会が作成・販売しているお弁当を用意した。お弁当について以前から興味があったという参加者も多く、参加者同士のやり取りも活発になり、リラックスした雰囲気が作られた。

昼食が終了したところで、報告を聴いての感想や質問などを自由に出しあった。出された意見はポストイットに書き、模造紙に張って分類した。各グループには、グループ・ファシリテーターとして野依研究員、女と男の未来館職員の岡部氏、水野史恵氏が入った。ファシリテーターは、グループワークに不慣れな参加者に質問をしたり、ポストイットへの記入を助けるなど、グループのメンバーが主体的に学習プロセスに参加できるよう支援した。

【全体ワーク―事例報告を深める】

グループごとに模造紙を壁に貼り、感想や意見を発表して全体で共有した（参考資料 6）。事例報告者には、出された質問や意見に対して回答をしてもらった。さらに、事例報告者から参加者に対して質問をしたり、報告者の回答に対して参加者から意見をもらったりと、会場の一人ひとりにマイクを回しながら、相互にやり取りをした。

【グループワーク・まとめ】

グループに戻って、これまでの感想や発見、次回に向けての思いなどを一人ひとり話した。その後、各グループ一人の報告者を決めて、グループでの話し合いと自身の感想を全体に向けて報告してもらった。最後に、事例報告者からメッセージをもらい、終了した。

実際のプログラムの流れは以下である。

◇第１回　　「現在（いま）」の思いを語り合おう

【ねらい】

・福島で支援活動を行っている団体からの事例報告をきっかけに、受講生が各自の活動を振り返り、現在の課題や思いを共有する。

・事例報告団体のランチを食べながら、受講生同士の交流をはかる。

【内容】

形　式	時　間	内　　容	担　当　者	備　　考
挨拶	12:00	講座開催のあいさつ	福島県男女共生センター副館長；中野伸介 司会；飯島好廣	受講生を 3 グループにする
	12:07	・本講座の説明と事例報告者の紹介	ファシリテーター；野依智子	
講義	12:15 12:30 12:47 12:55	【事例報告】 ①　ピーチ･ハート ②　かーちゃんの力・プロジェクト ③　ウィメンズスペースふくしま 【質疑応答】 ・事実確認程度	①　鎌田千瑛美 ②　渡邊とみ子 ③　丹羽麻子	1 事例 15 分
交流会	13:05	【ランチ交流会】 ・ランチしながら、自己紹介＆事例報告の感想、疑問に思ったこと、伝えたいことを話しあう。 ・報告者に聞きたいこと、グループで話して思ったことなどをポストイットに書いて、模造紙に貼り、分類する。	ファシリ；野依智子	・3 グループにそれぞれ岡部･野依と事例報告者 3 名がはいる。 ・自己紹介など一巡したら、弁当を片付けて、ポストイットに記載･作業にはいる。
休憩	14:00			
全体	14:10	【事例報告を深めよう】 ・ボードに書かれたことを全体で共有しながら、事例報告者への質問など、事例報告者－参加者間のやり取りを行う。	ファシリテーター；新井浩子	
グループワークと全体会	14:53	【思いを語り合おう】 ・グループで感想を出しあう。 ･全員でワークショップで感じたこと、考えたこと、次回にむけての思いなどを共有する。	ファシリテーター；新井浩子	

まとめ	15:20	【まとめ】 ・事例報告者からのメッセージ ・共生センターからのメッセージ ・次回に向けてのオリエンテーション		

（ｃ）参加者の感想

講座終了後に、ふり返りシートを記入してもらった。内容は以下の通りである。

・活発な発言、意見の交換ができました。顔と顔を合わせて率直な意見を聞くことができ、又、話すことができよかったと思います。震災直後は”がんばらなくちゃ”” みんなもそうなんだから、がまんしなくちゃ”と、ある意味目標を一つに関わり合う人々が進んでこれましたが、時間の経過、生活環境の安定等々、状況の変化とともにそれぞれの想いが少しづつずれてきている中、チームや仲間や組織をまとめることが難しくなってきているという意見に"復興”という名の元に地元、現場での苦労の深さを痛感しました。セミナーを終えると疲労感を感じることが少なくないのですが、今回はあっという間に時が過ぎ充実できたと思います。このようなセミナーは支援者への支援につながると思います。

・かーちゃんの力プロジェクトのとみ子さんと会ってお話ができて楽しく時間がすぎました。プロジェクトやお名前は知っていましたが、飯舘村からの活動を事例報告で聞くことができ、その想いの強さを感じました。実際のプロジェクトの運営は金銭面、人材面でも大変なことを知ることができました。その覚悟は大変なものと思います。でも疲れてたおれる前に温泉に行って下さいね。その他いろいろ気持ちを出せる場になっていたので、少しすっきりしました。長く続く支援はもしかすると次世代にも続くことになるかも知れない。そういう視点も必要なのかと思いました。

・男性にも一緒に考えてほしいことをグループで話しあうことが長かった。発信が大事と言っても、なかなか難しくどのように展開すればよいのか、はっきりとした答えや方向性がもやもやしている。このような「思いを共有する会」は参加者満足度は高いのだが、なかなか広がらない。センターをどう活用いただくのか拠点施設の役割を果たすためどう事業を行うか考えたい。

・福島の方の考えが東京にまったく伝わっていないことをまざまざと感じた。若い女性のこれからの結婚、出産の話、食の話、女性のかかえてしまった問題の話と、どれも重くて重要すぎる問題が東京で感じられないことにびっくりした。今、静岡のお茶農家さんとお茶のことを考えているが、まずはそこにどう伝えて放射線の問題を当事者の問題としてとらえてもらえるように言ってみたい。本当なら静岡も当時者のはずであるので。

◇第２回講座

第２回「『現在（いま)』を受け止めて、これからを考えよう」は、12 月 11 日（火）13:00 から開始した。第 2 回のねらいは「地域活動の『現在（いま)』わたしの『現在（いま)』

を受け止めてこれからのこと考える」「受講者同士、受講者と地元 NPO とのネットワークをはかる」とした。

第 1 回で、事例報告を手掛かりにこれまでの経験や思いを言語化して整理したのを踏まえて、明らかになった課題の解決や新たに活動を始めるための行動を具体化することを目的とした。そのため企画段階では中間支援を行う NPO へつなぐことも検討したが、適当な機関を見つけることができなかった。そこで、今後の活動拠点として女と男の未来館を活用してもらうことを提案することとした。

（ａ）参加者

参加者は 13 名。今回の講座では第 2 回の開催日を 1 週間後に設定したが、用事があり出られない参加者が複数いた。参加者からも残念だという声が上がっており、間隔をあけての開催のほうがよかったようである。

（ｂ）プログラムの流れ

【前回のふり返り・自己紹介】

5 人ずつ 2 グループに分かれた。まず、第 1 回の最後に記入した「ふり返りシート」の内容を印刷して配布し、前回の講座をふり返った。その後、自身の活動内容や講座に参加した理由などを、ゆっくり時間を取って一人ずつ話した。

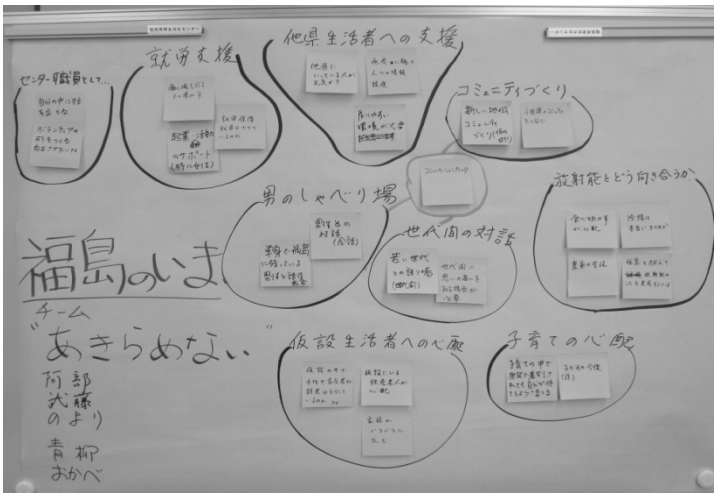
【グループワーク】

自己紹介が終わった後、前回の講座から今日までの 1 週間に考えたことと、現在直面している課題について話し合った。出た意見は一つずつポストイットに書きだし、模造紙に張って分類し小タイトルをつけた。最後に全体のテーマを表すタイトルをつけてまとめた（参考資料 7）。

意見の分類とまとめは、互いの意見を理解し合う必要があるため時間を要したが、慣れてくると積極的に意見を出しあい、イラストや文字の色にもこだわって、まとめの作業に取り組んでいた。

【グループ発表】

話し合いの内容をグループごとに報告して、共有した。互いの報告について、質問や意見交換をする時間も用意した。偶然だが一つのグループは福島の現状について、もうひとつのグループはこれからの取り組みについて報告したため、ふたつを合わせると現状と解決策が浮かぶ結果となった。今後の方向性を共有するところまで協力してできたので、参加者も達成感を感じた様子だった。



【アクションプランの記入】

グループ発表の後は、一人ひとりが今後の行動計画を立て、講座終了後の行動を具体化した。一般的な傾向として、講座を通して課題意識や目標を持つようになっても、忙しい日常に戻るとモチベーションが低下して、実際の行動に移さないことがある。そこで、「わたしのアクションプラン」シート（参考資料 8）を用意し、帰宅してから、1 週間以内、1 か月後など、具体的に時期を決めた行動計画を立てて具体的な一歩を踏み出せるよう工夫した。シートを記入した後は、グループごとに内容を発表してエールを贈りあった。

【まとめ】

2 回の講座をふり返ったあと、女と男の未来館と国立女性教育会館が今回の講座を実施する趣旨を確認した。福島県男女共生センター「女と男の未来館」は、地域の男女共同参画推進の拠点施設として設置されている。グループワークで参加者が明らかにしたように地域には原発震災により多くの課題が顕在化している。しかし今回の講座のように経験や思いを言葉にして話し合うことで、課題を明らかにし、解決の方向性を見いだすことができる。男女共生センターは、女性たちが主体として行動することを支援する施設であるので、これからもセンターを拠点に活動を続けていってほしいことを話して終了した。

実際のプログラムの流れは以下である。

◇第２回　「現在（いま）」を受け止めて、これからを考えよう

【ねらい】

・地域活動の「現在（いま）」、わたしの「現在（いま）」を受け止めて、これからのことを考える。

・受講者同士、受講者と地元 NPO とのネットワークをはかる。

【内容】

形　式	時間配分	内　　容	担　当　者	備　　考
グループ・ワーク	13:00 13:07 13:40	【前回の振り返り】 【自己紹介】 自分の活動内容、参加した理由など、ゆっくり時間をとって自己紹介する 【今を受けとめてこれからを考えよう】 〈グループ討議〉 ・あれから考えたこと（前回の講座以後、考えたこと・思ったことを話しあう） ・現在の課題 をポストイットに書いて、分類、表題をつける。 ・センターで何ができるのか	ファシリテーター；新井浩子	・前回と重ならないように２グループに分ける ・前回の感想シート、グループ討議資料を配布 ・野依・岡部もグループにはいる ・模造紙・ポストイット（２色）・サインペン・マジック（２セット）用意する
全体	14:30 14:42	【グループ発表】 ・グループごとに発表して、質疑応答。		・1 グループ×5分
グループ	14:47	【アクション・シート作成】 ・これまでの講座を振りかえって、１ヵ月後・３ヵ月後・１年後に何をするかを考える。		
	14:45 15:00	【発表のコメントと本講座のまとめ】 終了（振り返りシート記入）	コメント；新井・野依・岡部	１人３分

（ｃ）参加者の感想

講座終了後に、ふり返りシートを記入してもらった。内容は以下の通りである。

・チーム「あきらめない」、チーム「これから」と、２つのチーム名をつないだところにつながりを感じました。参加者の方が感じたり、考えたりしていたことがとても近くてびっくりでもあり、嬉しくもありでした。地元に戻ってからの活動や生活は別々でも同じ仲間がいると思えて力強いです。１人ではないと再確認できる場はエンパワーの場でもあるのだと思いました。

・様々な立場で復興の取り組みをしている人たちと話ができてよかった。福島の問題は日本全体にも言えることだと伝えていけたらと思う。話す場はとても重要でこのような機会は大変ありがたいし、うれしいです。

・震災から今まで、目の前のことをするのに精いっぱいで自分を振り返ることができていませんでした。今回のセミナーは今までの自分を考えるきっかけとなりました。様々な

活動をしている皆さんの話がきけて、少し立ちどまりこれからやりたいことについてゆっくり考えたいと思えました。

（５）フォローアップ講座―座談会の実施

各回の終了後に、女と男の未来館職員と講座内容のふり返りをした。職員からは、被災者支援や復興に向けた活動や思いについて市民と率直に話し合うことで、職員としても気づきがあったという意見が出た。寄せられる相談に乗ることはあっても、センターへの期待を聴くという機会はあまりないということだった。そこで、講座全体をふり返ると同時に、支援活動に取り組んでいる市民からセンターへの期待などを聴き、これから果たすべき役割を考える座談会「福島の女性団体支援のための『センターの役割』とは」を企画した。

座談会は 2013 年 1 月 30 日（水）13:00 から実施した。座談会のねらいは「福島の女性団体の活動の現状と課題を共有した第 2 回講座をふり返り、女性センターとりわけ県の女性センターの役割とは何かについて意見交換と提案を行う」とした。参加者は、女と男の未来館から今回の講座を担当した岡部氏、ビッグパレットふくしまの女性専用スペースの運営支援担当者だった長沢涼子氏、第 1 回講座の事例報告者から鎌田千瑛美さん（peach heart 代表）、丹羽麻子さん（ウィメンズスペースふくしま副代表理事）、国立女性教育会館から野依研究員、検討委員として新井である。

鎌田さん、丹羽さんからは、ジェンダーの観点から現状と課題を明らかにすること、男女共同参画センターで取り組まれてきた女性支援のノウハウと経験を生かすことが指摘された。座談会の記録は参考資料 9 に掲載するので、以下では概要を述べる。

○福島の女性たちの活動状況

まずそれぞれの立場から福島の女性たちの活動状況と課題について話を聴いた。鎌田さんからは、地域で様々な女性たちがグループをつくって活動しているが、活動として成果があがらず疲弊し始めていることが話された。具体的には、活動経験や事務局体制が整わないため実効性のある活動がしにくいこと。資金調達や広報など実践的なノウハウを学ぶ機会が福島県には少ないこと。実際には多様な活動が行われているのに、どのようなグループが何を目的に活動しているかを把握できる情報がないので、連携するのが難しいといったことである。さらに、これまでは気持ちを吐き出せる場や関係の提供が求められていたが、その段階は終了しつつあり、具体的な課題解決につながる支援が求められていることも指摘された。その上で必要な支援として、活動団体の実態と直面している課題についての調査・分析、客観的な情報提供、市民活動に関する研修の充実化があげられた。

これに対して丹羽さんからは、男女共同参画センターなどが取り組んできた女性支援のノウハウが、被災者支援や復興支援活動を発展させていくうえでも有効なことが話された。原発震災の被害を大きく受けた福島では、発災直後から放射能の健康被害をどうとらえる

かで住民・家族間でも意見が分かれている。専門家の間でも見解が異なる上に、政府の情報公開が極めて不十分な中で、家族責任を重く負っている女性の心身の負担は大きい。ただ放射能に対する不安の基盤には、自分自身の感覚や意見に自信を持てなかったり、他者と活動をする際に自分の意見を言えないといった問題がある。自分を大事にする、孤立しない、自己肯定感を高めるといった女性支援のアプローチは、個々の女性の自己決定を支えると同時に、女性たちの組織的活動を支援するためにも有効であり、男女共同参画センターの専門性を発揮することが求められていると話された。

○女と男の未来館に期待すること

次に、センターの事業計画や、福島県における男女共同参画の視点からの復興支援等について確認しながら、女と男の未来館の役割について話し合った。センターへ期待することとして鎌田さんからは、自分たちではできないところをサポートしてほしいこと、放射能の健康被害について気がついた時には手遅れだったという事態になるのではないかという恐れが若い世代にはあること、県のセンターというメリットを生かして若年層の支援を充実させてほしいことなどが話された。

丹羽さんからは、女と男の未来館が潜在的に持っているリソースー県や市町村とのネットワーク、宿泊機能がある施設、地域の女性団体やグループとのつながり、事業を通して蓄積したノウハウなど―を言語化して公開し、活用させてほしいと述べた。また、市町村の男女共同参画センター等と連携して、地域の女性支援を充実させる必要もあると話された。

こうした期待に対して女と男の未来館職員からは、リソースの可視化に取り組み、活動団体が相談してくれる相手でいたいという意見が出た一方で、提起された事柄の必要性は強く感じるけれど実行しにくいということも話された。平常時にしていないことを、災害後に急にやろうとしてもできない。座談会であげられたセンターの役割を果たすには、事業目的や人員体制等も含めてセンターのあり方や仕事の仕方を変えていく必要があるし、職員の力量形成を保障することも求められるということであろう。

（６）成果と課題

今回のプログラムは、被災者支援や復興に向けた活動に取り組んでいる女性、取り組みたい女性を対象とし、①原発震災により分断されている女性たちがこれまでの活動や思いを話すことで共有し活動の方向性や直面している課題を確認できる場と関係をつくること②共生センターの職員や私たちが、講座で語られる地域の女性たちの生の声に耳を傾けてセンターの役割を具体的に考えると同時に、講座のなかでも活動を続けていく条件の一つとしてセンターの役割について話し合うこと、の 2 点を目的として実施した。ふり返りシートの内容から、①の目的はほぼ達成できたと考えられる。

方法としては、学習者が自身の経験や思いを言語化する―話す・書くことを可能にする

場をつくり、言語化した経験や思いを共有することが、現状を確認し今後の方向性を確認するうえで有効であることが見出された。参加者の感想においても、「様々な立場で復興の取り組みをしている人たちと話ができてよかった」「今まで目の前のことをするのに精いっぱいで自分をふり返ることができていませんでした。今回のセミナーは今までの自分を考えるきっかけになりました」「一人ではないと再確認できる場はエンパワーの場でもあるのだと思いました」など、話すこと・書くこと・共有して検討することが、現実に向き合い、今後の活動を冷静に考えることに役立つことが見られる。今後も、復興に向けた地域活動支援として話す・書く・共有して検討する、を組み合わせたワークを活用することを勧めたい。

②センターの役割については、講座の終了後に、第 1 回の講座に事例報告者として参加していただいた 2 人からセンターへの期待などを聴き、これから果たすべき役割を考える座談会を実施した。座談会では、福島の女性たちの活動状況と課題、センターの役割について率直な意見交換が行われた。多忙な現場では、講座全体やセンターの役割についてふり返る機会を持つことが難しい。今回の座談会のように、講座に関わった職員と市民が共に実践をふり返り、話し合う機会は、職員の力量形成として効果があると思われる。講座のフォローアップは参加者を対象とするものが多いが、職員を対象とするフォローとして今回の取り組みは参考になると考える。

今後の課題として２点をあげたい。第一は、実施場所である。今回のプログラムは、福島県男女共生センター「女と男の未来館」と共催で実施した。会場とした女と男の未来館は、宿泊施設や図書室、レストランを有する充実した施設であるが福島市、郡山市など主要な都市からは距離がある。また面積が広い福島県の全域から参加者を集めることは、そもそも難しい。より多くの人に参加してもらうためには、市町村の男女共同参画センターと連携するなどの工夫が必要だと思われる。

第二は、地域活動を支援するバックアップ体制の整備である。先述したように、プログラム自体は、現状を確認し今後の方向性を見いだすという目的を達成することができた。参加者の感想も、講座を通して活動をふり返り、地域で活動する女性たちとつながり、今後の活動を具体化できたことを評価している。しかし、実際の地域活動を支援する手立てにおいては、女と男の未来館の活用を提案することにとどまり、具体的な道筋をつけることはできなかった。

地域課題の解決を目指す活動は、行政の縦割りに収まらない総合的な性格を持つが、今回のような被災者支援や復興における活動ではそれが一層顕著である。よって活動を支援するには、多様な機関や団体とが互いの強みを生かしあう有機的なネットワークを地域に構築することが重要である。そのためには、男女共同参画センターができること／できないことを精査することが必要である。しかしフォローアップとして実施した座談会では、センターの持つリソースの言語化や他機関・団体との連携の必要性は認識しつつも、実行するのが難しいことが指摘された。

今回の取り組みを通して、被災地における女性の地域活動を活発化させるためには、講座だけでなく、実際の活動を支えるバックアップ体制が求められていること。さらに、必要性を認識しても実現するのが難しい状況に地域の男女共同参画センターがあることが明らかになった。よって、本事業テーマである「地域課題の解決と女性の経済的自立」を推進するには、地域活動のバックアップ体制の中核機関として男女共同参画センターが機能することを可能にする支援策の開発と実施が、今日のような学習プログラム開発に加えて必要である。今後の課題として指摘したい。

（新井　浩子）

◇参考資料B

交流&研修会　「地域課題の解決と女性の経済的自立に向けて」

語ろう・つながろう

ー これまで・現在（いま）・これからに向けて

いま県内では、東日本大震災・原発放射能被害による被災者支援活動をはじめとした地域課題解決のために多くの女性たちが活動しています。「これまで」「いま」「これから」の活動や思いを共有する交流＆研修会を開催します。
すでに活動している方もこれから活動したい方も大歓迎。たくさん語ってつながりましょう！

●と　き　1日目　平成24年12月 4日（火）　12:00～15:30
　　2日目　12月11日（火）　13:00～15:00

●ところ　福島県男女共生センター（二本松市）第5研修室（12/4）、第3研修室（12/11）

●対　象　地域活動をしている、または、地域活動に関心のある女性
（20名程度・先着順）

●プログラム（予定）

【1日目】　12月 4日（火）
テーマ：「現在（いま）」の思いを語り合おう
11:30～　受付
12:00～　開会
12:10～　事例報告
13:00～　ランチ交流会　「かーちゃんの笑顔弁当」
14:00～　グループワーク
15:00～　まとめ
15:30　1日目終了

【2日目】　12月 11日（火）
テーマ：「現在（いま）」を受け止めて、これからを考えよう
12:30～　受付
13:00～　前回の振り返りとグループワーク
14:20～　グループ発表
14:40～　まとめ
15:00　終了

【1日目　事例報告者】

ウィメンズスペースふくしま　副代表理事
（旧「女性の自立を応援する会」）
丹羽　麻子さん
ビッグパレットふくしま 避難所内「女性専用スペース」運営や被災女性の電話相談事業

かーちゃんの力・プロジェクト協議会 代表
渡邊　とみ子さん
飯舘村、葛尾村、浪江町などの「かーちゃん（女性農業者）」たちによる、地域特産品や加工食品作り、販売
※「かーちゃんの笑顔弁当」を作っています！

peach heart（ピーチハート）代表
鎌田　千瑛美さん
ふくしまの女子たちが、いつ・どこででも、「自分らしく」生きられ、つながる場づくりを目指し、「fuku×fukuガールズcafe」を開催

●参加費　参加無料（11/28締切）※ただし、1日目ランチ交流会は600円（税込）がかかります。

●その他　無料託児あります。（1歳半～就学前まで。託児申込は11/21締切）

●申込方法　裏面申込書に必要事項を記入の上、郵送やFAX、メールにて（11/28締切）
※メール申込みの方は本文に必要事項を記入してください。

主催：独立行政法人国立女性教育会館、財団法人福島県青少年育成・男女共生推進機構 福島県男女共生センター「女と男の未来館」

参　加　申　込　書

研修&交流会 「地域課題の解決と女性の経済的自立に向けて」

語ろう・つながろう －これまで・現在(いま)・これからに向けて

必要事項(太ワク内)を記入のうえ、持参・郵送・FAXまたはメールでお申し込みください。※メール申込みの方は本文に必要事項を記入してください。
申込み締切:　11 月 28 日 (水)　※定員になり次第締切ります。

連絡先住所	〒　　－	電話・FAX 番　号	
ふりがな 氏　　名			
参加希望 (○をつけてください)	・2日間(12/4,11)参加　　・1日目(12/4)のみ参加　　・2日目(12/11)のみ参加		

※以下は、差し支えなければご記入ください。

チラシの 入手先		職　業 または所属団体	
性　　別 (性自認)		年　齢	歳

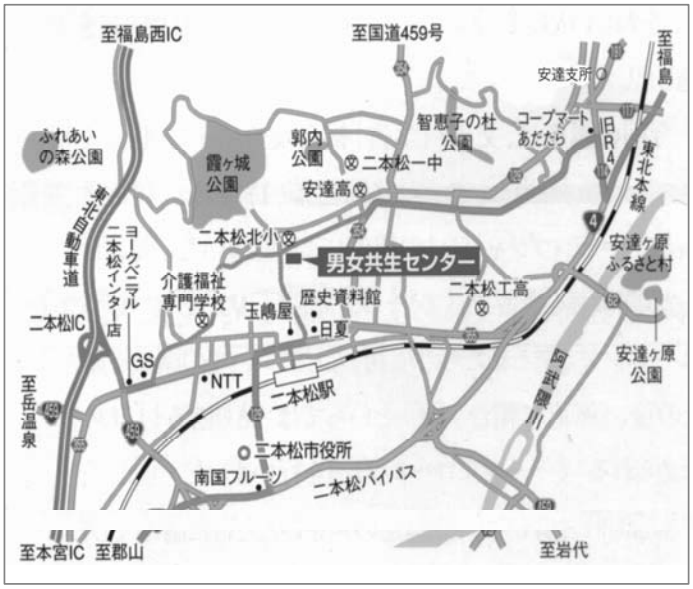
申込書に記入していただく個人情報は下記の目的で利用するもので、それ以外の目的で利用することはありません。
参加者の決定／参加者への連絡・通知／参加者名簿の作成

※無料託児申込書（託児希望の方は、11月 21日（水）までにお申込ください）

お子さんの名前（ふりがな）	性　　別	年　齢	連絡事項
		歳	
		歳	

＊1歳半～就学前までのお子さんをセンター登録ボランティアがお預かりします。
＊お薬を飲んでいる、又は具合の悪い（発熱・感染症疾患等）お子さんはお預かりできません。
＊お申し込みの方には後日詳細をお知らせしますので住所等ご記入もれのないようにお願いします。

会場案内図



お申込先

(財)福島県青少年育成・男女共生推進機構
福島県男女共生センター 事業課
〒964-0904　二本松市郭内一丁目196-1
TEL:(0243)23-8304
FAX:(0243)23-8314

宿泊料「半額」キャンペーン実施中！

センター主催事業に参加し、宿泊される方の宿泊料が**「半額」**となるキャンペーンを実施しています。
（前泊も割引きとなります。）

・1室1名でのご利用　お一人様　**2,100円**
（通常料金　4,200円）
・1室2名以上でのご利用　お一人様　**1,900円**
（通常料金　3,800円）

宿泊のお申込みは 電話 (0243)-23-8301
※申込の際にシンポジウム参加者であることをお申し出ください。

語ろう・つながろう 2012　事例報告ヒアリングシート

印象的な言葉・感想・疑問等のメモ用紙として自由に使ってください。

語ろう・つながろう
2012.12.12

peach heart 団体概要

peach heart

設立にあたり

設立経緯

■「peach heart」は福島県在住・福島県出身（避難中も含む）の若い女性を中心に立ち上がった団体です。
福島を生きる女性たちの生活は３月11日以降一変しました。
目に見えない放射能への恐怖、そして放射能の問題は、個人により意見・判断の違いがあることから家族や友達、恋人の間ですら本音で話すことができない現状が、福島の中にありました。

■一方で、この問題は近い将来、子どもを産み育てていく女性たちにとって、とても身近な問題です。
現在福島を代表とする放射能汚染地域へは、子どもたちや妊婦さんに向けて、たくさんのあたたかい支援の手が差し伸べられていますが、残念ながら「これからのお母さんになろう」という若い女性たちへフォローは、行政・民間を含めても極めて少ない状況です。

設立にあたり

活動の目的

■「peach heart」では、ひとりひとりそれぞれの意見や判断が違っても、それぞれの想いや決断を否定することなく、想い合い、理解し合える、「本音のいえる場づくり」を目指して活動しています。

学生、社会人などの枠を超えて、同じ境遇にある若い女性たち自らが、
“この福島をどう生きるのか？”
“女性として、未来のママとして。どんな女性になっていくのか？”
話し合い、支え合えることを目的としています。

Peach heart girls　３つの約束

**①自分のココロとカラダを精いっぱい大切にする。
そして、大切な人も大切に出来る人になる。**

②福島を想う心を持ち続ける。

③自分らしく、イキイキと輝いて生きる。

活動紹介

fuku×fukuガールズcafeの定期開催

「自分らしい」特技や趣味、仕事をもった女性たちの価値観、生き方を知ることで、自分自身のなりたい姿、それぞれの幸せな未来を考えるきっかけづくりの場を提供します。

第1回
『ピラティス講座
＋ガールズトークセッション』
・ピラティス講師：六戸　慈
参加者：10名

第2回
『オリジナルマスク手作り講座
＋ガールズトークカフェ』
・講師：小笠原　真代
参加者：10名

第3回
『日本食アレンジdeモテごはん』
放射線に強い体を作る食事の料理教室
※3月24日開催予定

活動紹介

Restripの実施

**いま、福島に生きることは、見えない不安と向き合い続けること。
気軽に旅行（trip）に行く感覚でココロもカラダも保養（rest）する『Restrip（レストリップ）』を実施。ワークショップやボランティア、福島を伝える活動を通して、生き方や暮らしについて学ぶ。**

ホストファミリーとの交流や農業体験

□場所：山梨県北杜市
□協力団体：4月3日の広場
□実施期間：5月・11月に実施
□参加人数：女性20名

広島平和記念式典への参加・助産師さんのお話し会

□場所：広島県広島市
□協力団体：よもぎのアトリエ
□実施期間：8月に実施
□参加人数：女性10名

活動紹介

オリジナルマスクの販売

**福島で生きるオンナノコたちが、「付けなければいけないもの」から、
「オシャレで付けたいと思えるもの」へと意識が変わることで、
「付けることが普通になる」1つの選択肢を提案します。**

「もっとオシャレで可愛いマスクがあったら…」
誰もが毎日洋服を選ぶように、ファッションアイテムの1つとして気軽に身につけられたら
そんな思いから、peach heartのオリジナルマスクづくりは始まりました
ハンドメイドで、1つ1つ心を込めて作っています
自分自身のココロとカラダを大切に出来る女性になるために
※peach heartでのイベント時、福島県内外でのイベントへの出店にてマスク販売や、手作り講座を開催しています。

<使用素材>
・抗菌ゴム
・ノーズワイヤー
・不織布　フィルターとして中に挟みこみ、花粉やウィルスの除去効果が高まります。
・ダブルガーゼ　綿100% 日本製※エコテックス認証
※エコテックス認証（国際規格エコテックス100）
世界共有の安全基準の1つです。
有害な化学物質が製品より検出されないことなどの厳しい基準をクリアした製品にのみ、エコテックス100の認定が与えられます。この商品はエコテックス１００の中でも、もっとも厳しいクラスⅠ（赤ちゃんのだ液によっても製品より有害物質が検出されないなどの試験項目）を認定済みです。

<イベント販売実績>
アースデイ東京2012　アースデイ福島
福島リアル　ぐるっとコミュニティ
Link with ふくしま　未来創造アイデイア会議
UPPER LIFE PARTY

活動紹介

peach heartの「輪」を日本中・世界中へ！

それぞれの想いや価値観を認め合い、支え合い、共に未来を考えるコミュニティの「輪」。
福島の女子だけの問題ではなく、未来のお母さんたち、みんなの問題としてともに考え、対話し、
福島の現状を発信します。

男女共同参画委員会のヒアリング会

衆議院議員の平智之さんの計らいで、議員会館の『原発事故調査委員会』及び『福島復興における男女共同参画』ヒアリング会に参加して参りました。

福島大学の丹波先生、桜の聖母短期大学の二瓶先生、少子化ジャーナリストの白河桃子さんらと共に、内閣府、復興庁、厚生労働省の官僚の方々にお話を聞いて頂きました。

その活動の様子は、週刊「女性自身」に掲載頂きました。

□活動日：2012年3月19日

出産・子育てについて学ぶ

福島に生きる女性の不安の一つである、出産や子育てに向き合い、正しい知識を身に着けるための講座や、勉強会を実施しました。

「Love＆Lifeプラン女子会」
□開催場所：9月
□開催日：9月29日

今後の活動

今後の活動

■1年間の活動から、若い女性たちのプラットフォームづくりが出来つつある。
⇒それぞれの「自分らしい選択・生き方へ」
例）福島の素材を生かしたモノづくり事業
福島アイドルの育成によるPR会社の設立
＞現地視察ツアー、商品プロデュースなどから福島を発信
移住先にて福島の情報発信パーソナリティ

福島と生きる中での「意識変革」がおこるような場づくりを目指す
⇒「自らが考え、行動できる」「それぞれの選択を認め合い、支え合える」
女性たちのコミュニティへ

■次世代の担い手との対話の場づくり
・同世代の男性たちとのコミュニケーション機会
・中高校生とのコミュニケーション機会

連絡先

住所：福島県郡山市富久山町久保田字下河原191-1
コミュニティ BOXぴーなっつ内
任意団体peach heart

設立：2011年11月30日

共同代表：鎌田　千瑛美　／　宍戸　慈

参加者：総数60名

H　P：http://peach-heart.jimdo.com/
問い合せ先：peachheartgirls@gmail.com
ブ　ロ　グ　：　http://ameblo.jp/peachheartgirls

ご｜あ｜い｜さ｜つ

かーちゃんの笑顔が元気の源

かーちゃんの力・プロジェクト協議会 会長

渡邊 とみ子

原発災害で全てを失ったかーちゃんたちが立ち上がりました。悔しくて沢山泣いたけれど、かーちゃんの味と技を埋もれさせたくない気持ちと、あきらめたくないという強い思い！

人間としての生きがいづくりのために頑張るかーちゃんの姿は地域も元気にします。

かーちゃんの力・プロジェクトからのお願い

サポーター会員（年会費1万円）を募集しております。

プロジェクトでは、活動を支援してくださるサポーター会員（年会費1万円）を募集しております。年1万円の会費で、夏と冬の2回、かーちゃんたちが作った故郷の味をお届けします。（1回につき3千円相当の商品。送料込）また、会費のうち4千円分は、新商品の開発や研修など、かーちゃんたちの自立に向けた活動費用として大切に使わせていただきます。

会員になっていただける方は、下記の手順でお申し込みください。また、随時、寄附金や原材料の提供も受け付けております。

お申し込みの方法

手順1 ①サポーター会員、寄附、どちらかを必ず明記の上、②お名前（ふりがなも忘れずに）③ご住所、④電話番号を記入した申し込み用紙（添付の別紙）をFAXか郵送でお送り下さい。
申込用紙はHPからもダウンロードできますが、所定の用紙以外でも結構です。
上記4点をご記入のうえ、お送りください。E-mail、お電話でのお申し込みも受け付けております。

手順2 申し込み後、下記・指定口座にお振込みください。
●東邦銀行蓬莱支店（とうほうぎんこうほうらいしてん） 普通預金 518856
●名義：かーちゃんの力．プロジェクト協議会
（カーチャンノチカラプロジェクトキョウギカイ）

手順3 お申し込みとご入金を確認次第、協議会より領収書と会員証をお送りします

かーちゃんの力・プロジェクト
ロゴマーク
［制作／domino DESIGN WORKS］

元気いっぱいのかーちゃんが、大声で笑っている口のなかに文字を配置しました。安心感・力強さ・包容力を感じさせ、プロジェクトの目的である「つなげる」「発信」を楽しく・力強く・笑いながら、進めていこうというイメージです。

お問合せ先
コミュニティ茶ロン「あぶくま茶屋」
住所：〒960-1246 福島市松川町金沢字船場3-27
電話：024-567-7273
HP：http://www.ka-tyan.com
E-mail: ka-tyan.chikara@siren.ocn.ne.jp

福島の「福幸」のために

東日本大震災と原発事故で生まれ育った故郷を後にしました。
農地も加工所も失いました。仲間もちりぢりになりました。
でも、もう負けてはいられない。
あぶくま地域の復興のため、
「かーちゃん」たちが立ち上がりました。

このパンフレットは
平成24年度「福島県地域復興再生・創出モデル事業」の助成を受けて作成されました。

故郷はいま

あぶくま地域は、福島県の東部、阿武隈山系と八溝山系からなる26市町村にまたがる広大な地域です。ほとんどが標高200～700mの丘陵地で、森林と高原がなだらかな里山を形づくっています。夏は涼しく冬の降雪量も少なく、首都圏に近いことから、キャンプやレクリエーションに訪れたり、田舎暮らしをする人が数多くいます。

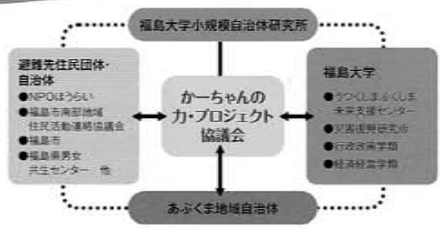
しかし、原発災害により、川俣町山木屋、浪江町津島、飯舘村、葛尾村、田村市都路町、川内村などで居住が制限され、住民は県内外に避難しています。2012年4月以降、制限区域の見直しが行われていますが、故郷への本格的な帰還が実現するためには、除染やインフラの復旧など多くの課題が残っています。

※赤文字はかーちゃんたちの出身地

かーちゃんのプロジェクトとは

原発事故で避難を余儀なくされた町や村には、「かーちゃんたち（女性農業者）」が地域の特産品や加工食品を作り販売する場がありました。お店や農家民宿で手料理をもてなす「かーちゃん」もいました。「かーちゃん」たちは、地元の新鮮な食材にこだわり、健康・体に良いものをまごころ込めて作ってきました。そこは、厳しい自然環境のなかで生きていくための仕事の場であり地域を元気にする大切な場でもありました。しかし、避難生活では、「かーちゃん」たちがもっていた知恵や技術を活かす場がありません。

そこで、かーちゃんたちは福島大学小規模自治体研究所とともに、「かーちゃんの力・プロジェクト協議会」を立ち上げ、かーちゃんたちの力・知恵を活かす場をつくりました。現在は、NPOほうらいなど諸団体と協力しながら、故郷の味、おふくろの味であぶくま地域を元気にするプロジェクトを推進中です。



プロジェクトがめざすもの

【5つのコンセプト】

1 あぶくま地域の復興
「かーちゃん」たちが元気になって、被災者を元気づけることによって地域全体の復興をめざします。

2 かーちゃんのネットワークづくり
県内外にばらばらになった「かーちゃん」たちが力と知恵を結集します。

3 新しい生産・流通・販売システムの形成
県内外の生産者・消費者と結びつきながら、雇用の場を生み出します。

4 健康、安全・安心
放射性物質を独自基準で測定して結果を表示します。また、農薬・化学肥料、添加物の使用も控えます。

5 新しいコミュニティづくり
民間借り上げ住宅の被災者、仮設住宅の被災者、避難先の地元住民など、すべての住民が集える場を創ります。

プロジェクトの活動

森の恵み、豊かな大地、澄んだ水……
自然と共にあった暮らしを突然奪われ辛く苦しい日々だけど、仲間とつながればなんとかなる！
かーちゃんたち（女性農業者）は、手を取り立ち上がりました。あぶくま地域の味、かーちゃんの味をみんなに食べてもらって福島を元気にしたい。
故郷の仲間たち、そして、とーちゃん、じーちゃん、ばーちゃん、こどもたち・・・みんなの笑顔のために今日も元気に腕をふるいます。

農産加工品の加工・販売

避難前まで作っていた味を大切に、こころを込めて加工をしています。

かーちゃんの笑顔弁当づくり

みんなの笑顔を目指して、栄養バランスの整ったお弁当の販売をしています。

あぶくま地域の食文化伝承

季節ごとにイベントを開催。イベントを通じてふるさとの食文化伝承を目指しています。

田植えの後と、柏餅をふるまっていた「さなぶり」を開催。柏餅づくりを体験していただきました。

独自の安全基準とロゴマークシール

「かーちゃんの力・プロジェクト協議会」では、世界のなかでも厳しいといわれているウクライナ基準（野菜1キロあたり40ベクレル未満）よりもさらに厳しい基準を設け、1キロあたり20ベクレル未満の食品のみにロゴ入りシールを貼り販売しております。

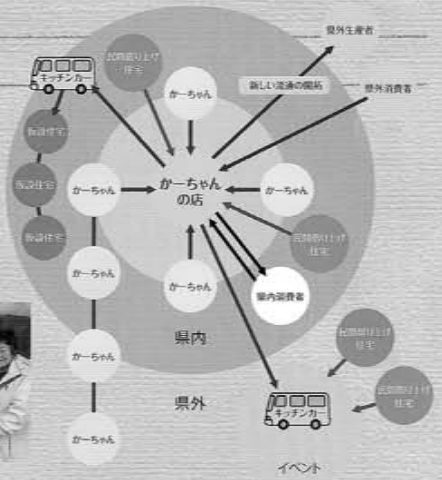
食品・放射性物質の規制値	
	■「かーちゃんの力・プロジェクト」すべて…20ベクレル
	■日本（新基準）……飲食品100ベクレル
	■ウクライナ……野菜40ベクレル

放射性物質検査体制

市民放射能測定所と福島大学うつくしまふくしま未来支援センターの助言・指導をいただきながら、「あぶくま茶屋放射線測定所」に設置された「NaIシンチレーター（応用光研工業FNF-401：検出限界値は1000秒で10ベクレル）」を使って放射性物質の簡易測定。2割程度の誤差を勘案して、簡易測定で16ベクレルを超えた場合は、民間検査機関または福島大学のゲルマニウム半導体検出器を使い、クロスチェックをします。なお、検査後に別の産地や圃場の材料を使用した場合は、必ず放射性物質検査を実施するなど、厳重な検査体制のなかで商品を生産しています。

プロジェクトのこれから

「かーちゃんの力・プロジェクト」では、「かーちゃん」たちの力・知恵・技術を活かす場＝「かーちゃんの店」をオープン。そこを拠点にキッチンカーなどを使って各地のイベントに出店したり、仮設住宅へ「かーちゃんの笑顔弁当」を届けたりして、「かーちゃんの力」で地域を元気にしていきます。



「かーちゃんの力」を歴史に残したい！

2012/12/4

1 自己紹介　　渡邊　とみ子

2 飯舘村での暮らしが今の私の原点

地域づくりに関わり、飯舘村で暮らす事を考える

合併協議会、普通の主婦が住民代表の委員として参加
合併反対で村を残したい一心で自立をめざす。　　合併の基準は結婚と同じ
合併賛成側の方からの激しいバッシング

3 イータテベイクじゃがいも研究会の設立　　平成17年6月　会長となる

4 原発避難で畑も加工場も生きがいも全て奪われてしまった
あきらめないで種繋ぎに奮闘する

5 かーちゃんの力・プロジェクト開始

一人一人訪ね歩いて感じた事

何にもない！と嘆くのではなく、技がある！物語がある！
（とは言え、本当に何もなかった）
までい工房美彩恋人の厨房用品を持ってきた
新潟県からの物資の応援でできた結もち・プロジェクト

結もち・プロジェクトをきっかけに歩きだしたかーちゃん達

自分達で決めた安心安全基準
放射能検査⇒商品を1kg検体に出すという事は・・・

かーちゃん達の仕事つくり

3年後の自立に向けて

6 失ってみて気づく事
闇があるから光を必要なように
道に迷って初めて道を知るように
苦しんで初めて喜びがわかるのです

7 希望　　飯舘村での再活動はできなくとも・・・・

暗闇のなかから僅かの光を探してきました。
つらくて、悔しくて、たくさん泣きました。
でも、あきらめないで小さな一歩を踏み出しました。
そうしたらね。いつの間にか大きな和が生まれたの。
だから、頑張っていくことにしたの。

私には時間も体力もそう多くは残っていません。日が経つにつれ飯舘村での暮らしや夢を持って生きてきた事を思い出し涙ぐんでしまいます。
でも、かーちゃん達の技だけではなく、かーちゃんの歴史を残したいという新たな夢を持っています。

種芋生産の第1期検査、ばれいしょ植物防疫補助員の仕事

夫の理解が一番の原動力

ｲｰﾀﾃﾍﾞｲｸの花

収穫の喜び・育成者と

育成者のご両親の姿に25年後の
自分達もこうありたいと

避難から4ヶ月程たった我が家の畑や工房前の入り口には
背丈より伸びた草がおい茂っていた。たった4ヶ月で・・・・・

この頃の空間線量は、4～5usv/hだった。帰るたびに変わり
行く姿に涙を流さずにはいられなかった。今我が家は居住制限区域となり
4年間は帰れない。我が家の除染は来年から始まる。
夫との夢であった古民家を移築は諦めなければならない。

もう少しでできあがるはずだった納豆工房の裏側の線量は8.43us/h
だった。

イベントにも協力してくれる夫

避難先で開催した収穫感謝祭・飯舘村の仲間
が集まってくれた

平成24年度いいたて雪っ娘生産物語

避難先で種まき準備　74aの畑

芽が出たよ

収穫

夫・育成者・私

遠野でも雪っ娘が栽培された

研究会の仲間も山形の避難先で栽培

収穫したかぼちゃを磨いた

箱詰出荷の準備

愛知県に出荷

安達地方アグリビジネス・ネットワークあだち新商品開発プロジェクトでいいたて雪っ娘を使った商品開発

加工場を失い委託生産でマドレーヌを作った

放射線検査の検体で1キロがこんな風に

あきらめないことにしたの

沢山悔しい思いをしたよね

沢山、沢山泣いたよ

でも、生きてる

やっぱり止まっては駄目だよ

どんなに小さな一歩でも前へ進んだら

ほらね。実ってくれたんだもの

植物は、こんな状況の中でも

頑張って生きているんだの

だから私は

あきらめないことにしたの

かーちゃんのカプロジェクト活動報告：かーちゃん新聞　年末号

■代表者経歴

1954年福島市生まれ。

1993年　飯舘村「第4次総合振興計画」地区別計画策定委員に就任し、地域での女性リーダー育成に取り組む。

2005年　イータテベイクじゃがいも研究会会長として、飯舘村オリジナル品種「いいたて雪っ娘」(かぼちゃ)と「イータテベイク」(じゃがいも)の生産・販売に取り組む。

2007年　「までい工房　美彩恋人」を立ち上げ、「いいたて雪っ娘」と「イータテベイク」の商品開発・加工・販売に力を入れる。

2011年以降、東日本大震災・原発災害により避難生活を強いられるも、諦めない心とたくさんの応援により、かーちゃんの力・プロジェクト協議会代表として活躍中。

かーちゃんの力・プロジェクト協議会
代表
渡邊とみ子

代表から

思えば一年前、かーちゃん達を訪ねて行った時は先の見えない中、苦しんでもがいていました。
今年の4月からの雇用が始まり、あぶくま茶屋にはたくさんのかーちゃん達の笑い声が響いています。
一人ではなんにもできないけど、みんなと一緒にやれば前に進めると言ったかーちゃん達の思いは今、多くの皆様からの支えによって一歩、一歩前に進めています。ありがとうございます。感謝します。

【かーちゃん弁当】販売、本格化！

「かーちゃん」たちのお弁当製造・販売が本格的に始まりました。栄養士の方が塩分、カロリーの計算をした健康弁当の販売やおもわずにっこりしてしまう「笑顔弁当」を目指して日々、かーちゃんたちは奮闘してきました。おかげさまで少しずつですが販売数も伸び始め毎日早朝からのお弁当作り頑張っています。また、お弁当の材料には、かーちゃん農場で収穫した野菜も使用しています。故郷の土とは違うけれど、様々な方々の温かい協力により、こうして避難先でも野菜が作れることに感謝、感謝です。

かーちゃん笑顔弁当

健康弁当

毎日、笑顔で頑張っています

かーちゃん農場の野菜

加工品づくりにも励んでいます

日々、季節の素材を生かした商品開発にも取り組んでおります。今年の夏は、かーちゃん農場のミニトマトを使ってトマトキムチを作りました。トマトの酸味がキムチにぴったりと、高橋トク子さんが開発しました。ほかにも続々とふるさとで作っていた漬物やお菓子が店に登場しています。かーちゃんたちは、野菜の保存技術にとっても詳しく、昔から地域に伝わる知恵をフル活用しています。現在は餅づくりがはじまり、葛尾村のかーちゃんたちが朝から大忙しです。

トマトキムチ。トマトの酸味がキムチに合います

お餅づくりもはじまりました

きゅうりのおから漬け作業中

かーちゃんのカプロジェクト協議会　連絡先　：　024－567－7273

イベント報告

おかげさまで、今年はかーちゃんたちは県内外各地のイベントにお呼ばれする機会が大変多くなりました。

かーちゃんたちの取り組みに対して、みなさまが温かい声をかけてくれたこと、大変嬉しく思っています。

福島市金谷川地区の盆踊り

そうま花火大会

協議会主催イベントも開催しました！

6月　さなぶりイベント開催

田植えが終わると村では柏餅づくりをしていました。故郷の味と技を伝えようと「かしわ餅」づくりを体験するイベントを開催しました。子供から大人までたくさんの方が訪れ「かーちゃん」たちとの交流を楽しみました。

・収穫の秋！収穫感謝祭を開催！

10月20日(土)

日頃の感謝の気持ちをこめて
みなさんにとん汁と搗きたて餅をふるまいました。
会場では、かーちゃんたちの加工品だけでなく
地元農産物なども販売しました。
秋空の下、２００人近くの方々が訪れ、
かーちゃんたちとの交流を深めました

イベント告知　結もちプロジェクト第２弾開催！

12月15日　11:00～あぶくま茶屋にて
12月16日　11:00～　三春町斉藤里内仮設住宅にて

昨年、かーちゃんたちが力を合わせ立ち上がるきっかけとなった結もちプロジェクト。今年も元気にお餅を作り販売します。搗きたて餅の振る舞いもあります！
ぜひお越しください。かーちゃん一同お待ちしております。

かーちゃんたちのいまとこれから

目指すは・・・

・「かーちゃん笑顔弁当」「かーちゃんの加工品」ふるさとの味をもっと多くの人たちに届けたい！

たくさんの人たちの支えのおかげで、かーちゃんたちのお弁当を販売できるようになりました。配達用の「かーちゃんCar」も用意することができました。「みんなの知恵と工夫と愛情の詰まったお弁当、かーちゃんのふるさとの味・漬物などをもっとたくさんの人たちに届けたい！」応援よろしくお願いいたします。

連絡先

●連絡先：かーちゃんの力・プロジェクト
住所：〒960－1246
福島市松川町金沢字船場3－27　コミュニティ茶ロン「あぶくま茶屋」
電話：024－567－7273　e-mail：ka-tyan.chikara@siren.ocn.ne.jp

facebookページを作成しました。

かーちゃんの力・プロジェクト協議会 Facebook

活動ブログ更新中！

http://ka-tyan.at.webry.info/

発行：かーちゃんの力・プロジェクト協議会　広報部　2012年12月

●ウィメンズスペースふくしま　活動紹介

震災直後に

昨年夏から設立に向け話し合いを続けていた「女性支援ネットワーク・こおりやま」準備会で4月12日に富岡町・川内村合同災害対策本部（「ビッグパレットふくしま」）、郡山市災害対策本部へ要望書を提出。女性専用居住スペースの確保と相談コーナーの設置について。16日～「ホッとカフェ」を毎週土曜日午後に開催。

「女性専用スペース」

大避難所「ビッグパレットふくしま」に県が設置し県男女共生センターが運営。当会は郡山市内の他2女性団体とともにスタッフとして在室し、お茶や手仕事をまじえながら避難女性たちと交流した。

仮設住宅「ホッとカフェ」「女性のための電話相談」

「ビッグパレット」避難所閉所を受け、東日本大震災女性センターネットワーク募金事業に応募、助成金を受けて開始。緑ヶ丘仮設集会所での「ホッとカフェ」は毎回女性15～20名、男性4～5名が参加。10月末に地区のボランティア連絡会へ引き継ぐ。さらに郡山市等行政の協力を得て9月に開設した「女性のための電話相談」は週1回にもかかわらず平均4件余の利用が。相談スタッフも厳しい研修を積んで臨んだ。

内閣府「女性のための電話相談・ふくしま」「ママ友さろん」

2012年2月から内閣府「東日本大震災被災地における女性の悩み・暴力相談事業」に参加。全国からの利用に対応する。避難先での孤立や生活の急変による心身の不調など、震災による数々の困難と、そのしわ寄せを受ける女性たちの悩みが語られている。全国規模の女性相談専門団体からの応援派遣があり、各地の女性相談員とフクシマの現状を共有する貴重な機会ともなっている。また被災下で特にストレスの高い子育て中の女性を対象に、託児付の茶話会「ママ友さろん」を月1回開催している。「自分の時間が持てた」「安心して本音を話し合える」と好評。団体事務所を開設。

DV被害女性たちの回復と自立の支援のために

映画「火々」上映実行委員会を機に「DVなどの暴力被害を受けた女性たちの回復と自立を支援」することを目的に任意団体として「女性の自立を応援する会」設立。会員は50数名。

地元女性団体として被災者支援活動をスタート

自分たちも被災。でも気持ちがワサワサする…。「何かしなくては、何かしよう」と考えていた人が集まって、後方支援ならできるのではと行動を起こしました。

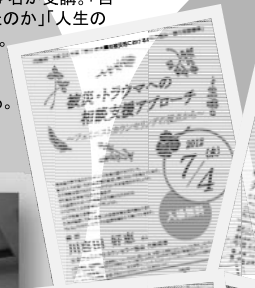
団体設立　2007年7月　　**東日本大震災**　2011年3月　　**NPO法人「ウィメンズスペースふくしま」として**　2012年11月

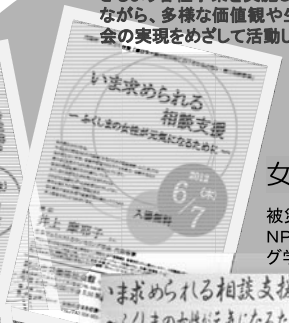
ＤＶ防止啓発、被害者支援

会員の女性たちがそれぞれの得意分野を生かし、DV被害等から生活再建を図る女性たちを支援。また地域へのDV防止啓発、支援者養成講座などを開催した。郡山市男女共同参画センター「女性のための相談日」の面接相談を担当。地域に根ざした女性支援民間団体として活動を続けてきた。

「女性のための相談セミナー」「女性のための電話相談員養成講座」

2012年2～7月、電話相談の中から見えてきた女性たちのニーズを基に各テーマで専門講師からジェンダー理論を学ぶ公開講座を実施。県内各地からのべ254名が受講。「自分がもやもやと考えていたことはこれだったのか」「人生の新しい扉が開いた」等の感想が寄せられた。同時に相談員養成講座も開催。20名定員一杯の受講があり、厳しい審査を経た修了生はスタッフとして事業運営に加わっている。





より確かな地域の女性支援資源として

組織としての社会的信頼を得て、一層確かな女性支援活動を行うことができるようにNPO法人格を取得しました。女性がさまざまな性別格差や暴力に苛まれずに安心して暮らすことができ、個性や能力を発揮していきいきと社会参画していくことができるよう各種事業を実施します。公的機関や民間団体と連携しながら、多様な価値観や生き方が認められる男女が対等な社会の実現をめざして活動していきます。

女性支援に関わる講演会

被災支援を通じて協力関係が深まったNPO法人日本フェミニストカウンセリング学会の協力を得て、女性相談支援について専門的な講演会を実施した。官民を超えて、意識の高い地域の支援者や市民の参加があった。

鎌田千瑛美さん　：　peach heart（ピーチハート）代表

私は今 20 代ですが、結婚をして、出産をして、子育てをしたいと思う気持ちと、今の福島がどういう状況なのかとを考えた時、やはりどうしても放射能という問題が避けて通れない状況だと思っています。今回の原発事故がおこったことで、福島のために戻りたいと思う一方で、将来安心して子どもを産み育てることができる福島なのかという葛藤を抱えていました。戻りたいと思いながら、そういった葛藤を抱え、私は戻りたくて戻るけれど、自分の子どもや孫に何かあったらどうしようとか、そういった不安を抱えている時に、たまたま昨年、ふくしま会議という福島大学で行われたイベントがありました。そこの若もの会議という場で、若い世代の女性たちと話す機会があり、率直な疑問をぶつけました。

「ほんとのところ、放射能の事をどう思っていますか？」と尋ねたところ、震災後半年くらいのタイミングだったと思うのですが、「放射能ぜんぜん怖くないです」という若い女性もいれば、「いまだに外に洗濯物を干せません」とか、色々な立場・考えの方がいて、全くもって価値観が違うんだなということに改めて気づかされました。半面、そういった事を普段の生活の中で話す機会がないという事にも気づきました。これまで友人同士仲良くやってきたのが、放射能というキーワードひとつで分断されてしまう。そうした福島の現状というものを何とかしなければと思った時に、「怖い、怖くない」、「気にする、気にしない」とか、そういったものも含めて、みんなで考えて行動できるよう「本音で繋がる場」というのがすごく必要だなという事を感じました。

お手元にお配りしている資料で、活動の紹介をさせていただいていますが、私たちの活動は、「福島でこれから子どもを産み育てる」という事をキーワードにしています。主に 20 代の女性たちを中心に、未来の母親という事で、若い女性たちが繋がる場づくりというのを企画して活動しています。今回、福島では、妊婦さんやお子さん方に関しては温かい支援の手が差し伸べられました。半面、明日もしかしたら妊娠するかもしれないという世代や、後に続いていく中学生や高校生が、「私は福島の人たちと結婚はしない」とか、「差別を受けるから」とか、そういった事を平気で言えてしまう現状というものをどうにかしないと、という思いで活動しています。そういった主旨や目的で活動している団体なので、まずは「福島を思う心を忘れない」という約束事があるのと、「自分の心と体を大切にしましょう」とか、「本音で言える場づくりをみんなで認め合いましょう」ということを掲げながら、つながる場づくりを行っています。

定期的に「ガールズ・カフェ」という、いわゆる女子会を企画しています。ただトークで語りましょうといっても、なかなか行きづらいと思うので、女性の興味関心が高い「キレイになりたい」とか、「好きな人のために」をキーワードに、料理教室を開いたり、ヨガ教室を開いたり、そういった所でトーク・セッションを交えたイベント型の場づくりをしております。

それ以外にも、やはりリフレッシュを含めて、放射能を定期的に排出するような意識づけとして、旅行も企画しています。“レスト”保養するという事と、“トリップ”旅行するという事を造語でかけまして、「レストリップ」という名前を付けて定期的に旅行にも行っています。例えば旅行先で福島の現状を伝えるということで、夏には広島の平和記念式典に行って来ました。そこで「福島の被曝者の方々、広島の被爆者の方々」という呼ばれ方をしました。それに対して個人的にはすごい違和感を感じたんですが、状況は違えど、理解しようと寄り添ってくれる人たちや、これから私たちが向き合わなければいけないかもしれない問題を学ばせていただいたり、逆に福島の現状をお伝えして広島から出来るこ

とをともに考えていただくような機会もありました。

先日も山梨に行きまして、自然体験とか、現在の福島ではなかなか出来ない農業体験とか、そういった事を気兼ねなく経験できる機会もありました。

もう一つ活動としてやっているのが、オリジナルのマスクの販売です。これは事故当時、マスクをしなければいけないというイメージが強かったと思うのですが、マスクをすることによって逆に「放射能を気にしている」という見られ方をし、マスクをしたいけれどもしづらいとか、そういった状況がありました。そんな事をあまり気にせずマスクが出来るように、オシャレなマスクが、ファッションアイテムの 1 つとなるよう、個人個人に寄り添ったオリジナルのマスクを製作、販売しています。この売上の一部はピーチハートの活動資金としても活用させていただいています。

それ以外にも国会にお邪魔し、福島のことをお伝えする機会をいただいたり、提言活動もしています。子育てや出産ということを根本から見直す機会として、原発があろうと、事故があろうとなかろうと、私たちがこれから子どもを産み育てるというのはどういう事なのかという事を改めて問い直すようなイベントなども行っています。

今後としては、やはり女性たちが繋がるプラットホーム作りが出来つつあるのかなと思っています。1 年間やり続ける中で徐々に友達から友達へという事で広がりをみせていき、60 名くらいのコミュニティになっています。その中で共通する事は福島で生きる生きないも、ここで何をする何をしないも、それぞれの人たちが自分らしい選択肢・生き方というものを尊重しましょうという事で、そういった場を作り続けています。その中で繋がった事により一歩踏み出して行きつつある人たちが何人か生まれていて、例えば福島を若い女性たちから盛り上げるために PR 会社を作ったメンバーや、、福島らしい素材を生かしたモノづくりをやりたいというメンバーなど、若い女性らしいセンスと感性を持ってアピールしていくような活動を始めた人たちもいます。

あとは、大学生も結構多く参画しているのですが、就職にともなって「福島を出て行こうか出て行かないか？」という選択があり、「やはり私は福島を大事にしたいから残る」という選択をした子もいれば、「福島を出て県外から福島を伝えていくのだ」という事で県外に就職した子もいます。それぞれを認め合いながら、繋がりつづけるという事が私たちの中では大切だなと思っていて、そういったつながりからそれぞれの意識が変わっていくという事を仕掛けていけたらと思っています。ますます大変な状況を迎えていく中で、これからは、自分たちで考え行動できる人たちを増やしていくこと、そして、それぞれの選択肢を認めあって支え合えるようなコミュニティづくりをめざしていきたいと思っています。

あとは、女性だけではなく男性ともやはり色々と考えなければいけないことも沢山あり、男女の考え方の違いをどうやって埋めていくのか、男性でも今後私たちのサポートがもちろん必要でしょうし、次につながる中高生だったり小学生だったりとかとコミュニケーションの機会を増やしながら、ともに考えていけたらなと思っています。

今後もちろん辛く悲しいこともあるのでしょうが、希望が見出せるような未来の福島を作っていくかという所では、もっともっと出来ることがあるのではないかなと思い、この活動をさらにというよりは、繋がる機会というものを増やしながら、ともに一緒に考えて行くという姿勢を忘れずにこれからも歩んでいけたらと思っています。

テーマが最初「女性の自立」という事でお話がありましたが、まさに先ほどおっしゃっていただいていた様な、それぞれがやはり立ち上がるという事はとても大変なことであり、孤独と向き合うという事を感じ続けた 1 年でした。ただ、やはりやり続ける事で見えてくる、本当に小さい一筋の希望というものが私たちの中にもあり、ただそれも日々迷いながら進んでいく中で難しい事もたくさんあります。ただこれから生み育てる私たちが、ここで産みたいと思える福島に出来るように、微力ながらですが、皆さんのお力とお知恵をいただきながら頑張っていけたらなと思っているところです。

渡邊とみ子さん　：　かーちゃんの力・プロジェクト協議会代表

みなさんこんにちは。
飯舘村から福島の方に避難しております渡邊とみ子と申します。今日は飯舘村から若いお母さん、うちの息子と同級生なのですが、見えていてすごく嬉しかったです。こんなところで会えると思わなかったしね。

私は飯舘村から昨年の 5 月中旬に、福島市の西部に避難して生活しているのですが、私の今の原点は、全て飯舘村の暮らしにあります。離れた人たちが福島という名前を出すのを躊躇するとか、そういうことがありますが私は堂々と飯舘の名前を出していきたい、出していきますという事で常日頃言っています。何故ならば、飯舘は市町村合併の時に自立を選びました。私も合併はしたくない、何故ならせっかく飯舘村が 10 年間かけて自分たちの手でどういう村にしたいか、10 年後をめざすために今何があるか、自分たちが出来ること、地域が出来ること、行政が出来ることという事で話し合いました。私が地域づくりに 1 番関わったのが「第 4 次総合振興計画」という 10 年間の計画の中です。1 千万円を 10 年間かけて、自分たちで決めて自分たちの暮らしを考えましょうというものです。飯舘村は、女性がそういった所に出て行くというのがすごく活発な地域なので、色々な委員会に必ず女性がいます。とはいえ、なかなか女性が出て行くというのは大変な面もあり、私は福島市の塚町という所から嫁いで行ったのですが、地域が違う、風土も違う、そういった中、飯舘村で暮らすという事は当初ものすごい、それこそ偏見があって大変でした。そういった中で、地域づくり、市町村合併、色々なものを考えていくうちに飯舘村のそこに暮らすことにすごく自信を持って本当に暮らしてきました。

そして、「イータテベイク」「いいたて雪っ娘」という村オリジナルの品種、育成者菅野元一さんと出会う事もありまして、研究会が立ち上がり初代会長になり、以来ずっと会長をやっています。実は 22 年度で 6 年間やった会長を辞めようという事で皆さんの前で宣言していたのです。ところが昨年、事故でみなさん分散したという事で、私に辞めなさいって言う人が誰もいなかったという事で、しょうがなくて今もやって 8 年目になります。

種の生産というのは本当に大変なもので、国家管理という事で以前新聞に出た時に「お前たち法律違反だ」という事で国の植物防疫官がやって来て、色々と調査をされました。せっかく村オリジナルのものを、自立した村のためにと提供してくださったものが無くなってしまうかもしれない、イータテベイクそのもの、研究会そのものが無くなってしまうかもしれないというところで、黙って話を聞いていたのですが、育成者が家庭菜園なり趣味の段階で栽培してやっている部分にはかわりない、では研究会の人が育成者から、それのお手伝いをしているということで委託栽培ということで契約・誓約書を書いてやるというグレーゾンをちょっと考えて何とか残しました。
平成 22 年、ようやく国から種の生産の許可が下りて、私は馬鈴薯植物防疫補助員という

ことで、これでも臨時の国家公務員なのです。1 日 2,600 円かな？そんなことで年間 9 日程度のお給料を頂きながら、種の生産をやっています。これはやった人でないと分からないくらい大変厳しいもので、ジャガイモ 1 本の茎に 50 匹のアブラ虫がいたらアウトなのです。だから、それがいないように日々この写真の中にあると思うのですが、1 期までのケースはまだまだそのくらいなので大丈夫なのですが、2 期 3 期となっていくうちに背丈がものすごく伸びて、そこにちょうど梅雨時、雨が降って次の日晴れっていうとアブラムシが一気に増えて…。避難先で土地を借りるのも大変なのです。「種を作りますから、そこにジャガイモを周りに植えないで下さい。ナスを植えないで下さい。バラ科の物を植えないで下さい」とは言えません。「すみません、こういうことでお借りして種を作りますのでどうぞよろしくお願いします」ということでお願いして、「いいたて雪っ娘」もそうです。裏のページにあると思いますが田んぼを借りました、避難してすぐに種をつなぐために田んぼを借りました。本当は畑を借りたかったのですが無くて、20 数枚あった田んぼを 1 枚にして、トラクター40 馬力のトラクターが来たのですが動かなくなっちゃって、60 馬力のトラクターで土手を崩して 1 枚にして、今年もそのマルチのところに種を蒔きました。芽が出た時、その映像で分かるように、土地はとてもゴロゴロの状態、昨年はその倍くらいありました。「こんなところに蒔いてどうやって芽が出んだい？」そういう状況でした。でも芽が出てくれた時は本当に涙がでるほど嬉しかったです。こんな厳しい状況の中でもちゃんと植物は芽を出して、そして実ってくれるのだなって、そんな思いで本当に涙が出ました。

放射能で避難して「この人こんな人だった？」という事やら、色々な事、色々と先が見えない中での葛藤、色々なものがあり、ただひたすら「イータテベイク」と「いいたて雪っ娘」の手入れをしながら生まれた詩が「あきらめないことにしたの」という私の詩なんです。いつも私は色々なところで読ませていただいて、これ読むたびに涙が出てしまうのですけれども、もう本当どうでもいいや、もう勝手にどうぞという感じで育成者にも何度言ったか分かりません。本当に「もう無理。もう勝手にやってください」という感じで言ったことも何度も何度もあります。でも、そういった中でカボチャを手入れしていて、書いた詩です。

「あきらめないことにしたの」

沢山悔しい思いをしたよね
沢山、沢山泣いたよ
でも、生きてる
やっぱり止まっては駄目だよ
どんなに小さな一歩でも前へ進んだら
ほらね。実ってくれたんだもの
植物は、こんな状況の中でも
頑張って生きているんだもの
だから私は
あきらめないことにしたの

この「だから私はあきらめないことにしたの」この文字を書くのに私は少し戸惑いました。それは何故なら私の覚悟だからです。どんなにいろんな状況でも頑張って種を次の世代に繋ぐために実ってくれている「いいたて雪っ娘」を見た時に、やはり諦めちゃいけないなということで、この詩を書きました。今でも色々な葛藤があり、不安になり、「もう辞めようか」と思う事はたくさんあります。でもこの詩をたまたま皆さんの前で読む機会

がたくさんできたので、これを読むたびに自分を奮い立たせてそして「頑張ろう」っていう思いでまた頑張っているのです。
収穫祭が 10 月頃ありました。地域のみなさんに土地を借りたおかげで次世代に種をつなぐ事ができた感謝の気持ちを込めて、　地域のみなさんを呼んで雛段に座ってもらって。雛段は道路の上で、下が田んぼですから畑です。そして感謝の気持ちを込めて収穫祭をしました。そしたら地域の方たちも「こういうイベントはすごくいいことだ、来年もやってくれ。」ということで今年もまたやりました。「いいたて雪っ娘」で色んな料理をして食べてもらって、もちろん放射能の検査もしました。

昨年 9 月、いつもは飯舘村では 11 月頃収穫になるのですが、9 月に収穫になりました。そして 10 月にやった時に直売所に出そうと思ったら「飯舘の名前を出すのか？」と言われまして、出しますといいました。この「いいたて雪っ娘」が 3 月 15 日に品種登録になり、11 月 11 日に商標登録取れたのです。仮のナンバーが取れたのが 9 月だったのでそれを引っ下げて持って行ったのですが、ちゃんとベクレル検査もして持って行ったのですが、やはり飯舘という汚染されたという事で嫌われました。私は「出します。飯館の名前を残します」ということで頑張って履歴写真を添えながら、私の思いを添えながら、この「あきらめないことにしたの」を添えながら出しました。そして買っていただき、私を応援する方から「飯舘の名前を出すのなら、あんたの中で安心安全基準を決めな」といわれ、「20」ということを決めました。
当時本当に 500 ベクレルということだったので大変だったのですが、私の中でやはり名前を出して残すということ、責任も考えて「20」ということにしました。そういったことを引っ下げて、かあちゃんの力も同じように「20」にしたわけです。

収穫祭が終わって福島大学の先生から、「とみ子さん今どうしてるの？」と言われて「かあちゃんの力プロジェクト」の話を聞きました。リーフレットの中にありますが、同じように原発の災害で避難している浪江・津島、葛尾村・川内・都路、いろんな方たちを尋ね歩きました。1 人 1 人カボチャを持って名刺代わりに、「私はこうやった、みなさんどうしているの？」「どうしたい？」1 人 1 人聞いて、もう本当にみなさんマイナスの言葉しか出ませんでした。「何にも残っていない。もう諦めるしかない」とか。でも、「何かしたい、誰かが引っ張ってくれるなら何かしたい」ということで頑張ったのです。津波で流された方たちのお話も聞きました。でも私は「までい工房　美彩恋人」で加工室持っていて、厨房施設もある。そういうことで何にもないけど、あるものもあるのだということで、までい工房から厨房用品をあぶくま茶屋に持ってきて、第 1 回目の「結もちプロジェクト」をやったのです。ところが玄米 500 ベクレルの文字が出ていたので使えないということで、新潟県の石内地区からお米の支援を頂いたりしながら第 1 回目をやったのが、今のかあちゃんの力の原点です。それをやったおかげで、かあちゃんたち笑い声があぶくま茶屋に響いて、何かまたやりたいということで今に繋がっているのです。

4 月に県の「福島県地域雇用再生・創出モデル事業」が通りまして、12 名の雇用が始まりました。お弁当作りとか、かあちゃんたちが今まで作っていた漬物、色々なお菓子とか、私の名前で加工室の許可を取ったのです。飲食業、瓶・缶詰、お菓子、惣菜ということで取ったのですが、施設・設備もない、倉庫もない、不便な所でなかなか大変なのですが、今ようやくお弁当も 200 個こなせるような状況です。

高橋トク子さん 74 歳です。葛尾村の村長が 74 歳で、もう 1 期やるということで「あー、私もあと 4 年がんばっか」という感じで言っています。でも、飯舘で加工してやるということはなかなか出来ないということで、加工技を伝承する指導員ということで入っていただいているのですが、第 1 線で活躍しています。トク子さんの「高橋トク子のキムチ」と

いう名前は残したいということで、その人の生きてきた証を私は残したいということを思っています。

県の方の事業で人件費はいただいていますが3年経ったら自立ということで、私は自立・自律ということを言ってきたので、言う事は得意なのですがなかなか大変です。ただ私自身も「までい工房　美彩恋人」とやっていたので自分 1 人でやれば出来る自信はあるのです。ただ、みなさんを抱えてやっていくということは、それぞれの生き方が違って…。私は飯舘村で地域活動をしていて、未来もみて、そのために行動をするにはどうしたらいいか、野望が高いほどすごい壁もあって大変なのですが、そういって生かされて、飯舘村で生かされてきた事が、今現在になっています。

最後の夢ですが、私には時間も体力もそう残っていません。もうこれから戻ってやるという体力も気力もなかなかありません。ただ、今こうやってかあちゃんたちとせっかく出会えた、みなさんと出会えた。そして、孫とか来ない家のお婆さんたちの姿を見ていると、やはり故郷は追われてなくなってしまうかもしれないけれども、そこに渡邊とみ子がいた、高橋トク子がいた、誰々がいた、そういう証を私は残してあげたい。それが私の新しい夢になって進んで行きたいと思っています。

本日もお弁当をみなさんの前で、私たちの活動とともに紹介できるということで有り難く思っています。

丹羽麻子さん　：　ウィメンズスペースふくしま副代表理事

手元の資料を読みますのでこちらで失礼します。私はウィメンズスペースふくしまという団体から来ております、丹羽と申します。先ほど野依さんから私どもの団体は、支援者団体という事で、最後にお願いしますといわれました。私どもの所は相談支援、女性の相談支援という事をやっておりまして、確かに支援者団体なのですけれども、被災当事者でもあるという事で、「被災下の福島に生きる女たち」が「自分たちの問題をどういうふうにやっていくのか」ということが課題でもあり、意味がある事だなと思っています。

この 1 枚物の資料なのですが、先週こちらでの「復興支援ラウンドテーブル」というのがありまして、福島大学がですね、似た様な感じの物を作っていて配布くださったので、全くのパクリで昨日慌てて作ったものです。活動紹介という事で時系列にしております。実は、「ウィメンズスペースふくしま」と申しておりますが、もともとはその名もズバリの「女性の自立を応援する会」という「ド直球の名前やねぇ」と大阪の人に言われた名前です。

2007 年の 7 月に、映画の上映会「火火（ひび）」という田中裕子が出た映画があり、その上映会を行ったら結構お金が残った。それを元にシングルマザーの人たちや、DV 被害者の方たちが生活支援を求めているということで、本当に手弁当でそれぞれの得意分野を生かして、活動していました。例えば生活保護の所に同行したり、相談に心得のある人が面接をして「大丈夫ですか？」と声を掛けたりという支援を行っていました。また、なかなか理解のない裁判の場で、みんなで一生懸命にその人が勝てるように弁護士さんの費用を出したりという活動も行っていました。実は私は、最初からこの会に入っていたわけではなく、震災があった3月末まで三重県の男女共同参画センターで相談支援の仕事をしておりました。夫の仕事について郡山に来る事が決まっていたので、女性支援という事が震災のあと必ずクローズアップされてくると思って、繋がる所を探していたら「女性の自立を応援する会」

とバッタリ出会い、今にいたるわけです。

震災直後、この団体がすごいのは任意団体で手弁当で行っていて御本人たちも郡山の方がほとんどなのですが、「爆発をして、水はどうする？」「孫はどうする？」とウロウロウロウロしていた中でも、「何かしなくては」と思って、準備段階だった「女性支援ネットワークこおりやま」という連絡会で連絡を取り合い、避難所をあちこち回って、今求められている女性や子どもへの支援は何かという事を聞き取って、それをきちんと要望書にまとめました。4 月 12 日のことです。盛岡や仙台はもともと発信力のある女性団体があり、「そういう活動をやりました」と言うのですけれど、福島の人たちは奥ゆかしくて活動実績をアピールしないのであまり知られていませんが、郡山にある「ビッグパレットふくしま」という大規模避難所に災害対策本部があって、そこに要望書を提出しました。

避難所の中は、まだダンボールで適当に仕切ってあって、たとえば「視姦」といって着替えている所などをジーっと見られる。そういう事があるということをきちんとキャッチをして、是非、女性専用の居住スペースをくださいと要望したり、女性に対する暴力・DV とか性被害が増えるというふうに言われておりましたので、相談コーナーを設置してくださいと要望したり。「コーナーができたら私たちがお手伝いをしますから」という事で申し入れたけれど、とても行政はそこまでの余裕がありませんでした。そこで、「じゃ、やるか」という事で、4 月 16 日から「ホットカフェ」と名を打ち、「ビッグパレットふくしま」の一画で勝手に土曜日の午後にお茶出しをして、「ここに来てもいいのですよ」という事を行っていました。

その後、この大規模避難所「ビッグパレットふくしま」に、県が設置した女性専用スペースというのが出来ました。こちらにも座っていらっしゃるけれど、男女共生センターの長沢さんや森さんや皆さんがお手伝い下さって、郡山市内の 3 団体、「郡山市婦人団体協議会」それから「しんぐるまざあず・ふぉーらむ・福島」と私どもの「女性の自立を応援する会」が一緒に日替わりで当番をやりまして、避難してきていた女性たちと交流をしました。「これだけのことで何が？」と思われるかもしれないですけれど、やはりプライバシーのない中で、またいつも女性の人たちは周りの人たちの気遣いをして、世話をやいてお茶を出したりお父さんの機嫌を伺ったり、そんなところから解放されて、ここでちょっと気のおけないおしゃべりをするというのが大変に役立ったというふうに、私たちは手応えを感じていました。

しかし、避難所はいつか終わります。8 月末に「ビッグパレットふくしま」の避難所は閉所になるという事で、「じゃ、どうする？」という事になりましたが、「ビッグパレットふくしま」に入っていた方たちがたくさん移住した緑が丘仮説住宅というのが郡山にあるのですが、そこで同じようなホットカフェというのをやりました。それは、女性センターの全国ネットワークからの助成金をいただいてやりました。本当は女性対象だったのですが、「とにかく寂しいから入れて」と言って結局男女ともになりました。10 月末、地区に自治会が出来るまで、毎週土曜日にホットカフェをやりました。

この中で女性相談のニーズというのがいよいよ見えてきた。というのは何故かというと、相談がなかったからなのです。実際相談があるだろうと思っていたら無い、という事はどういうことなのか。困っていないわけがない、ですから我慢されているわけです。こういう所に出てこられる方はまだいい、出てこられないで家の中で孤立している、そういうところで暴力や困り事が起きているのです。私は女性のための相談事業というのに長年従事していましたのでノウハウもあります。「電話相談をやりたい」と最初団体の皆さんに言ったのですけれど、相談がどれだけ大変なことか、普段の活動の中で身に染みているので、

最初、二の足を踏みました。しかし「やろう！」と言ってくれた人がいて、一人やろうと言ったら 2 人目が「私が出来る事ならお手伝いをするわ」というふうに協力をしてくれる人がだんだんに増えていきました。そして郡山市の協力を得てめでたく市の男女共同参画センターの 1 室を借りて、そこに電話を 1 本ひきました。

そこで電話相談が始まりました。そしたら掛かってくる、掛かってくる。そしてその中の相談内容というのは先ほど皆さんがおっしゃっていたように本当に生活を奪われ、生きがいを奪われ、そしてその事を周りに話せない。原発災害への温度差があり、人が分断されている。そしてそういう中で女性に、色々なシワ寄せがくる。もちろん DV もあります。いつも子どもたちの衣食住に関わって「これ大丈夫かしら？」と神経をすり減らし、特に若いお母様方にストレスが高い。そういった事を踏まえて「ママ友さろん」というのをやっています。赤い羽根の中央共同募金会からお金を貰ってやっているのですが、ちょっとした手仕事、ピーチハートさんがやっていたような感じでちょっとした手仕事を呼び水にサロン会という形でやっています。今日ここに小倉さんという担当チームのヘッドもいますけれども、安心する場所だったら普段黙っている事をみんな話していくのです、もう話が止まらないです。こちらは好評に続いています。

こういった事をやっていく中で、内閣府の方でも 3 県で被災女性相談をやりますというお話がありました。すでに岩手・宮城県は行っていたのですが福島県はやっと合流しまして、2012 年 2 月から「女性のための電話相談・ふくしま」を行っております。こちらも 1 日十数件かかってくる事もある。特に県外に避難されている方々です。先ほどもありましたが、福島の出身で避難しているという事をとても周りに言いづらい。避難していると言った途端に「お金貰えるのでしょ？」「瓦礫どうするの？」と、色々な事をぶつけられる。女の人だけにかぶせられることも多い。先ほど妊娠出産の話もありましたけれども、でも本来それは、両性の問題ですよね？それが女性のみに負担がかかっていて、それを当たり前と引き受けさせられて、そしてその事を誰にも話せないという辛さ、そういったところが語られています。「あなたのせいではないよ、社会の問題だよ」といったところに立って相談を受けております。

電話相談を開設したからには、相談を受ける力量が必要です。細々と相談はやっていたけれども、担い手がいないという事で、担い手の人材育成に乗り出しました。その講座パンフレットに「私たちの生きにくさを捉えなおす」とちょっと大きく書いたのは、各テーマが見えるようにです。電話相談の中で見えてくる女性たちのニーズをもとに全 10 回の講座をやりました。これにも県内外から講師を呼んで、その人たちにノウハウやスキルや理論を教えてもらうと同時に、その方たちに福島の話をなまで聞いてもらい、彼女たちに現場に持って帰ってもらう。なので現在、福島の現実を知った方たちが「是非、話しに来てくれ」というので私も全国で話をする事もあります。そうしたことが交流の機会にもなり、また福島の人材育成や福島の問題は福島の事だけではないし、女性たちの全体の問題ですよね。そこで交流をしながらこの問題を考えるという場になっています。

「電話相談員養成講座」もやりました。有償でやったのですが、「それじゃ人が集まらないんじゃない？」と、ものすごいカンカンガクガクだったのですけれど、有償でやってよかったです。やる気のある人が来たのです。お陰様で 20 名定員の講座で、6 名の新規スタッフを採用できました。今、新スタッフとして頑張っています。私も所属しておりますが日本フェミニズムカウセリング学会という女性支援の専門団体があります。そこのベテランの人たちが相談事業の応援に来るので、その人たちに地元の支援者向けにもなるような専門的な講演会を開いてもらいました。そんな事をやっているうちに、だんだん当団体も社会的な信頼を得てくるようになりまして、行政とも今までは「手弁当のおばちゃんたち

の団体」と思われていたかもしれないけれど、協働で仕事をしていく機会が増え、そうなるからには意思決定のあり方、それから有償労働の仕事として責任を持つこと、人材育成や守秘義務などいろんなシステム構築が必要です。そういった課題を乗り越えて、めでたく 11 月 28 日に NPO 認証がおりて「NPO 法人ウィメンズスペースふくしま」という名前になりました。

どうして「女性の自立を応援する会」というド直球のすごい名前を変えたのか。それは同じ地平にあるものとして、自立を応援するもの、されるものではない。当事者でもあり支援者でもあり誰もが同じ立場にある。そこで私たちは問題を考えていこうということだからです。

という事で、今度も温泉合宿研修をしようと企画しているのですけれども。震災の前から女性のためのグループプログラムを開発して来た名古屋の女性支援団体から講師を呼んで、みっちりとそこのノウハウを聞く、そして今度は私たちが発信できるプログラムを開発しようと。そういう場を年明けの 1 月に、当事者でもあり支援者でもあるメンバーたちがそれぞれ参加費を 15,000 円払って勉強しようと言っています。そういった事が今後の課題になって、でも楽しくやって行きたいなというふうに思っております。

≪ 自 己 紹 介 シ ー ト ≫

呼んでほしい名前

最近ほっとしたこと

今日の講座で　話したいこと・聴きたいこと・考えたいこと・知りたいこと…

語ろう・つながろう
2012.12.4

	伝えたいこと
Aグループ	ふだんの食事からきちんと栄養を頂く学び・メンエキ力UP！
	放射能と共に生き行くそれはその人のそれまでの人生感かな
	だからこれからの子育てに（フクシマは特に）どう考えて生きて行くか人間育て
	「何とかやっていこう！」と1つ1つ課題をのりこえていらっしゃる姿勢に感動しました！
	除せんは本当にきくのか？
	放射能のことが本当にわかっているのか？わかっていない
	とみ子さんの詩に感動しました☆
	少しも政府・政治にとどいていない気がする
	女性が活発に議論しているのに男性は家にひきこもっているのは！！
	大学の先生方によって話がバラバラ
	聞きたいこと
	他県からどのようにおもわれているのか？
	鎌田さん”恋”はしていますか
	仮設や避難所の格差について
	福島で生きていくために第一に考えていることは？
	”発信”ってとくべつ考えてやってることありますか？
	みんなの原動力は！？
	か一ちゃんの加工品等どこへ行ったら買えますか？
	支援してくれる相手との対等性ってもてていますか？
	避難所で聞いた苦情を誰にすい上げて頂けるのか？
	外部（県外とか）からの支援で困ったことありましたか？
	活動していていちばんうれしいことって？
	活動していていちばんしんどいことって？
	子ども達への放射能教育はどうなっているのか？

Bグループ	支援者も被災者3.11以降時間の経過とともに悩みつらさの形も変化していく中、支援者の疲へいも増していく 支援者の支援が求められる
	行政との温度差（支援に対する）（今何が求められているのか）
	創り上げていく上でのエネルギーをきちんとフォローしてくれる体制が欲しい
	利益と公益の両方をめざす時の運営方法は何が良いか？知りたい
	夢・目標を持てない人がいる中での組織の運営についての悩み解決法をおしえて欲しい
	今避難している男性たちは何をしているのだろうか
	地元の食材を何か使いたい今までできた事ができないくやしさを感じる
	社会を明るく家庭を暗く家族にかなりの我慢をさせている このまま出て歩く事にどこまで線引きしたら？
	放射能気にしてることがいいにくい
	”マスク”をするということ放射能に対する考え方のちがいというふうに意識した時がなかった
	鎌田さんは放射能の健康への影響をどう考えてますか？首都圏でも相当考えに差があります
	放射線に対する考え方が違う方々をどうつながっているのか？鎌田さんへ
	鎌田さんへ・同世代の他の団体とのつながりはありますか？
	鎌田さん・男女の考え方のちがいについてもう少し教えてください
	いきなり家族が分断されたが…家族の変容
	独居高齢者の終末の行く末？方向？
	これから仮設で生活している人たちの悩みなどの調査・検証
	渡邊さんへ・女性をまとめるのは大変だったかと思いますが気をつけていること大変だったことがあれば教えて下さい
	仕事をしながら活動している人達がつながる場がほしい
	聞きたいこと
	共生センターに期待することは？（新井）
	活動をしていて変化やよくなったことはありますか？（ご自分や一緒に活動している方で）
	３人へ・今後どういうネットワークがあればいいと思いますか？システムのようなものでもいいですが
	迷ったりしたときに背中を押してくれる存在は誰・何ですか？
	ストレス解消の方法は？
	決断をする時リーダーは時として孤独感におちる。そんな時どう対処しているか？
	３人に・悩んだりつかれた時まよったりした時どうやってこえますか？誰と話をしますか？

Cグループ	自己尊重の気持ちをもっていい
	20～30代性別役割分担意識により苦しんでいる人たち気づきが大事と感じた
	自分で判断して行動すること自体難しい
	自分の責任と思うのではなく社会とのつながりの中で起こったこと
	ママ友さん・2、3月は自己紹介で涙・7、8月はあきらめの気持ちなどが混在
	先行き不安
	放射能の値言ってはいけない
	福島の人たちの考え方が伝わっていない
	生きる力が減っている（家事能力）
	チェルノブイリ（26年前）事故で「まだ間に合うのなら」の本があった。当時のことはどうか？ 我がごとのように考えていなかったのでは原発反対運動の大きなうねりとはならなかったのでは…
	生活の折りあいをつける項目として「放射能」が増えた
	女性は行動し男性は停滞
	震災は家族や夫婦のあり方を考えるきっかけ
	女性（産む性として）いのちを考えたい
	夫婦として意見が異なる（一致・不一致）を受け入れられるか
	これから子どもを産む問題男性はどう考えているのか
	女性と男性の置かれた立場の違い
	「放射能」について男女でどう考えるのか
	男性は臆病
	男性は家族を維持するために働く
	男性をどう考える場に立つか
	被曝しているのは男性も同じ（高齢者は高い？）
	裏　面
	当事者意識をもって発信していく
	国外にも発信していく（国女振）
	声をあげる場を共有したいがどうすれば
	言うことが孤立するとおそれる
	顔を合わせて話をすることで理解しあえる
	福島から離れた人たち　・郷里への思い　・移り先での生活
	東北人の我慢強さ？言いだせにくい
	遠隔地の方の声を聞く届ける

福島のいま

センター職員として...

・自分の中に柱を立てる
・ボランティアの形をつくる自立させたいな

就労支援

・働く場を作る又は増やす
・就労保障、就労はできているのか
・起業、復興活動のサポート（特に女性）

他県生活者への支援

・他県にいっている人が元気か？
・他県に移った人への情報提供
・戻りやすい環境が必要

コミュニティづくり

・新しい地域、コミュニティづくり（仮の街？）
・小規模のコミュニティをつなぐ

放射能とどう向き合うか

・食べ物の事が心配
・除染は本当にきくのか
・農家の苦悩
・福島を越えて放射能のことを共有するには

男のしゃべり場

・単身で福島に残っている男性と話す機会
・男性との対話（会話）

・コミュニケーション力 UP

世代間の対話

・若い世代との語り場（世代間）
・世代間の思いの違いを知る機会が必要

仮設生活者への心配

・仮設の中で女性や高齢者など弱者はどうしているのか（DV）
・仮設にいる独居老人が心配
・家族がバラバラになった

子育ての心配

・子育ての中で原発で差別されても自分が自分が持てるように育てる
・子どもの今後（孫）

チーム

“あきらめない”

やるぞ！！「これから」

異世代交流

・若い男性達の声をききたい
・男性を引出すには学習以外の行事も入れればいいか
・若い世代の人たちとつながりたい
・ボランティア、他の活動との交流をしたい

・批判されず話を聞いてもらえる場所が大切だと思う

社会活動

・社会活動への参加
・避難した地域の地域活動への参加

生活全般

・今までの東京一極集中ではない地方、地域の活性化
・もちろん今までの経済成長（日本の）は望めないので身の丈にあった生活あるいは政治、福祉？

発信！！

・飯舘から来ましたと言いたい
・色々な人、団体が行っている活動が、より多くの人達に知れ渡るようにするには．．．
・広報のあり方を考える
・福島のことを伝えたい
・福島の事情を政府へ届ける

子供と高齢者

・学校帰り友達の家へ遊びに行く
・子どもたちが元気に育つ環境を作りたい
・丈夫な"体"作り！
・今までの高齢社会の問題がこの震災により更にうきぼりになったこと大問題だと思います

✿いやし✿

・気晴らしの"旅"ツアーをしたい
・ゆっくり家を整理して物を処分したい
・ゆっくり休みたい
・別荘がほしい

チーム

Go way

語ろう・つながろう 2012.12.11

わたしのアクションプラン

これからわたしが達成したい目標・思い

実現に向かってのアクション
☆今日帰って

☆1 週間以内に

☆1 ケ月間

☆（　　）ケ月・半年後

☆1 年後

その他（セミナーを振り返って、いま伝えたいこと）

座談会： 福島の女性団体支援のための「センターの役割」とは

平成 25 年 1 月 30 日

丹羽　麻子　　ウィメンズスペースふくしま 副代表理事
鎌田　千瑛美　peach heart 代表
岡部　貴敏　　福島県男女共生センター事業課
長沢　涼子　　福島県男女共生センター事業課
新井　浩子　　検討委員（早稲田大学非常勤講師）
野依　智子　　独立行政法人国立女性教育会館研究国際室 研究員

【復興支援のためのセンターの役割】

野依：本日は、お忙しいところお集まりいただきありがとうございます。今回の「女と男の未来館」で実施しました講座のフォローアップということで、今日は、福島の女性団体支援のためのセンターの役割とは何かについて、意見交換したいと思います。

さっそくですが、今回、講座の事例報告で女性センターに関わられて、センターについて感じていることを話していただけますか。

鎌田：これまでは、話すためのワークショップというか、話しを引き出していくためのファシリテーションというスキルを使ってきたのですが、その課題を深掘りした上で、それをどうやったら解決できるのかというところまで踏み込むのは、結構大変な作業ですよね。課題を解決しましょうみたいな、そういう研修会とか結構あるのにもかかわらず、その先がない。例えば、人がいない、お金が足りない、仕組みが足りないとかということについても、ではどうやったらお金が集まるのとか、どうやったら人が来るようになるのか、どうやったらしくみができるのかという、そこのところのノウハウの講座というか、解決策がほしい。

昨日たまたまファンドレイジング講座に行ったんですが、寄付の銀行口座をつくるのにクレジットカードが一番メリットがあるという話しが有益でした。うまくいっているところのエッセンスをもらうだけで、自分のところでできなくても、こういうやり方だったらできるかもしれないとかというヒントになるというか、アイディアプランにつながる。

概念的なことだけ言われても、いざ具体的にどうすればいいのみたいなところに落ちてこないというか、実態にそぐわないみたいな、講座というのはすごく一方通行になってしまう。研修もそうですが、聞いて終わりとかではなくて、やはりそれが身になるようなかたちでつくっていかないといけないと思う。

丹羽：それと震災後に、手当しなければいけないことが急に増えたわけだよね。それまで

のインフラがなくて、金、人、ノウハウもなくて、だけど外から求められていることが増えて、中でも「それはそうだわ」と思っていることがあるわけだけど、それをつなぐものがないんですよ。

私は震災前まで三重県男女共同参画センター「フレンテみえ」で相談員をしていました。中央の情報がいっぱいあるところから、ぽこっとやってきた人間ですが、同時に福島に住む当事者でもあるわけです。それこそ、そのノウハウと組織運営と、それから実務のつなぎを全部やっているようなポジションにいるんですけど、それは非常に大変で、私の役割を肩代わりしてくれる人が必要なんですよ。何が必要なのと聞いてくれて、相談の電話も受けてくれて、電話相談の後進の指導もしてくれる。その間に丹羽さんは別のことができるじゃないといってくれる人がいたら、すごくありがたい。

いわば市民活動としての人育てと、ノウハウというところを、当事者のキャパをみながら手伝ってもらうというのが今一番ニーズがあると思うし、先の広がりがあるよね。

野依：今、丹羽さんがおっしゃっている支援というのは大きく２つあり、１つは、人の派遣というか、応援派遣ですよね。もう１つは、ノウハウの交換とか、具体的なノウハウを提示していくみたいな。

丹羽：そうそう。「お助け」と「育て」という感じですね（笑）。

新井：私はむしろ今、丹羽さんの話は、人材育成をするんだというふうに聞いたのですが、その市民活動としての人材を育てるプラス当事者のキャパシティをみてノウハウの育成というか、その部分に特に力を入れるんだというふうに聞いたのだけど。その市民活動としての人材育成というときにベーシックなニーズがあるのだというふうにおっしゃったでしょ。そこをもうちょっと何か教えてくれないですか。

聞いていたときに、このベーシックなニーズというのは、もしかして女性センターの役割に関係あるかなとちょっと思ったのね。その辺をもうちょっと具体的に教えてもらえたら。

丹羽：要は、（復興支援を）単に支援活動という切り口だと、男女共同参画センターでやる意味がないということですよね。

自主避難してきている女性の相談なんかもそうなんですが、こっちにきてアパート暮らしになって、祖父母同居から核家族形態になって、お父ちゃんは新しい仕事場に慣れるのに精一杯で、家のこと、子育て、それから放射能など一切が彼女の役割で、そのストレスが子どもに出てしまって…。私はこれ以上、何をしたらいいでしょうかという相談だったのです。こういう相談に対して私たちは、そんなに頑張らなくていいし自分のために何かして、それから孤立しないこと。ここにきたのは素晴らしいからという風に伝えるのです

が、でも、これって震災前に私が男女センターで DV 相談を受けているときと同じことをやっているわけです。

震災係数とでもいうものが絡んでいるけれど、取っ払ったら、ベーシックに彼女自身が不当に被せられているジェンダーロールであったり、それから自分の意思を言ってもいいという自己尊重感であったり、そういったところを支えたり、取り戻してもらうエンパワーメントのプログラムがとても役に立つのです。だからこれは女性センターはすごくノウハウがあることだし、センターのベーシックな役割なんだと思うんです。

私が今、ウィメンズスペースふくしまでやっていることって、これまで女性センターでやったことの引き出しを開けているだけなんですよ。だけどすごい役に立つ。広報ってどこにいけばいいのですかとか、チラシとか市の協賛だったらこういうふうに載せてもらえるとか。そんなベーシックなことから役に立つんですね。

新井：今、お二人が話してくれたようなことを、センタースタッフとしてどんなふうに聞かれました？　資料としてセンターの事業概要などを見せていただきましたが、それと照らし合わせるとどうですか？

長沢：まずこの事業概要はあくまでもこういう枠でやっていますというもので、必ずしもこの計画に縛られるというわけではないのです。指定管理を受けているので、５年間の計画を出すことになっているのですが、毎年、協定というのが結ばれていて更新していますし、県と話し合って事業を実施しています。

岡部：講座をやるにしても、福島県は大きく 3 つの方部に分かれているのですが、福島・郡山地区での開催が多くなりがちでした。それでも、センターからは遠方である、いわきや白河、相馬、喜多方、南会津に出向いて男女共同参画部局の方たちと連携して事業を行っています。例えば、いわき市で男女共同参画センターができた直後に、一緒に事業をしたことがきっかけで、その後も連携事業を何度か行っています。福島市、郡山市、会津若松市などとも同様なことがあります。

そこで、信頼関係ができると、男女共同参画の事業のことでわからなかったら共生センターに聞いてと申し送り事項のようなものができて、そうすると市町村で担当者の異動があり、新たな人がきても、講師派遣依頼がセンターに連絡がきたりして、私たちが市町村担当課の皆さんにとって相談できる相手になってきているのかなと思います。

震災関係だと正直言って直接センターにという感じではないですね。たまたま、かーちゃんの力・プロジェクトは、センターの近くに事務所があるので、助成事業の申請や、当センターとの連携などいろいろとお話しする機会が多いです。

震災が起こる前からも、結構かかわりがあった団体やグループの人たちが何かをやろう、どこかの助成金を応募するときに、センターに相談してくれたりします。直接役に立てる

かどうか分からないことも、いろいろと話を受けること自体が、今はこれから何かを始めようとしている人たちにとって、少しでも役に立っているのではないかと思います。突発的にいろいろ相談を受けたことがきっかけで、センター事業に組み込んで事業実施するケースもあります。

新井：事業に組み込んだ例を、教えていただきたいのですが。

岡部：女性のチャレンジを支援する事業では、かーちゃんの力・プロジェクトを始めとする、被災者支援活動を行っている団体やグループの方たちの経済的自立をサポートすることがテーマなんですが、どのようなサポートをセンターができるのかなと今も模索しています。活動している皆さんの課題が見えて、具体的に実行する段階までいかなくて、今何が皆さん必要としているのか、センターでできることは何かというのが、まだはっきりと見えていないというのが現状です。

鎌田：かーちゃんの力・プロジェクトとか、ものを作っている団体って、徐々に、できてきたと思うのですよね。そうした団体が一堂に集う場というのはこれまでなかったので、それをでやったらいいと思うんです。宮城で商品の売り方の講座とか、販路開拓に向けての講座とか、商品の見せ方の講座とかというセミナーをやった上で、ワークショップをやったらすごく好評だったらしくて。困っているところは共通しているので、それをテーマにしたり、横のつながりがこれまでなかったから、つながりをつけることを目的にしたらいいと思うんです。隣の人たちがどういう工夫をしているのかとか、ここの部分で一緒にやれそうだとか。はじめて顔が見えたのでできたということだと思うんですよね。

岡部：昨年末に、「ふくしま連携支援センター」が、当センターの研修ホールを使って、これから起業しようとしている人や起業している人たちを集めて交流会をしてくれました。われわれもそういう人たちの情報を把握しきれていないので、まず県内の状況を知り、その人たちの横のつながりをつくり、皆さんの活動が広がっていくための講習会や研修をやりつつ、最終的にはセンターで、市場みたいな感じで、皆さんがつくっている食料加工品や作品、工芸品などを、皆さんに来てもらって買ってもらうという、そういうものができたらいいなと。担当レベルですが、それを来年度やろうと考えています。

【県のセンター、市のセンターの役割】

長沢：市町村の男女共同参画課やセンターのニーズも、59 ある全市町村に対して個別に対応しているということではないですが、例えば、年に２、３回実施している会議の場で参加した市町村の担当者の人の話を聞いたりするということはやっています。その他には、

具体的には市町村の職員研修や事業にセンター職員が講師でいくこともあります。

野依：センターの役割、県のセンターと市のセンターについて話したいと思うのですが。最初に鎌田さんが、普通に生きている人たちの支援、つながりづくりが必要だとおっしゃって、そのあと丹羽さんが「お助け」と「育て」が必要だと言われた。県のセンターとか、市のセンターと分けて考えるとどうなのですか。例えば、共生センターではどこまでできるのか。

丹羽：今、福島県内でジェンダー視点をもって復興事業とかをやっているのは内閣府の事業と、それからこの男女共生センターがやっているのと。本来、県がその情報をひと通り持っていてもいいのだけど、まとめる気がないのでやっていない。

新井：女性たちの活動支援における効果がわからないのではないですか。一番はじめに鎌田さんが客観的に情報を集めて、調査して、分析して、情報提供してほしいというのをおっしゃっていたけど、そのためにも地域活動を支援するためには現状をしっかり調査することが必要では。

丹羽：民間と組んでやって思うんですが、パイロット事業だったり、モデル事業だったり、ひとつスタイルをつくって福島県のニーズに合うものができていくと、それを広げていくことができるのは県のセンターですよね。

新井：そうですね。震災と原発事故という大変大きな問題に取り組むには、何年後に何をするんだというのをしっかり持ってやるというのが大事なんですね。丹羽さんが言ったみたいに、団体と組んでプログラムを開発したら、何年後かにはそれを団体がやっていけるようにする。そのためには、個人や機関との顔つなぎもして、開催実績もつくって。そうしてまた次を開拓するという。そういう役割が必要とされているのかな。

市町村センターとの関係でいうと各センターの実績や優れた点を生かしながら、改善に向けて役割分担して連携していく方向で具体的にどことどうかかわっていくのか考えないと。

【福島のセンターに期待すること】

野依：ちょっと時間もなくなってきたので、まとめに入りますけど、福島のセンターに期待すること、福島の女性団体支援にセンターは何ができるのかということについて、お一人ずつご意見をお願いします。

鎌田：自分たちができないところの、歯がゆいところに手が届くみたいなサポートが今すごく必要だと思うので、そういった部分は本当に期待しております（笑）。

それと、次の世代がこういうテーマにどうやって向き合っていくのかというのは考えないといけないと感じています。次世代の問題とか、同世代の男性の問題とかというのは、気づいたときにはもう手遅れだったみたいな状態にならなくもないという危機感だけしかもっていないので、その辺を何かうまく絡めていけたらと思っています。

とは言っても、今の現実問題もすごく大変なことばかりだと思うので、今ある悩みも、今できることから取り組んでいきたい。全県でいるメリットとか、そういうところを生かしたところでやっていきたい。

丹羽：女性センターの持っているリソースって、さっき言ったみたいに、私たちがほしいものがいっぱいあるんですよね。スキルのある職員とか、広報のネットワークがあるとか、会場があるとか、募集するときはそのネットワークをぱっと見せればいいのだから。行政の窓口に通じていて、行政に話しが通じるとか、そういうセンターの有り難みが民間になってみてひしひしわかった。それって大きな財産なので、センターと組んで、じゃんじゃん使わせていただきたいと思うのです。

そのときに団体側のメリットとしては、ノウハウの共有なんですよ。さっき言った、つなぎの部分、「育て」のところと「お助け」のところがちゃんと揃ってそこにあるみたいな。

それと、センター職員の個の能力は高いのだけど、対外評価がないでしょ。それを外からことばを与えて評価して、こういう機能があると抽出してもらうと、なんか日々の仕事が雑事ではなくなるのではないでしょうか。再評価されるのでは。何をやっているのかというのが意外と棚卸しされていないのでね、忙しいだけでさ、わあっと同時並行で。そういうときにNWECから言葉をもらったり、研究者から言葉をもらったりすると、自己評価も上がるよね。

長沢：今日は皆さんのご意見を聞いて、本当に考えさせられることが沢山ありました。日頃から業務の中で感じているけどなかなかできないこともあります。今回の座談会のテーマは「女性団体支援のためのセンターの役割」ですが、地域の女性センターと、そこで働く職員のニーズについても国の機関としてのNWECに理解して支援していただけたらなとも感じました。現場の職員とセンターが直面している課題を聞き取って、研修テーマとして取り上げていただいたり、調査研究の課題にしていただいたりできるのかなと思いました。それから、さっき丹羽さんが男女共同参画センターの職員の能力は高いと言ってくださいましたが、その職員本人たちはおそらくやっていることの意味や意義がなかなか見えにくいんです。職員一人ひとりが果たしている役割とその意義について外部から評価してもらえると、職員として自信とやりがいをもって仕事が出来るようになると思います。

丹羽：そもそも、政府とかに対して女性センターは有用です、こんなことをやっていますという言葉がないのが現状だよね。

岡部：そうですね、見えるかたちで評価されるのはうれしいですね。これまでは県の青少年・男女共生課が、市町村の職員やセンターの担当者会議を開催していたのですが、近年はセンターと共同で実施しています。それで NWEC みたいに、男女共同参画担当課だけではなく、様々な市町村の担当者の方たちの研修機関にこのセンターがなっていけばいいなと思っています。

それと、いろんな団体の人たちとのつながりを職員の中でも見える化をしていく必要があると思うのです。自分たちがこれだけ多くの人とつながりがあって、こういうことができるんだというのを知って、またいろんな人や団体とつながっていく。そうして、センターがたくさんの団体やグループの人たちとつながっていることを県民の皆さんに知っていただけたら、何か困ったらセンターに言おうとか、センターに言えばだれか紹介してくれるのではないかということになって、センターが皆さんの活動をサポートする役割を果たしていきたいなとふうに思いました。

新井：みなさんから率直に話を聞いて、現実がわかるし、可能性も今日聞けてよかったなと思います。センターとはこうあるべきとか、職員の専門性はこうだとかということを理論的に整えても、現場の支援にはならないから、今日やはり話を伺ったことを聞いて何ができるかなというのを考えたいと改めて思ったのですね。

もうひとつは、被災者支援や復興支援はセンターの働き方も含めて変えることが求められているのだと思ったのですが、その第一歩はセンター職員が果たしている役割・仕事を見える化して、意義を明らかにしていくのが、方法になるかなと思います。そういうつもりで少しセンター職員の専門性を考えたいと思います。

野依：センターの位置づけは理想論みたいな図式で考えれば、三層構造、つまり国があり、県があり、市町村がありということだけど、その通りにはなかなかいくものでもないと思うのです。NWEC が実際に今いろいろな人や、女性センターの職員が研修にきているのですが、それの中継的な役割を県がやはりやってくれるとありがたいなと思うのですね。NWEC まで来れない人はたくさんいるので、県でやるみたいな。

あとブロック化できるといいかなとも思います。東北ブロック、関東ブロック、中国・四国ブロックみたいな感じですね。県の男女課にしてもセンターにしても、力量の差とかがあるので、ブロック化して力量の違いを平らにしてブロックごとに研修を実施するようなシステムができないかなと思います。

応援派遣についてですが、人材の振り分けは県が実施しても、その人材を育てるのは市町村なのではないかと思いますね。

Ⅲ　プログラム全体の成果と課題

本調査研究「地域課題の解決と女性の経済的自立に関する調査研究及びプログラム開発」は、地域の課題解決のための活動をおこなう女性の経済的自立をめざして取り組まれた。背景には、子育て不安や独居高齢者の問題など地域がかかえる課題解決のための活動（地域活動、社会活動）を担っているのは多くが女性たちであるが、そのほとんどは無償もしくは交通費等の実費で活動しているという現状があったからである。一方、1998 年の NPO 法の制定以来、増加の一途をたどる NPO 組織の中には、スタッフの年収が 300 万円以上の組織もある。こうした動向をふまえて、地域の課題解決のための活動（地域活動、社会活動）をおこなう女性に報酬が見込めないかという問題意識から本調査研究は始まった。

このような課題設定のもと、平成 22 年度は NPO や起業で働く女性を対象にアンケート調査を実施し、その実態把握をおこなった。また、平成 23 年度は先進事例として韓国のコミュニティ・ビジネスの事例調査をおこなった。こうした調査をもとに、平成 24 年度は、地域活動が女性の経済的自立につながることを趣旨とした講座を企画し、地域の女性センターで実施するというプログラム開発をおこなった。

以上のような調査研究の一環として「ほっと越谷」と「女と男の未来館」で講座を実施したわけであるが、以下、その成果と課題について整理する。

「ほっと越谷」、「女と男の未来館」ともにプログラムの趣旨は、地域活動が女性の経済的自立につながることであったが、「経済的自立」といえるまでのプログラムにするのは難しいということになった。そこで共通テーマを「地域課題の解決と女性の経済的自立に向けて」とした。それぞれの講座のテーマや目的、対象者については、本報告書のⅡ．１、２に述べた通りであるが、「ほっと越谷」「女と男の未来館」ともに、「経済的自立」よりも地域課題解決のための活動の意義を再確認し、地域活動を継続・発展させる方向へと向かった講座となった。「ほっと越谷」において、個人や団体の課題解決から「地域づくり」の講座へと発展したことや、「女と男の未来館」において、福島の現状を踏まえたうえで「これからの福島」へ一歩を踏み出すグループ討議になったことはそのことを示している。つまり、本プログラムが地域の人材育成になったという点は成果として指摘できよう。

さらに、「ほっと越谷」「女と男の未来館」ともに、本プログラムがセンター職員の人材育成の場となったことも成果として指摘できる。両センターとも、講座開始に向けて事前の打ち合わせを丁寧に行った。とりわけ「ほっと越谷」では、センター職員による登録団体に対して事前アンケートを実施し、越谷市の NPO の課題を把握したうえで本講座に入ったことは、地域性を反映させた講座となったといえる。また、事前アンケートの対象となった団体にとっても、アンケートを通して活動の意義と課題を認識する機会となったはずである。

また、「女と男の未来館」では、講座終了後に「センターの役割とは何か」をテーマにセンター職員と講座の事例報告者を交えて座談会を実施した。その座談会は、職員にとって

はセンター事業のふり返りになったと同時に、県のセンターに求められている役割を考えさせられる機会ともなった。いわば、センター職員の研修の場ともなったといえる。こうした講座の持ち方が、センター職員の人材育成、力量形成になったことは成果として指摘できる一方、こうした丁寧な講座を企画・実施できるための職員組織・勤務体制の整備が求められるところでもある。センター職員は、このように丁寧に講座を積み重ねて専門性を獲得していくのであり、獲得した専門性をさらに次の講座に活かして、さらなる専門性を獲得していくという長期的視野で職員の人材育成をおこなうという体制が必要である。

本プログラムは、地域活動が少しでも女性の経済的自立につながることをめざして企画・実施された。「ほっと越谷」「女と男の未来館」ともにそれぞれの形で地域課題の解決に取り組む団体への支援を可能にしたといえる。しかし、新井報告でも指摘されているように、本講座は団体への支援の契機となったに過ぎない。「ほっと越谷」においても、セラピー・メイクの団体を通して、弁当・惣菜づくりのワーカーズが連携して商店街の空き店舗を利用した地域づくりをしようという構想にまで発展した。しかし、ここからの支援が実際に求められているところで、この構想の実現に向けて、「ほっと越谷」が拠点となることが必要であろう。具体的にどのような支援の方法があるのかは、これからの実践によって明確になってくるであろうが、まずは、地域の女性センター/男女共同参画センターが収入につながるような地域活動の支援をおこなうということをセンター業務に位置づけることである。そのための、①場の提供、②人の配置、つまり担当職員の確保が何よりも必要なことだと考えるが、センターにおける職員の確保は、先ほどの人材育成の課題と同様、経費節減のため非常勤職員が増加している昨今、難しい側面もある。改めて、長期的視野で常勤の職員を配置することの必要性を指摘しておく。

次いで必要な支援は、③行政の担当者やNPOセンターなど実務的な組織や人とつなげることである。NPO の立ちあげや具体的な事業の実施などの支援は、地域の女性センター/男女共同参画センターでは限界がある。しかし、担当行政課やNPOセンターなどのリソースとのつながりは持っており、こうしたリソースにつなげる支援は可能である。あわせて、④他団体や人とつなぐことも必要な支援である。

以上、本調査研究の成果と課題の整理を通して、女性センター/男女共同参画センターによる女性の地域活動への支援と、さらに発展して「地域づくり」への参画の可能性が指摘できる。その一方で、そうした実践を可能にするには、センターの組織体制・職員体制が課題であることが改めて明確になったといえよう。

（野依　智子）

【特　論】

1. 韓国における女性就労支援の現状とその示唆するもの

―昨年度の韓国調査結果を基にして―

李　正連

はじめに

近年、韓国政府は女性のための就労支援体制の整備などを積極的に進めており、また社会的企業やコミュニティ・ビジネスを通して女性への再就労・起業支援のみならず、地域社会への参加・貢献なども促す取り組みを官民ともに行っている。

そこで、2 年計画の「地域課題の解決と女性の経済的自立に関する調査研究及びプログラム開発」の 1 年次研究として、平成 23 年度は韓国の女性就労支援について調査（2011 年 10 月 31 日～11 月 4 日）を行った。具体的な調査対象は、以下の通りである。

行政主導の機関・組織	①中央女性新しい仕事支援本部 ②京畿道女性能力開発センター ③京畿道女性ビジョンセンター ④瑞草女性人力開発センター ⑤忠北女性新しく働く支援本部（忠北女性新しく働くセンター） ⑥清州 YWCA 女性人力開発センター（清州女性新しく働くセンター）
民間主導の機関・組織	①（社）社会的企業支援ネットワーク SESNET（中間支援組織） ②（社）働く共同体・失業克服連帯 ③ウロンガッシ（コミュニティ・レストラン） ④チャン・チャン・チャン（コミュニティ・ビジネス：お惣菜の店） ⑤お姉さんの菜園（女性農業団体） ⑥（株）わたしたちがつくる未来（小学生を対象とした歴史遺跡ツアー）

調査結果の詳細は、調査報告書「韓国における女性への起業支援と地域の活性化」を参照していただきたい[1)]。本稿では、昨年度の韓国調査結果を踏まえながら、韓国の女性就労支援について概観するとともに、そこから示唆されるものについて検討したい。

（1）行政主導の女性就労支援体制

80 年代後半の民主化抗争を皮切りとして始まった民主化の動きは、韓国社会の多方面に大きな変化をもたらした。すなわち、1993 年にいわゆる「文民政府」（金泳三政府）が始まってから地方自治制度の復活をはじめ、金融実名制、生涯教育の重視など、政治、経済、教育、文化等における民主的な改革が行われたのである。

女性政策に関しては、1995 年 12 月「女性発展基本法」が制定され、男女平等のための

基本計画及びその実現のための法制化などが進められた。また、1998 年、金大中政府（別称「国民政府」）に入ってからは、大統領直属女性特別委員会が設置され、2001 年には女性部（現在、女性家族部）が設置されるなど、女性の地位向上や男女平等の実現のための法整備及び機関・組織の拡充が実施されていった。

韓国における女性の経済的活動を促進・支援する公的機関は、大きく二つある。一つは、女性の社会活動や文化、教育の場所として利用するために各地方政府が設置していた女性会館、すなわち、現在の「女性発展センター」である。女性発展センターでは、趣味・教養教育のみならず、最近は女性の就労支援のための教育や研修も行っている。例えば、昨年度の調査対象だった京畿道女性ビジョンセンター（旧京畿道女性会館）は、2010 年から就労支援のための研究を行いはじめており、経歴断絶女性（出産・育児やその他の理由により経済活動を中断した女性）を対象に就業マネージャー養成課程を設けている。そして、経歴断絶女性を高学歴女性と脆弱階層女性とに分けてそれぞれに合う職種を開発し、養成している。

いま一つは、従来全国各地にあった「働く女性の家」が「女性人力開発センター」へ改称され、女性へのより専門的な職業能力開発訓練（専業主婦や失業者向けの再就職訓練、起業プログラムなど）を通して教育支援から就労支援まで女性の経済的自立をバックアップしている。2013 年 2 月現在、全国に 51 ヵ所の女性人力開発センターが設置されており、これらのセンターは女性家族部の所管となっている[2)]。

2010 年からは、上記の両機関を拠点にして、2008 年に制定された「経歴断絶女性等に関する経済活動促進法」に基づき、結婚、出産、育児、家事などによって経済活動が中断された女性の就業のために相談及び教育訓練から就業あっせん及び事後管理にいたるまで ONE-STOP 就労支援サービスを提供し、求職希望女性に働き場を支援して女性の経済活動への参加を促進することを目的とした「女性新しく働く支援本部」事業が始まるなど、女性の再就労支援政策がより積極的に取り組まれている。すなわち、2010 年 3 月、財団法人韓国女性経済振興院が女性家族部から委託を受けて「中央女性新しく働く支援本部」を運営するようになるが、職業訓練と就労に専念していた女性人力開発センターと、女性の生活文化中心の教育から女性の就労支援までを強化している女性会館、そして大学の平生教育院等がその下部組織の「女性新しく働くセンター（以下、「働くセンター」という）」として指定・設置され、経歴断絶女性の再就労支援がより体系的・組織的に行われるようになっている[3)]。

中央女性新しく働く支援本部は、働くセンターの主な機能である経歴断絶女性の就労支援と事後管理の上向き標準化、予算の効率的な使用、またセンター間またはセンターと女性家族部との間をつなげる役割を担っている。そして、全国の 10 ヵ所を広域の女性新しく働く支援本部（例えば、昨年度調査対象の忠北女性新しく働く支援本部）として指定し、自治体との緊密な業務協力を通して、まだ働くセンターとして指定を受けていない機関に就業設計士などを派遣し、地域内の各種の女性関連センターを支援している。なお、2012

年 4 月現在、働くセンターとして指定されているところは 102 ヵ所である[4)]。

（２）民間主導の女性就労支援活動

韓国では 1990 年代以降非営利団体（市民団体）が急増しており、その影響力は多方面において大きく発揮されている。とくに、80 年代後半の民主化運動に深く関わった「386 世代」[5)] が牽引する団体の活躍は著しく、その活動内容は政治のみならず、経済、福祉、教育、文化、環境など非常に幅広い。また近年グローバル化や少子高齢化、新自由主義経済等によって社会格差が拡大されることから、人々の権利と生活を守り、より暮らしやすい地域をつくるために取り組む団体が多く、その中でも社会的弱者の権益と自立を支援し、「共に生きる」社会を目指す地域共同体づくり運動は注目できる[6)]。

韓国では 2007 年に社会的企業育成法が制定されるが、同法の制定までには約 10 年間の試行錯誤があった。1990 年代後半に韓国社会を襲った IMF 金融危機によって失業や貧困が社会問題として台頭し、1999 年には『国民基礎生活保障法』を制定して貧困層の支援対象をより拡大し、2003 年度からは政府が非営利団体とともに「社会的雇用創出事業」を始めるが、いずれも国家財政への依存度が高く、かつ短期及び低賃金の雇用が大半を占めることから、持続可能性が問われるようになる。その解決策として導入されたのが社会的企業であり、その後に制定された社会的企業育成法によって、各地では急速に社会的企業が増えていくようになる。2013 年 2 月現在、韓国内の社会的企業は 774 社である[7)]。

社会的企業育成法では、社会的企業を「脆弱階層に社会サービスまたは働き場を提供して地域住民の生活の質を高めるなどの社会的目的を追求しつつ、財貨及びサービスの生産・販売等営業活動を遂行する企業」（同法第 2 条第 1 項）と定めており、またここでいう脆弱階層は「自分に必要な社会サービスを市場価格では購入が困難な階層」（同法第 2 条第 2 項）と規定している。この脆弱階層には女性も多く、また社会的企業の業種には教育や福祉関係の社会的サービスが多いため、社会的企業で働く多くが女性であり、それ故、同法は女性への再就労支援という側面も併せもっている[8)]。

実際、女性の就労や経済的自立を支援する公的機関のみならず、多くの非営利団体においても社会的企業やコミュニティ・ビジネスを大いに活用して女性の就労をサポートしており、そのための教育や研修等も提供している。例えば、昨年度の調査で訪ねた「お姉さんの菜園」と「わたしたちがつくる未来」が女性たちによる、女性たちのための代表的な社会的企業といえる。「お姉さんの菜園」は韓国の食糧自給運動をしてきた女性連帯の活動を土台にして、韓国の種を守るとともに、都市の消費者と農村の生産者をつなげることによって、農村女性の生産者には生産共同体や共同作業という新たな働き方を通しての経済的自立を、消費者には安全で新鮮な食材を提供することを目的として設立されたものであり、「わたしたちがつくる未来」はいわゆる「経歴断絶女性」の再就労支援のために設立された社団法人「女性が作る仕事と未来」が高学歴女性のための職種として「わたしたちがつくる未来」（子どもの歴史文化体験学習を提供）という事業を開発し、この事業に関わる

女性たちの出資で全員が株主となって 2006 年からスタートさせた社会的企業である。

民間レベルにおける女性の就労支援活動としては、社会的企業のほかにコミュニティ・ビジネスもある。コミュニティ・ビジネスは地域における経済的・社会的問題の解決を求め、地元の人々がその地域の資源を生かして活動する事業体であるが、その代表的な例が昨年度調査した忠清北道にある「ウロンガッシ」というレストランと「チャン・チャン・チャン」というお惣菜屋である。両者とも食材は地元の農産物を使用し、高齢女性たちの熟練の調理技術を活かしたローカルフード運動(レストランとお惣菜の配達販売)を行うことによって、地域の高齢女性には働き場を、働く若いお母さんたちには家事負担の軽減を、地元の農家には経済的利益を、レストランの利用客には健康に良い安全な食事を提供している。

一方、民間レベルで社会的企業やコミュニティ・ビジネスなどの活動が円満に行われ、活発になった背後には、それらの活動を働きかけ、支援する中間支援組織の役割があった。例えば、上記の「ウロンガッシ」や「チャン・チャン・チャン」等のようなコミュニティ・ビジネス、そして同地域における数多くの社会的企業は、その地域で活動する社団法人「働く共同体・失業克服連帯」等のサポートがあって可能になったものである。また、社会的企業を始めようとする者、または運営する者や団体を支援するために 2007 年に設立された社団法人「社会的企業支援ネットワーク（SESNET、Social Enterprise Support Network）」という組織もある。SESNET の代表は社会的企業育成法の作成過程にも関わっており、同法に基づいてそのシステムを構築するには民間とのガバナンスが重要であると認識し、中間支援組織として SESNET を設立したという。実際、SESNET は自治体や大企業、大学等と連携しながら多様な社会的企業のモデルを開発し、サポートしている。

（３）官民協働の女性就労支援と地域の活性化

昨年度の調査地であった忠清北道という地域は、官民協働の女性就労支援において非常に参考になる地域といえる。韓国の女性就労支援において、一般的に官は法的基準と予算に基づいて主としてアイテム中心の就業支援を行っており、民間の場合は働く主体（女性）の視点や参加を重視する傾向がある。しかし、この官民両者が企画段階から協力し合うことによってこそ、女性就労の実態をより総体的に把握し、その実態に合う持続的な支援が可能になる。このような面から考えると、忠北地域における女性就労支援はその代表的な成功事例といえよう。忠北地域には「働く共同体・失業克服連帯 」や「清州 YWCA 女性人力開発センター」などの民間団体が中心となって組織した官民協働の「忠北女性就業支援協議会」が 10 年以上の活動蓄積を有しており、またそれを通して官民両者が長年信頼関係を築き上げてきたからこそ、今日企画段階からの官民協働の女性就労支援体制が構築できたと思われる[9)]。

民間の専門家が政府や自治体の就労支援事業に委嘱委員として加わって新しいアイディアやアイテムを提供したり、あるいは自治体が民間団体等に就労支援事業の一部を委託、

または補助金の支援を行うという従来のやり方だけでは、地域全体のニーズや現実を十分に反映することはできず、またそれは持続的な就労支援にもつながりにくい。とりわけ、女性就労支援においては女性に親和的な雇用環境の造成、仕事と家庭の両立、新しい雇用先の発掘などといった課題も多く、今後生活圏域内の多様な主体の協働による仕事と福祉とが連携された就労支援システムが強く求められる[10)]。このような女性への就労支援は、女性の経済的自立という効果にとどまらず、地域経済を活性化させるとともに、女性たちの地域への参加を促し、さらに働く女性への地域や企業等の関心を喚起させ得るものとして、今後地域活性化のカギとしても大いに期待できる。

おわりに

近年の日韓両国には共通の課題が多くみられる。とりわけ、少子高齢化による労働力確保の問題と長期化する経済不況による失業問題等は、女性の就労・再就労にも深く関わってくる懸案の問題である。労働力確保の問題と失業問題は一見二律背反するもののようにみえるが、少なくとも女性を労働市場へ誘導する、あるいは女性が労働市場へ進出せざるを得ない状況を提供している点において、両者は相通じる面がある。一方、単に家計維持だけではなく、女性の生活の質の向上や自己実現という面からも女性の就労問題は重要な課題となっている。

しかし、日韓両国とも依然として女性の働く環境や雇用条件は厳しく、改善すべき点が山積している。例えば、M 字型曲線を見せる日本女性の年齢別労働力率は近年緩やかになってはいるものの、「パートやアルバイト」などとして働く女性がすべての年齢階級でおおむね 3 割以上であり, 40 歳以上ではその割合が「正規の職員・従業員」を上回っている[11)]。また正規の職に就いても、仕事と家庭との両立が可能な勤労条件や支援は依然としてかなり不足しているのが現状である。女性の就労・再就労支援において最も重視されなければならない課題は、単に雇用の拡大ではなく、女性たちが安心して働き続けられる雇用条件や環境を整えることである。

昨年度の調査では、以上のように女性にとって厳しい雇用条件や勤労環境を改善して、女性たちが自分に合う仕事により就労しやすいように支援し、また仕事と家庭を両立させながら、快適に働き続けられるような条件整備を国及び自治体レベルのみならず、民間レベル、そして官民協働などの多方面から進めている韓国の先進事例について調査を行った。韓国調査から見えてきたものや示唆されるものは、以下の 3 つにまとめることができる。

まず、女性の就労のための支援体制を政策的に構築した点が挙げられる。従来韓国女性の就労支援を担っていた女性会館と女性の働く家をそれぞれ女性発展センター、女性人力開発センターと改称してより体系的な就労支援ができるように一新している。また全国的により支援を充実化し、地域によって支援にばらつきがないようにするため、女性家族部は女性新しく働く支援本部事業を立ち上げ、中央及び広域 10 地域には「女性新しく働く支援本部」を設置し、また全国にある女性発展センターや女性人力開発センター、大学など

の女性就労支援関連の機関・施設約 100 ヵ所を「女性新しく働くセンター」として指定して、女性就労支援のための政策的な組織体制を構築している。なお、「女性発展基本法」(1995 年)、「社会的企業育成法」(2007 年)、「経歴断絶女性等に関する経済活動促進法」(2008 年) などの制定にみられるように、女性への就労支援体制を支えるための法整備も行っている。

第二に、社会的企業やコミュニティ・ビジネスなどの民間レベルでの就労活動を支援するとともに、行政や企業等との連携を通して女性のための雇用条件や働く環境の改善を図る中間支援組織の役割が大きい点である。SESNET や「働く共同体」のような中間支援組織の働きかけや支援によって、実際女性の就労意欲や力量が高まり、また企業からの協力や支援も増え、さらに官民協働の支援体制が実現されている事例から示唆される点は多い。

第三に、女性が仕事と家庭を両立させながら、安心して働き続けられるためには、家族のみならず、職場や地域の理解と援助が必要であり、そのためには地域の様々な機関・団体とのネットワークが求められる。すなわち、女性就労支援機関が教育・保育施設や福祉施設、多様なサービスを提供する民間団体等とネットワークを構築することによって、女性だけではなく、その子どもや家族も様々な支援やサービスを受けられるようになる。それは、結果的に女性の物理的・精神的な負担を減らし、女性の働きやすい環境をもたらすが、さらに進んで考えれば、そのネットワークづくりは地域の活性化を導く契機にもなり得る取り組みとして、今後より注目すべき点である。

（注）

1) 独立行政法人国立女性教育会館「韓国における女性への起業支援と地域の活性化―韓国調査報告書―」2012 年 3 月。
2) 「女性人力開発センター」ホームページより。(http://www.vocation.or.kr/)
3) 「中央女性新しく働く支援本部」ホームページより。(http://www.wnewjob.or.kr/)
4) 同上。
5) 1990 年代後半の年齢が 30 代であり、民主化運動が盛んだった 80 年代に大学を通い、60 年代に生まれた世代。
6) 拙著「韓国における草の根の地域共同体運動とソーシャル・キャピタル」松田武雄編著『社会教育・生涯学習の再編とソーシャル・キャピタル』大学教育出版、2012 年、pp.146-163。
7) 韓国社会的企業振興院ホームページより。
(http://www.socialenterprise.or.kr/kosea/company.do)
8) 野依智子「韓国の女性の再就労支援としての起業支援」独立行政法人国立女性教育会館「韓国における女性への起業支援と地域の活性化―韓国調査報告書―」2012 年 3 月、p.13。
9) 拙著「韓国忠北地域における官民協働の女性就業支援と地域の活性化」 独立行政法人国立女性教育会館「韓国における女性への起業支援と地域の活性化―韓国調査報告書―」2012 年 3 月、p.37。
10) 同上、p.38。
11) 総務省統計局『平成 22 年国勢調査―産業等基本集計結果―』2012 年 4 月 24 日、p.8。

2. 今後のNPO、コミュニティ・ビジネスへの調査に向けて

藤本　隆史

本稿の目的は、今後のNPOおよびコミュニティ・ビジネスに関する調査（社会調査）の実施に向けて、主に統計調査の位置づけを整理するものである。

（1）調査研究のサイクル

社会調査の方法は統計的研究と事例研究あるいは量的調査と質的調査に分類される（盛山 2004）。盛山（2004）によると、統計的研究と事例研究は“複数の個体からなる個体群の全体”もしくは“諸個体の分布のしかた”に関心があるのか“一個の個体”もしくは“何らかの個体として切り取られた現象”に関心があるのかの違いであり、量的調査と質的調査は数量的データを扱うかどうかの違いである[1]。

何らかの調査研究が行われる場合には、主に調査の目的か調査に投入できる資源（費用やマンパワーなど）の関係から、統計的研究と事例研究のいずれかのみが実施されることが多い。しかし、調査対象の設定にもよるが、基本的に両者は補完関係にあると考えることができる。つまり、ある現象に関して複数の個体の分布を確認することと、特定の個体の状況を詳しく調べることの両面を行うことが、その現象をより深く理解することにつながるからである[2]。

統計的研究と事例研究の両方を実施する際に、いずれを先に行わなければならないということはない。調査しようとしている事柄について既にある程度の情報（先行調査・先行研究の結果）が得られる場合には、それらの知見をもとに新たな調査項目を加えて統計的研究を行い、その分析結果をより掘り下げる目的で事例研究を行うことが多いであろう。逆に、これまでにあまり情報が得られていない事柄について調査する場合には、いくつかの事例研究を行って、その事柄に関する情報をある程度蓄積してから統計的研究を実施することが多いであろう。そして、いずれの場合でも、時間的余裕などがあれば、また次のサイクルに進むことも可能である。

ただし、それぞれの調査で得られたデータを分析した結果は、調査者のみが保持するのではなく、何らかの形で公表され、調査対象者をはじめとして広く社会に還元されるべきである。

今回の調査研究は、平成22年度に国立女性教育会館が実施した統計的研究（国立女性教

[1] 盛山（2004：22－23）はさらに、「統計的研究の中にも質的データの分析が含まれうるし、事例研究の中にも量的データの分析が含まれうる」こと、「実際のデータには、質的でもあり量的でもあるものが存在する」ことを指摘している。
[2] このように複数の調査方法を用いることは混合研究法（mixed methods）と呼ばれる（轟・杉野 2010）。

育会館 2011）をベースにいくつかの事例研究の知見も踏まえてプログラム開発を行っている。そして、統計的研究で得られた知見がプログラムの一部として参加者に情報提供されている。それについて参加者から何らかのフィードバックがあったのかわからないが、そういったことが次の調査の種となることもある。

このように調査研究の結果が何らかの形で活用されることは、その調査研究自体の評価（有用性）につながることでもある。

（２）今後の調査に向けて

では、今後どのような調査を行っていけば良いだろうか。結論から言うと、ある事柄の様々な実態について網羅的に調べるよりも、項目をある程度絞って調査し、公表した分析結果を活用してもらえるようなものが望ましいだろう。ここでは主に統計的研究に関してNPO 法人の場合を考えてみよう。

NPO 法人を中心とした地域活動に関する実態調査は、全国レベルでも自治体レベルでも数多く実施されている。独自のテーマ設定によるものもあるが、網羅的に設問を並べているものが多い。特に自治体レベルの場合は対象が異なるが、集計結果は似たようなものになる。

例えば、前述の国立女性教育会館が実施した統計的研究（国立女性教育会館 2011）の主な知見については本報告書の「２．研究の背景」でも紹介されているが、例えば組織運営上の主な課題として、①「事業収入の増収」、②「後継者の確保・育成」、③「職員・社員の給与の引き上げ」があげられている[3]。

また、2011 年 9 月に日本政策金融公庫総合研究所が実施した全国調査[4]（日本政策金融公庫総合研究所 2012）では、国立女性教育会館（2011）とカテゴリの内容が異なるが「活動を行ううえで苦労している点」として複数回答でたずねている。その結果、回答比率の高い項目は順に①「事業収入の確保」（63.2%）、②「補助金・助成金の確保」（40.3%）、③「採算性の確保」（39.6%）、④「職員・ボランティアの育成」（37.3%）、「会費・寄附の確保」（37.1%）、⑤「職員・ボランティアの確保」（35.7%）となっていて、資金面や人材面の項目が上位を占めている。この他に、組織運営上の課題に関する項目も回答比率が相対的に高い傾向がある。

他にも NPO 法人を対象として実施された多くの調査において、NPO 法人の組織上の課題に関する設問があり、回答比率の高さの順位はそれぞれの調査結果によって異なるが、

---

[3] より具体的には、回答比率の高い順に「事業収入の増収」（62.9%）、「職員・社員の給与の引き上げ」（44.8%）、「後継者の確保・育成」（44.8%）、「職員やボランティアの専門能力の向上」（32.4%）、「資金の確保」（31.4%）となっていて、資金面、人材面の項目が上位を占める。

[4] 調査名は「NPO 法人の経営状況に関するアンケート」。特定非営利活動促進法に基づき、所轄庁より認証を受けている NPO 法人約 4 万 5 千法人から 1 万 5 千法人を対象に行ったものである。有効回答数は 3,419 件（回収率 23.3%）であった

相対的に回答比率の高い項目はおおむね共通している。

このような分析結果がある程度予測できるような調査項目が本当に必要かどうか、調査の目的に照らし合わせて考えてみた方が良いだろう。分析上、必要であれば入れなければいけないが、カテゴリの数をできるだけ減らすなど、回答者の負担を軽減する努力が求められる。

ただ、こういった課題のあり方は、個々の組織の状況（活動分野や活動内容、組織の規模など）によって様々であり、詳細は事例調査によって現場での状況を把握する必要がある。しかし、統計的調査でも“課題”を組織のライフサイクルの段階によって、設立間もない時期とある程度活動が軌道に乗った時期などに分けてたずねるなど、工夫することもできるだろう。

社会調査を実施するに当たって最も重要な課題の 1 つは回収率を上げることである。NPO 法人やコミュニティ・ビジネスに関する調査も例外ではなく、むしろより重要性が高い。これらの組織は小規模のところが多く、事務処理を行う人員も限られている状況で、自らの活動の事務処理に加えて次々と送られてくる調査の依頼に対応するのは相当の負担となる。したがって、必要以上に“とりあえず”あれこれ聞いてみるのは、回収率を下げるだけではなくて、調査対象にとって迷惑なことであり調査者の倫理的な問題と言える。

また、調査者の姿勢として、社会調査の基本に立ち返って、調査研究の計画段階において、今回の調査で何を知りたいのかをより明確にすること、そして分析方法や分析結果のイメージをある程度明確にするなどを心がける必要がある。

＜参考文献・資料＞

藤井辰紀，2012，「NPO 法人の存在意義と経営課題」『日本政策金融公庫論集』16：55－73.

国立女性教育会館，2011，「経済的自立につながる女性の課題解決型地域活動に関する調査研究」.

日本政策金融公庫総合研究所，2012，「NPO 法人の経営状況に関する実態調査」（2013 年 3 月 2 日取得，http://www.jfc.go.jp/n/findings/pdf/topics_120216_3.pdf）.

盛山和夫，2004，『社会調査法入門』有斐閣.

轟亮・杉野勇編，2010，『入門・社会調査法』法律文化社.

渡戸一郎，2011，「東京における NPO 法人の現状と課題（後編）」『ネットワーク』2011／10・11：26－31.

平成 24 年度

「地域課題の解決と女性の経済的自立に関する調査研究及びプログラム開発」

検討委員会

新井　浩子　　早稲田大学文学学術院非常勤講師（Ⅱ.２執筆）

李　　正連　　東京大学大学院教育学研究科准教授　(特論１.執筆)

常葉－布施　美穂　　恵泉女学園大学准教授（Ⅱ.１.（３）執筆）

藤本　隆史　　国立女性教育会館客員研究員（特論２.執筆）

野依　智子　　国立女性教育会館研究国際室研究員　（Ⅰ.Ⅱ.１.（１）（２）（４）（５）（６）Ⅲ.執筆）

平成 24 年度

「地域課題の解決と女性の経済的自立に関する調査研究及びプログラム開発」報告書

地域課題の解決と女性の経済的自立に向けて

発行　　平成 25 年 3 月

編集　　独立行政法人国立女性教育会館

〒355-0292　埼玉県比企郡嵐山町菅谷 728

TEL：0493－62－6479　(研究国際室)

URL：http://www.nwec.jp

印刷　　株式会社　石井印刷